

○吉野、大和國吉野郡にあり大和紀伊に跨れる深山

○二の狭間三四の時、吉野の小子なるへし杉の壇も同じ

○目を見合ふ、静を具せられしを見合はしてあるべしと云り

義經記卷五

生田目經徳校註

判官吉野山に入り給ふ事

都に春はきたれども、吉野はいまた冬こもる。いはんや年のくれなれば、谷の小川もつらゝゐて、一かたならぬ山なれども、判官あかぬ名残を捨てかねて、静をこゝまでせられたりける。さまざまの難所をこへて、一二の狭間、三四の時、杉の壇と云所まで、わけ入り給ひけり。武藏房申しけるは、この君の御供申し、不足なく見する物は、面倒なり。四國のとも、一舟に十余人取乗奉り給て、心やすくもなかりしに、此深山まで、具足し給ふこそ心得ね。かく御供しでありき。薩の里へ聞えなは、いやしき奴原が手にかゝりなとして、射ころされて、名をなかさん事は、口をしかるへし。いかゞはからず、片岡、いざや一先落ちて、身をもたすからんと申しければ、それもさす有べき。いかゞ、たと目なみ合せう、とこそ申しける。判官聞き



給ひ、くるしき事にぞ思召ける。静か名残を捨てとすれば、かれらは中をたかひぬ。又かれらか中を、たかはじとすれば、静か名残捨てがたく、とにかくに、心をくだき給ひつゝ、涙にひせび給ひけり。判官、武藏を召して、仰せられけるは、人々の心中を、義經しらぬ事はなけれども、わつかの契りを捨てかねて、これまた女を供しつるこそ、身なからくしげに心得ね、これより、静を都へ返さばや、と思ふはいかゝあるべき、武藏房、畏て申しけるは、是こそゆゝしき、御はからひに候ふよ。辨慶も、かくこそ申し度候ひつれども、恐れをなし参らせてこそ候へ。か様に思召立ちて、日の暮候はぬさきに、とくく御急き候へと申せば、何しに返さんといひて、又思ひかへさじといはん事も、侍共の心中、いかにぞやとおもはれければ、力及はず。静を京へ返さばや、と仰せられければ、侍二人、雑色三人、御供申すべき由を申しければ、ひとへに、義經に、命をくれたるところ思はんすれ。道の程、能々いたはりて、都へ歸りて、各はるれよりして、何方へも心

○雑色、召使ひの下男なり

○役の行者、役の小角とて奇術を行ひし人山伏の祖也  
○せんすれば、出家をせんすはな

にまかすべしと、仰せを蒙りて、静を召して仰せけるは、武運つきて、都へ返すにはあらず。これまでひき俱足したりつるも、心ざしおろかならぬ故、心くるしかるべき旅の空に、人めをかへり見ず。よくしつれども、よくくきげは、この山は、役の行者のみみろめ給ひし、菩提の峯なれば、精進深窟せでは、いかでか叶ふまじき峯なるを、我身の劫にをかされて、是までくし奉る事。神慮のおろれあり。是より歸りて、禪尼のものと忍びて、明年の春を待ち給へ。義經も明年の春、げに叶ふまじくは、出家をせんすれば、人も心ざしあらば、ともに櫛をもかへ、經をもよみ、念佛をも申さばや。今生後生、なと一所にあらざらむと、仰せられければ、静聞きもあへず。衣の袖を顔にあて、なくより外の事をなき。御心ざしつきせざりし程は、四國の波の上までも、くそくせられ奉る。契りつきぬれば、力及ず。只うき身の程こそ、思ひしりてかなしけれ。申すに付けても、いかにぞや、過ぎにし夏の比より、たゞならぬ事とかや申すは、さん



○六波羅、鎌倉の支廳にして京都の政事を行ふ役所

すへき物にも、はや定めぬ。世にかくれもなき事にて候へば、六波羅へも、鎌倉へも聞えんすらん。東の人は、情なきを聞けば、今に取り下されて、いかなるうきめをかみんすらん。只思召切て、是にていかにもなし給へ。御爲にも、身づからが爲にも、なか／＼生て物思はんよりも、かきくどき申しければ、たゞ都へ上り給へど、仰せられければ、御ひさの上に頭をあて、聲を立てず、なきふしける。侍共も是をみて、皆袂をぞぬらしける。判官びんの鏡を取出して、是ころ朝夕に顔をうつしつれ。見ん度に、義経をみると思ひて、み給へどてたひにけり。是給りて、今なき人の様に、むねにあてゝぞこかれける。涙の隙より、かくぞ詠じける。  
見るとても嬉しくもなします鏡、こひしき人の影をとめねば。  
とよみたれば、判官枕を取り出して、身をはなさで、是をみ給へど、かくなん  
いろげども行きもやられず草枕、しつかになれし心ならひに

○其數、數々なり  
○啄木、五色の糸を合せて組たる紐をいふ  
○しらべ、一箇の皮をしむる紐なり常に赤色多し

○讃岐守正盛、清盛の祖父

そののみならず、財寶を、其數取り出してたひけり。其中に、ことに秘藏せられたりける、朱檀の胴に、羊の革にてはりたりける、啄木のしらべの、鼓を給ひて、仰せられけるは、此鼓は、義経秘藏して持つるなり。白河院の御時、法住寺の長老の、入唐の時、二の重寶をわたされけり。名曲といふ琵琶、初音といふ鼓これなり。名曲は内裏にありけるが、保元の合戦の時、新院の御所にて、やけてなし。初音は、讃岐守正盛に給て、秘藏して持ちたりけるが、正盛死去の後、忠盛是を傳へて持ちたりけるを、清盛の後は誰が持ちたりけん。八島の合戦の時、わざとや海に入れられけん。又取りおとしてやありけん。波にゆられてありけるを、伊勢の三郎、熊手にかけて、取りあげたりしを、義経取て、鎌倉に奉るとすの給ひける。静なく／＼是を給りて持ちけり。今は何と思ふとも、とゞまるべきにあらすどて、是非を二つにわけり。判官思ひ切り給ふ時は、静思ひきらす。静思ひきる時は、判官思ひもひきり給はず。たがひに行きもやらず、歸り



○是非を二つに分けり、此の頃の語に分別なき事非は云々するといへり是非も考へず爲る由なり安は其と反して其も辨も是非もよく分別して同伴するを非とし別るゝを是とする故に二つに分るとは云ふ珍らしき云ひなまなり

○山彦、物の音の山にひきて聲ある如く聞ゆるをいふ

○つぎの音、侍の次の音にて景色を

ては行き、ゆきては歸りし給ひけり。峯に上り、谷に下りてゆき給ふ程に、姿の見え給ふ程は、靜はるく見おくりけり。たがひに姿のみえぬ程に、へたては、山彦のひく程にぞおめきける。五人の者をも、やうくになぐさめて、三四の時までは下りけり。二人の侍、三人の雑色をよびて、かたりけるは、各いかゞはからふ。判官も、御心ざしは、ふかく給ひつれども、御身のおき所なく思召して、行かたしれず失させ給ふ。我ども、麓に下り、落人供しありきては、いかでか、此難所をばのがるべき。是は麓近き所なれば、捨てたき奉るとても、いかにもして、麓に歸り給はぬ事はよもあらじ、いさや一先落ちて、身をたすけんぞよいひける。はぢをも耻としり。又情をも捨てまじき侍たにも、かやうにいひければ、ましてつぎの者どもは、いかやうにも、御はからひ候へかしと、いひければ、ある枯木のもどた、敷草しき、是にしばらく御休み候へとて、申しけるは、此山の麓に、十一面觀音のたせ給ひて、候ふ所あり。したしく候ふ

ものゝ、別當にて候へば、尋ねて下り候ふて、御身のやうを申し合せて、苦しがるまじきに候は、入り参らせて、山づたひに、都へおくり参らせ度こそ候へ。と申しければ、ともかくもよき様に、各はからひ給へとすの給ひける。

静吉野山に捨てらるゝ事

供したる者ども、判官のたひたる、財寶を取りて、かきけす様に予失にける。靜は日くるゝにしたがひて、今やくと待ちければ、歸りてこそ問人もなし。せめて思ひのあまりに、なくく枯木のもどを立ち出で、足にまかせてまよひける。耳に聞ゆるものとは、杉のかれ葉をわたる風、眼にさへぎるものとは、梢まばらにてらす月。そゝろに物がなしくて、足をはかりにゆく程に、高き峯に上りて、聲をたてためきければ、谷の底に、こだまのひよきければ、我を問ふかと思はれて、なくく谷に下りて見れば、雪ふかき道なれば、跡ふみつくる人もなし。又谷にてかなしむ聲の、あらしにたぐへて

○事よ、物いよことなり

○足をばかり、足をかきりになり

○こだま、木葉にて聞ゆる山彦に同じし

○たくへて、歸ひてなり



○垂氷、氷折なり  
○つら、は水の氷  
りてつらく見え  
ゆる故に云

○宇陀、大和國に

聞えけるに、耳をそばたて、聞きければ、かすかに聞ゆる物とては、雪の下行く、細谷川の水のれど、聞くにつらさうまうける。なくく峯に歸り上りてみければ、我があゆみたる跡より外に、雪ふみわくる人もなし。かくて谷へ下り、嶺にのぼりせし程に、はきたる履も雪にどられ。きたる笠も風にとらる。足はみなふみ損じ。ながる血は、くれなわをそぐがごとし。吉野の山の白雪も、そめぬ所ぞなかりける。袖は涙にしほれて、袂に垂氷そなかりける。裾はつららにちられて、かみをみるが如くなり。されば身たゆくして働ず。其夜はよもすがら、山路にまよひあかしけり。十六日のひる程に。判官にはなされ奉りぬ。けふ十七日のくれまで、獨山路に迷ひける。心の中こそかなしけれ。雪ふみわけたる道をみて。判官の近所にやおはすらん。又我すてし者をも、此邊にやあるらんと思ひつゝ、足をばかりに行く程に、やうく大道にぞ出でにける。是は何方へ行く道やらんと思ひて、まばらしたちやすらひけるが、後に聞けば宇

あり神武紀にも出  
たる古き地名なり

○道者、吉野へ参  
る修行者なり

○朝小舞、唐遊  
笑覽に朝小舞にて  
人に朝れん爲に舞

多へかよふ道なり。西をさして行く程に、はるかなる深き谷にともし火幽に見えければ、いかなる里やらん、賣炭の翁もかよはざれば、燗く炭竈の火にてもなし。秋のくれならば、澤邊の螢かともうたがふべき。かくて、やうく近付きてみければ、蘇王城の御前の、燈籠の火にてありける。さしいりて見たりければ、寺中には道者大門にみちくたり。靜是を見て、いかなる所にて、わたらせ給ふらんと思ひて、ある御堂のかたはらに、しばらく休み、これはいづくかと、人にとひければ、吉野の御嶽と申しける。靜嬉しき限なし。月日ころおほければ、けふは十七日、この御縁日やかし。たふとく思ひければ、道者にまされ、御正面に近付きて、拜み参らせければ、内陣外陣の貴賤。なかく數をしらす。大衆の所作の間は、くるしみのあまりに、きぬ引きかづきふしたりけり。つとめも果しかは、靜もおき居て、念珠して予居たりける。藝にしたがひて、思ひくのなら小舞する中にも、おもしろかりし事は、近江の國より参りける、拔樂伊勢の國



より出たる名を  
りとしり

○素絹、一種の絹の名なり素絹の三衣を穿したる装束したるを半装束云ふ半装束のみにて勻を切て珠数は切りてよむ  
○法樂、法會の音樂なるの時に佛に奉納の音曲を惣稱せり  
○舞障、今迄の舞をいふ舞障は其の舞を後述して歌むる如き意

より参りける白拍子も、一番まうて入りける。静これをみて、あはれ、我も打とけたりせば、丹精をばこぼらん。ねかはくは權現の、此度安穩に、都に返し給へ。又あかで別れし判官を、ことゆゑなく、今一たび引あはせさせ給へ。さもあらば母の禪尼と、わざと参らんとす祈りける。道者は皆下向して後、静正面に参りて念修して居たりける所に、若大衆の申しけるは、あらうつくしの女の姿や。たゞ人とも覺えず。いかなる人にてかはすらむ。あのやうの人の中にこそ、面白き事もあれ。いざやすめて見んとて、正面に近付きしに、素絹の衣をきたりける老僧の、はんしやうぞくの、珠數持ちて立しが、あはれ權現の御前にて、何事にも御入り候へ。御法樂候へかしとありしかば、静是を聞きて、何事を申すべきとも、おほえず候ふ。近き程のものにて候ふ。毎月に参籠申すなり。させる藝能ある身にて候はとこそ。と申しければ、あはれこの權現は、靈驗無双にわたらせ給ふ物を、且は、罪障懺悔のためにてこそ候へ。此垂

○非跡、佛家の語に佛の神と現して跡を止むるとの義

○文字うつり、今の尻と云る如き一種の曲なるべし

○ありのすさび云々、今舞障の唱す此頃の今様は必ず今の如く四段には限らざりしなり

跡は藝ある人の御前にて、丹精はこぼぬは、思ひに思ひを重ね給ふ。面白からぬ事なりとも、我身にしる事の程を、丹精をはこぼぬれば、悦に又悦びを重ね給ふ、權現にて渡らせ給ふ。是わたくしに申すにはあらず。ひとへに權現の詔宣にてすわたらせ給ふ。と申されければ、静是を聞きて、おそろしや、我は此世中に、名をわたるものすかし。神は正直の頭にやどり給ふなれば、かくてむなしからん事もれろれあり。舞までなくとも、法樂の事は、くるしかるまじ。我を見知りたる人は、よもあらじと思ひければ、物はたほくならひしりたりけれども、別して白拍子の上手にてありければ、音曲文字うつり、心も言もおよばれず。聞く人涙をながし、袖をしぼらぬはなかりけり。つひにかくすうたひける。  
ありのすさみのにくきだに、ありきのあとは戀しきに、あかではなれし面影を、いつの世にかは捨るべき。わかれの殊に悲しきは、れやのわかれ子のわかれ、すぐれてげにかなしきは、夫妻のわか



れなりけり

と涙のしきりにすゝみければ、きぬ引きかづきおしにけり。人々は是を聞き、音聲の聞き事かな。何さまたゞ人にてはなし。殊に夫をこふる人と覺ゆるや、いかなる人のつまとなり、是程心をこかすらんとす申しける。治部の法眼と申す人、是を聞きて、れもしろきころまどわりよ。誰と思ひければ、是こそ、音に聞えし静よと申しければ、同宿聞きて、いかにして見しりたるうといへは、一年都に百日の日でのありしに、院の御幸ありて、百人の白拍子の中にも、静か舞ひたりしこそ、三日の洪水なかれたり。さてころ、日本一といふ宣旨を下されたりしか。其時見たりしなり、と申しければ、若大衆とも申しけるは、さては判官殿の御行方をは、此人こそ知りたるらん。いさやとめて聞かん、と申しければ、各同心に、尤然るへしとて、修行の坊の前に、關をすゑて、道者の下向を待つ所に、紛れて下向しけるを、大衆とめて、静と見奉る。判官はいづくにおはしますぞ、ととひ

○法眼、僧官なり

○放逸、呵嘖せよとの註なり

ければ、御行方しらす候おとそ申しける。小法師原、あらゝかにいひけるは、女なりとも、所になおきや。たゞ放逸にあたれど、のゝしりければ、静いかにととして、かくさはやと思へとも、女の心のはかなさは、我身うきめにあはん事のおそろしさに、なくくありのまゝに予かたりける。されはころ、情ありける人にてありけるものをとて、修行の坊に取り入れて、やうくいたはり。其日は、一日とめて、明くれば馬にのせて、人をつけ、北白川へそおくりける。是は衆徒の情とそ申しける。

義經吉野山を落ち給ふ事

さて明ければ、衆徒講堂の庭に集會して、九郎判官殿は、中院谷におはすなり。いさや寄せて討取りて、鎌倉殿の、見参にいらんとぞ申しける。老僧是を聞きて、あはれ詮なき詮職かな。我ための敵にもあらず。さればとて、朝敵にてもなし。たゞ兵衛の佐殿のためには、不和なれ。三衣を墨に染めなから、甲冑をよるひ、弓箭を取りて、

○北白河へ云々、東國には静が從者  
に財寶を奪はれ吉  
野山に彷徨せしを  
大衆捕へて數日  
たはり置き鎌倉へ  
送りしを頼朝捕へ  
させ政子が申すに  
よりて死を有らぬ  
か岡にて歌舞せし  
由に記せり其の方  
正しかるべし

○三衣



戰場に出てん事、且は穩便ならず。といさめければ、若大衆、是を聞きて、それはさる事にて候へども、いにしへ治承の事を聞き給へ。高倉の宮御謀叛に、三井寺などを、くみし参らせ候ひしかども、山は心ざはり仕り、三井寺法師は忠をいたし。南都はいまだ参らず。宮は奈良へ落ちさせ給ひけるが、光明山の鳥井の前にて、ながれ矢にあたつて、かくれさせ給ひぬ。南都はいまだ参らすといへども、宮にくみし参らせたる谷によつて、太政の入道殿、伽藍をほろぼし奉りし事を、人の上と思ふべきにあらず。判官此山におはするよし、關東に聞へなば、東國の武士をも承りて、我山におしよせて、欽明天皇の、みづから末代までと建立し給ひし所、利那に焼きほろぼさん事、口をしき事にはあらずやと、申しければ、老僧達も此上はともかくもといひければ、其日を待ちくらし、明くれば廿日の、曉大衆詮議の大鐘を不撞きにける。判官は、中院谷といふ所におはしけるが、雪群山にありつみて、谷の小川もひそかなり。駒の蹄も通はねば、

○欽明天皇、廿九代の天子御謀は天國推開廣庭尊と申す

○利那、時をいふ梵語なり一強宿を十六利那とす

○谷の小河もひろかなり、小川も氷りて水流る、音もせざるを云ふ

○尋常の鐘過ぎて、あけの鐘をすまで後になり  
○かたのはつた以下の佛神の名字考へず

鞍飼具も付けず。下人どもを具せされば、兵糧米もたれず。皆人つかれにのみみて、前後もしらす臥しにけり。いまだ明ぼの、事なるに、遙の鐘に、鐘の聲のきこえければ、判官あやしく思召して、侍どもを召して仰せられけるは、尋常の鐘過ぎて、又鐘のなるこそ怪しけれ、此山の鐘と申すは、欽明天皇の御建立の、吉野の御嶽王権現とて、靈驗無雙の、かたのはつた。金剛童子、勝手ひめくりしき王子、さうけやこさうけの明神とて、幾をならべ給へる。山上なり。さればにや、修行を初として、衆徒、華飾世にこえて、公家にも武家にもしたかはす。必、宣旨、院宣はなくとも、關東へ忠節のため、甲冑をよるひ、大衆の詮議するかや、とすの給ひける。備前の平四郎は、自然の事候はんするに、一先落つべきかや。又返して耐死するか、腹を切るか、其時に臨んで、あわてふためきては叶はじ。よきやうに、人々はからひ申され候へや。と申しければ、伊勢の三郎、申すに付けて臆病のいたす所に候へども、見えたるしるしもな

○見えたるしるし、は是といふ効



能く無くして自害せ  
んは無益なりと  
○あしきのよから  
ん、前の熊野別當  
の條にも此理あり  
てうに注せり  
思ふに足來にて足  
の向くと云へる語  
にもあるべし

○結わかしら、今

くて、自害無益なり。衆徒にあうて。耐死腔なし。たゞ幾度もあし  
きのよからん方へ、一先落ちさせ給へやと、申しければ、常陸房是  
を聞き、いしくも申され候物かな。誰もかくこそ存じ候へ。尤  
と申しければ、武藏房申しけるは、曲事を仰せられ候ふやとよ、寺中  
の近所に居て、鐘に鐘の聞ゆるを、敵のよするとて、落ちゆかんに  
は、敵よせぬ。山々はよもあらじ。たゞ君はしばし是に渡らせおはし  
ませ。辨慶殿に罷下り、寺中の騒動をみて参り候はん。と申しけれ  
ば、尤さころありたけれども、御邊は、比叡の山にて予生したりし人  
なる。吉野十津川のものどもに、見しられてや有るらん。と仰せら  
れければ、武藏房畏つて申しけるは、櫻のもとに久しく候ひしかども、  
きやつばらには、見しられたる事も候はず。と申しもあへず。やが  
て御前を立ち、榻の直垂に、黒糸おとしの鎧きて。法師なれども、つ  
ねにかしらをうらさりければ、三寸ばかり生ひたるかしらに、揉鳥  
帽子に、ゆひかしらして、四尺二寸有りける、黒漆の太刀、かもめじ

云ふ鉢巻なり頭を  
結ふ故の名と云こ  
ゆ  
○かもしか、太力  
を佩きて御先の反  
り上りたるを關の  
尾の如きに見まし  
たるなり  
○つらぬき、靴な  
り  
○して、矢籠にて  
雙矢を指す服の類  
○矢はず下り、横  
さまに負ひたる休

○おはけにも候は  
ずは假にも無じと  
なり

りに予はきなしたる。三日月のごとくに、そりたる長刀つゝなにつき、  
熊の皮のつらぬきはきて、きのおかりたる雪を、時の落花の如く蹴  
ちらし、山下をさして下りけり。彌勒堂の東、大日堂の上より見渡  
せば、寺中騒動して、太衆南大門に隠隠し。上を下へ返したり。宿  
老は講堂にあり、小法師原は、隠儀の中をしさつて、はやりける。  
わか大衆のかね黒なるが、腹巻に袖付けて。甲の緒をしめ、しこの  
矢、はずさがりに負ひなして、弓杖につき、長刀手々にひつさげて、  
宿老よりさきに立ち、百人ばかり山口にこそ臨みけれ。辨慶是をみ  
て、あはやと思ひ、取つて返して、中院の谷に参りて、さわくまで  
こそかたからめ。敵こそ矢比に成りて候へ。と申しければ、判官是を  
き、給ひて、東國の武士は、吉野法師かと仰せられければ、鐘の衆  
徒にて候ふ。と申しければ、さては叶あまじ。うれらは所の案内者な  
り。すくやかものを先に立て、懸所に向つて追ひかけられて叶あま  
じ。誰か此山の案内を、知たる者あらば、さきだて一先おちんと、仰



○おまろげにても  
候はず、例にも無  
き事なり  
○みやのうつろひ  
云々、朝陽字など  
あるにや今考へが  
たし

○鎌足、天智天皇  
の時の人にて大國  
冠内大臣なり藤原  
氏の祖

せられける。武藏房申しけるは、此山の案内しる者、おぼろげにて  
も候はず。いてうをどふらふに、いわう山、かうふ山、しゆこうせ  
んとて、三の山あり。いちせうとは、かづらき、ぼだいとは、此山  
の事なり。役の行者と申し奉りし貴僧、精進深齋し給ひて、優婆塞  
の、みやのうつろひをもみしどりねをたてしかば、川せのなみに、  
やめうちけん、あがめ奉りし、正身の不動立ち給へり。去問此山  
は、不淨にてはおぼろげにても、人の入る山ならず。それも立入り  
てみる事は候はねども、あらく承はり候ふ。三方は難所にて候ふ。  
一方は敵の矢さき。西は深き谷にて、鳥のねもかすかなり。北は龍  
返しとて、おちとまる所は、山川のたぎりて流るゝなり。東は大和  
國宇多へつゞきて候ふ。こなたへ落させ給へやと申しける。

忠信吉野にとまらる事

十六人思ひく、おちかゝる所に、音に聞えたる強の者あり。先  
祖をくはしく尋ぬるに、鎌足の大國の御末、淡海公の後胤、佐藤の

○淡海公、鎌足公  
の子名は不比等と  
いふ過去の後近江  
國に封せしむる依て  
淡海公と稱す

○能登殿、平龍經

○信夫の里、奥に  
信夫郡あり里も其  
中なるへし

りたかゝ孫、信夫の佐藤庄司が二男、四郎兵衛藤原の忠信と云ふ侍  
あり。人もおほく候ふに、御前にすゝみ出で、雪の上にはさまづき  
て、申しけるは、君の御有様と、我らが身を、物によくくたさ  
れば、屠所におもむく羊、夫婦の思ひも、いかでか是にはまざるべ  
き。君は御心やすく落ちさせ給ひ候へ。忠信は是にとまらり候うて、  
龍の大衆を待ちえて、一方のおせき矢仕り。一先落し参らせ候は  
や、と申しければ、尤心ざしは嬉しけれども、御邊の兄次信が、八  
島の軍の時、義経がために、命を捨て、能登殿の矢さきにあたりて  
うせしかきも、是まで御邊のつき給ひたれば、次信も兄弟ながら、い  
まだ有る心ちしてこそ、思ひつれ。年のうちには、思へばいく程もな  
し人も命あり。我もながらへたらば、明年のむ月の末、二月初には、  
陸奥へ下らんずれば、御邊も下りて、秀衡をも見よかし。又信夫の  
里に、とよめおきし妻子をも、今一度見給ひかし。と仰せられければ、  
さ承り候ひぬ。治承二年の秋の比、陸奥を罷出で候ひし時も、今日



○勲功、武功なり

よりして、君に命を奉りて、名を後代にあげよ、矢にもあたり、死  
 けるを聞かば、供養は、秀衡が忠をいたすべし。高名度々に及ぼし、勲  
 功は、君の御はからひとこそ、申しふくめられしが、命を生きて、故  
 郷へ歸れと申したる事も候はず。信夫にと、め候ひし。母一人候ふ  
 も、其時を最後と計ころ、申し切りて候ひしか、弓箭とる身のなら  
 ひ、けふは人の上、あすは御身の上、皆かくこそ候はめ。君こそ御  
 心よわく渡らせ給ひ候ふとも、人々それよき様に、申させ給ひ候ひ  
 やと申しける。武藏房、これを聞きて申しけるは、弓矢取る者のこ  
 とば、給言に同じ。言葉に出しつる事を、ひる返す事は候はず。  
 たゞ心やすく、御いとまを、給りたしと申しける。判官、しばらく、  
 物をも仰せられざりけるが、やゝ有りて、をしむとも叶ふまじ。さ  
 らば心にまかせよ、と仰せられける。忠信承りて、うれしげに思  
 ひて、只一人、吉野の、奥にぞとまりける。されば、夕べには月星の  
 光をいたゞき、朝にはけうくんの霧をはらひ、玄冬をせつの冬の夜

○給言、勲命なり  
汗の加しとて返ら  
る例に云へり

○けんひ、剣の  
體にて太刃の面へ  
切形の體を彫りた  
るなり  
○ちはだ、太刃の  
地の膚にて磨きて  
鍔の美しく現は  
れしなり

も、九夏三伏の夏のあしたにも、日夜朝暮、かた時もはなれ奉らす。つ  
 かへ奉りし御主の御名残も、今計なりければ、日比は、坂の上の田  
 村丸、藤原の利仁にも、劣らじと思ひしが、さすがに今は、心ばそ  
 く予思ひける。十六人の人々も面々にいとまごひして、前後不覺に  
 成にけり。又判官、忠信を近く召して、仰せられけるは、御邊がは  
 きたる太刀は、すのながき太刀なれば、ながれに臨んでは叶ふまじ。  
 身の疲れたる時、太刀の延びたるは、あしかりなん。是を以て、最期の  
 軍せよとて、金作の太刀の、二尺七寸ありけるに、けんひをかきて、  
 ちはだ心もおよばざるを取出して給はりけり。此太刀すこそみしかけ  
 れども、身においては一物にて有るぞ。義経も身にかへて思ふ太刀  
 なり。それをいかにと云ふに、平家の兵ども、兵船をそろへし時に、  
 熊野の別當の、權現の御願を、申しおろして給りしを、信心をいたし  
 たりしによりてや。三年に朝敵をたひらけて、義朝の會稽の耻をす  
 ぎたりき。命にかへて思へども、御邊も身にかへれはとらする



○おん佩刀や、古に御取らしと云へる如く主公の御佩刀か故にはかして御稱するなり  
○大夫黒、飛騨五位に叙せられし日院より給ひし馬屬なる故に斯く名つたり次信忠死の時松陰に御りて御師の付に此馬を布施として引れり車東鑑に見えたり此を御給ひ候と云へるなり

ぞ。義經に添うたりと思へど、仰せられける。四郎兵衛、是を給はりていたゞき、あはれ御佩刀や、是御覽候へ。兄にて候ひし次信は、八島の合戦に、君の御命にかはり参らせて、候ひしかば、奥州の元衡か、参らせて候ひし。大夫黒といふ馬を給はりて、冥途までも乗り候ひぬ。忠信忠をいたし候へば、御秘藏の御佩刀、給りて候ひぬ、是を人のうへと思召すへからず。誰もく皆かくこそ候はんすれ、と申しければ、おのく涙をぞながしける。判官仰せられけるは、何事か思ひたく事のある。御いとま給はり候ひぬ。何事を思ひかくへしとも、覺え候はず。但未代までも、弓矢の瑕瑾なるへし。すこし申上げたき事の候へとも、おそれをなして申さず候ふ。と申しければ、最期にて有るに、何事にて申せ、と仰せを蒙り、ひざまづきて申しけるは、君は大勢にて落させ給は、それかしは、是に一人とゞまり候ふへし。吉野の修行おしよせ候うて、是に九郎判官殿の、わたらせ給ひ候ふかと、申し候はんに、忠信と名乗候は、

○清和の御號を、清和天皇の御號を、御名のおんことへるなり  
○純友門將、朱雀帝の時の叛臣

大衆は、極めたる華飾のものにて候へば、大將軍もおはしまさるらん所にて、わたくし軍益なしとて、歸り候はん事ころ、未代まで恥辱になりぬべく候へ。けふ計清和天皇の御號を預るべく候はん。とぞ申しける。尤さるべき事なれども、純友將門も、天命を背き参らせしかば、終にほろひぬ。ましていはんや、義經は院宣にも、かなはず、日比よしみありつる者ども、心かはりしつる上、力およはず。けふをくらし、ゆふべをあかすべき。身にてもなければ、つひに遁れなからん物ゆゑに、清和の名をゆるしけりと、いはれん事は他のそしりをばいかゞすべき。と仰せられければ、忠信申しけるは、やうにころより候はんすれ。大衆おしよせて候は、旅の矢を、さんぐに射つくし。矢だねつきば、太刀をぬき、大勢の中へみだれ入り。切つて後、刀をぬき、腹を切り候はん時、まことに是は九郎判官と思ひ参らせ候ひつれ。げには御内に、佐藤四郎兵衛と云者なり。君の御號をかゝ参らせて、合戦に忠をいたしつるなり。首を取りて、鎌倉



○清和天皇、人王  
五十六代の天子御  
尊は惟仁と申す文  
徳天皇の皇子なり  
此皇統より出て源  
氏の姓を給はりし  
を清和源氏と云ふ  
○緋威にて、紅糸  
にて威したる鎧  
○白星の兜、星を  
銀にて打ちたる也

○衆生、人間を云  
ふ梵語なり衆と共  
に生ずるもの體

殿の見参に入れよとて、腹かききり死なん後は、君の御號も何かく  
るしく候はん。とぞ申しける。尤最期の時、かやうにだに申しわけ  
て、死に候ひなば、何かくるしかるべき、殿原と仰せられて、清和  
天皇の御號を預る。是を現世の名聞、後の世のうつたへとも思ひけ  
る。御邊が着たる鎧はいかなる鎧ぞと仰せ有りければ、是は次信が  
最後の時、着て候ひしと申せば、それは能登守の矢に、たまらずと  
ほりたりし鎧の、願ひ所なし。衆徒の中には、聞ゆる勢兵の有りけ  
る。是を着よとて、緋おとしの鎧に、白星の甲をそへて、給りけ  
る。きたりける鎧をぬぎて、雪の上にさしおき、韃色をもに、たひ  
候へと申しければ、義經も着替ふべき鎧もなしとて、召すかへられ  
ける。まことにためしなき、御事に予有りける。さて故郷に思ひおく  
事はなきかと、仰せられければ、我も人も、衆生界のならひにて、  
なごか故郷の事を、思はざらん。國を出し時、三歳になり候ふ子を、  
一人とよめ置て候ひし。かの者に心付きて、父はいづくにやらん

○血をあへし、中  
古の朝に汗の出る  
を汗あゆるといへ  
り染なる血にて濡  
すを云ふと備ゆ屍  
に血を染ふるをか  
く云ふ藤のありし  
なるへし

と、尋ね候ふべきなれば、きかまほしく候へ。平泉出し時、君は、  
や、御立候ひしかば、雞のなきてとほるやうに、信夫をうちとほり候  
ひしに、母の所に立上り、いとまごひ候ひしかば、よはひおとろへ  
て、二人の子どもの袖にすがりて、かなしみ候ひし事、今の様に覺  
え候ふ。老のすゑになりて、我計物を思ふ、子共に縁のなき身なり  
けり。信夫の庄司に過ぎわかれ。たまく近付きて、不便にあたら  
れし、伊達のみすめにも過ぎ別れ。一かたならぬなげきなれども、  
和殿ばらを成人させて、一所にこそなけれども、國のうらに有りと  
思へば、頼もしくそ思ひつるに、秀衡、何と思召し候ふやらん。二人  
の子どもを、皆御供せさせ給へば、一旦の恨はさる事なれども、子ど  
もを成人せさせて、人数に思はれ奉るこそ、嬉しけれ。隙なく合戦に  
あふとも、臆病のあるまひして、父のかばねに血をあへし給ふなよ。  
高名して、四國西國のはてにおはすとも、一年二年に、一度も命あら  
ん程は下りて、見もし見えられよ。一人とよまりて、一人たえたる



○不便、もよ子な  
さにおくれ身の便  
りなきを訪ひ感る  
よりいへる語にて  
愛顧する事につ  
つしかり

だに悲しきに、二人ながら、はるくを別れては、いかせんぞとて、  
聲も惜しませぬ候ひしを、ふり捨て、さ承り候ふ。とばかり申し  
て、打出て候ふよりこのかた、三四年、終におとづれも仕らす。去年  
の春のころ、わざと人を下して、次信うたれ候ひぬと、つけて候ひ  
しかば、身もたえなんどかなしみけるが、次信が事は、さて力およ  
ばず。明年の春の頃にもなりなば、忠信が下らんと云ふ嗜しきよ。  
はや今年の月日も過よかしなと、待ち候ふなるに、君の御下り候  
は、母にて候ふもの、急ぎ平泉へ参り、忠信はいづくに候ふぞと  
申さば、次信は八幡、忠信は吉野にて、耐れけるを承りて、いかば  
かりなげき候はんずらん。それころ罪深く覺て候へ。君の御下り  
候うて、御心やすく、わたらせはしまし候は。次信、忠信が供養は  
候はずとも、母一人、不便の仰をこそ、預り度候へと、申しもはて  
ず。袖を顔におしあて、泣きければ、判官も涙をながし給ふ。十六  
人の人々も、皆鎧の袖をよぬらしける。さて一人とよまるかと、仰せ

○義經が者は、義  
經の人はの義なり  
○さやまらび、と  
よまる義色との義  
なり

られければ、奥州より、つれ候ひし若黨、五十餘人候ひしが、あるひは  
死し。或は故郷に返し候ひぬ。今五六人候ふこそ、死なんと申すげ  
に候ふ。扱義經が者は、とよまらぬかと仰せられければ、肥前、鷲の  
尾ころ、とよまらむと申し候へとも、君をみつぎ奉らせ給へとて、  
とよめ申さず。御内の難色二人も、何事もあらば、一所にて候ふと、  
申し候ふ間。とよまらびに候ふと、申しければ、判官聞召して、か  
れらが心ころ、神妙なれと仰せける。

忠信吉野山の合戦の事

それ師の命にかはりしは、ないこうちせうの弟子、せうくう阿闍梨、  
夫の命にかはりしは、とうふがせんぢになりけり。今命を捨て、主  
の命にかはり、名を後代に残すべき事、源氏の郎等にしくはなし、  
上古はしらす、末代にためし有りがたし。義經、今はゝるかたのひ  
させ給ふらんと思ひ。忠信は三澄目結ひの直垂に、緋おとしの鎧、  
白ほしの甲の緒をしめ。淡海公よりつたはりたる、つゝら井といふ

○さやまらび、と  
よまる義色との義  
なり  
○さやまらび、と  
よまる義色との義  
なり  
○さやまらび、と  
よまる義色との義  
なり



○あをほろ、鳥の翼の下にある羽をほろ羽といふ受は青色のほろ羽にて羽きて鏑矢とせしなり目は鏑の穴なり五六寸は鏑の大なるをいふ鏑は其元へ鏑をすけへ鏑に作る物故に馬股をすけし也此矢は征矢にて次に云々中光とは別也

○ちち喰、船度の一名なり此鳥を食すといへり

○佐藤の家、秀知卿の船にて別衛家と聞ゆ同じ佐藤氏なる西行法師家なりしも考へ合すべし

○は、短く、月の丈のみちかきなり

○西の刻、黄昏也

太刀、三尺五寸有りけるをはき、判官より給りたる、金作りの太刀を、はきそへにし、大中黒の、廿四指たる上矢には、あをほろ、鏑のめより下六寸計有るに、大のかりまたすげて、佐藤の家につたへて、さす事なれば、はちはみの羽を以てはいだる、ひとつなかさしを、いづれの矢よりも、一寸はづを出きて、指たりけるを、かしら高にねひなし。ふし木の弓の、ほこみじかく、射よげなるを持ち、手勢七人、中院の東谷にとままりて、雪の山を高くつきて、ゆづりは、榊葉をさんぐに切りさして、前には大木を五六本楯に取りて、櫓の大衆二三百を、今や今やと待ちたりけるが、されども敵はよせざりけり。かくて日をくらすべき様もなし。いざやおひつき参らせて、判官の御供申さんと、陣をさりて二町計尋ねゆきけれども、風はげしくて、雪ふりければ、其跡も皆白妙になりければ、力およばず、前の所へ歸りにけり。酉の時ばかりに、大衆三百人ばかり、谷をへたて、おしよせて、同音に陣をやりける。七人も向の杉山の中よ

○よせあし、容せ足なるべし浮足返を足なる軍陣詞と知られたり

○じんせい作り、舞ならす

○石打、雲の尾を廣げたる第一の羽を大名羽第二の羽を小石打といふ此尾にて羽きたるなり

○二所藤、月の本末ニヶ所を藤にて巻たるをいふ

○四枚楯、四枚合せたる楯板なり

○つかせ、直へ立てするを云ふ

り幽に陣をあはせけり。さてころ、敵愛に有とはしられけれ。其日は修行の代官に、川くら法師と申して、悪僧有り。よせあしの先陣をぞしたりける。法師なれども、尋常に立立ちたり。萌黄の直垂に、紫糸の鍔きて、三枚甲の緒をしめて、じんせい作りの太刀はき、石うちの征矢の、廿四さしたるを、かしらたかにかひなして、二所藤の弓の真中取つて、我におそろぬ悪僧五六人、前後にあゆませて、まつさきに見えたる法師は、四十ばかりに見えけるが、楯の直垂に、黒かはおとしの腹巻、黒漆の太刀をはき、椎の木四枚楯つかせ、矢比にやよせたりける、川くらの法眼、楯のおもてにすゝみ出て、大音あげて申しけるは、抑此山には、鎌倉殿の御弟判官殿の、渡らせ給ひ候ふよし承りて、吉野の修行ころまかりむかひ候へ。わたくしらは何の遠恨候はねば、一先おちさせ給ふべく候ふか。又討死あそばし候はんか、御前にたれがしか、御渡り候ふ。よきやうに申され候へやと、さかくしげに申したりければ、四郎兵衛是を聞きて、あら



○末の大事かな、鎌倉殿と和平せんには吉野の僧等の大事なるへしとあり

○いやしげに、小法師原と云はれし故なり

○水しつけ、道の名どころなり、原の邊をいふ

事もをろかや、清和天皇の御すゑ、九郎判官殿の、御渡り候ふとは、今まで御邊達は、しらざりけるか。日來よしみ有るは、とふらひ参らせたらんは、何のくるしきぞ。人の讒言によりて、鎌倉殿御中、當時不和におはしますとも、無實なれば、なにか慰召しなほし給はざらん。あはれ末の大事かな。子細をむかうてきけ。と云ふ御使、何者とか思らん。鎌足の内大臣の御すゑ、淡海公の後胤、佐藤左衛門のりたかには孫、信夫の庄司か二男、四郎、兵衛の尉、藤原の忠信と云ふ者なり。後に論ずるな、儲に聞け、吉野の小法師原と云ひひける。川くらの法眼、是を聞きて、いやしげにいはれたりと思ひて、惡所もきはらず。谷こしにかめきてぞかゝる。忠信是をみて、六人の者どもにあひて、申しけるは、是等を近付けてはあしかるべし。御邊達は、是にて敵の問答をせよ。うれかしは、中さし二三に弓持ちて、細谷川の水上をわたりて、敵のうしろよりねらひより、かぶら一つつかざりにてあらん。楯ついて居たる悪僧めが、首の骨か、おしづ

○大將軍、忠信をいふ強將の下に射卒なしの體なり

○やいて物を見よ、さし置て留めず我爲る體を見よなり目に物見せんまき云へる物にて軍記繪なり

○ふさし木、横に伏したる木なり

○三人張、二人抱めて一人かゝる體の強弓なり

○十三束、手にて十三握り三つおせは指三本伏せたる寸にて矢の丈をいふ

○手楯、手にもつ楯なり

けかを、一矢射て、のこるやつばらかひちらし。楯取つて打かづぎ、中院の楯に上りて、敵に矢を射つくさせ、身方も矢だねのつきば、小太刀をぬき、大勢の中へはしり入りて、切じに死ねやとぞ申しける。大將軍がよかりければ、付きうか若黨も、一人としてわるきはなし。残りの方ども申しけるは、敵は大勢にて候ふに、しろんじ給ふなよ。と申しければ、おいて物を見よとて、中さしかぶら矢おつ取り添へて、弓つゑつき、一ばんの谷をはしりあがりて、細谷川の水上をわたりて、敵のうしろの小暗き所より、ねらひよりてみれば、枝は夜叉のかしらのごとくなる、おし木あり。つとのぼりてみれば、弓手にあひつけて、矢さきに射よげにぞ見えたりける。三人ばかりに十三束三ふせ取つてはげ、思ふさまに引きつめ、かぶらもどへからりと引つかけて、しばしかためてひやうと射る、未づよに遠鳴して、楯つきたる悪僧の、引手の小がいなを、楯の板をそへて射きり、かりまたは手楯にたつ。矢の下にかはとぞ射たふしたる。大



○鷲の尾、三郎  
○備前、平四郎

○龍田、大和と河  
内の界  
○初瀬、大和の地  
名名所なり

衆大にあきれたる所に、忠信弓のもとをたゝいておめくやう。よし  
やものども、かつにのりて、大手はすゝめ。からめ手はめぐれや。  
伊勢の三郎、熊井太郎、鷲の尾、備前はなきか、片岡の八郎上、西  
塔の武藏坊はなきか、しやつばらにがすな。なほ影もなき人々を  
呼はり、おめきければ、川くらの法眼是を聞きて、まことや判官の  
御内には、これらころ、手にもたまらぬものどもなれ。矢をろに近  
付きては叶ふまじとて、三方へさつとちりにける。是を物に縦ふ  
れば、龍田初瀬のもみち葉の、嵐に散るに異ならず。敵おひちらし  
て楯取りてうちかつぎ、身方の陣へつきひかへて、七人は手楯のか  
げになみ居て、敵に矢をうつくさせける。大衆は、手楯をとられ、や  
すからぬ事に思ひ、精兵をすぐりて、矢面にたち、さんぐにいろ。  
弓のつるの音。杉山にひびく事おひたし。楯の面に矢の當る事、  
板屋の上におる霧、砂子をちらすことくなり。半時ばかり射ければ、  
矢を射ざりけり。六人の者ども思ひ切りたる事なれば、いつのため

○えせ、せといよ  
とく備かならぬ  
いよやうの詞

○脇腹、銀の脇腹  
なり

に命をばをしむべき。いさや軍せんぞ申しける。四郎兵衛、是を聞  
きて申しけるは、ただたきて矢だねをつくさせよ。吉野法師は、今  
日こそいくさの初なるらん。やがて矢もなき弓を持ち、ろの門弟と  
うすまひたらんする、すきを守り、さんぐに射はらひて、身方の矢  
だねつきば、打物の鞘をはづし、亂れ入りて、耐死せよ。いひもは  
てざりけるに、大衆所々にたすみて居たり。あはれひまや、いさ  
や、いくさせんとて、射むけの袖を楯として、さんぐにこそ射た  
りけれ。暫く有りて、うしろへさつと退きてみれば、六人の郎等も、  
四人はうたれて二人になる。二人も思ひ切りたる事なれば、忠信を  
射させじとや思ひけん。矢おもてに立ちておふせぎける。一人はい  
はう、禪師が射ける矢に、首の骨をいられて死ぬ。一人は治部の法眼  
がいける矢に、脇つばいられてうせにけり。六人の郎等皆うたれば、  
忠信一人になりて、中々えせ方人ありつるは、足にまきれてわる  
かりつるに、と云ひて、えびらをさぐり見ければ、とがり矢一つ、



○五枚甲、しころ五枚ある甲  
○後羽、太刀の鞘へ掛くる物なり  
○矢巻、羽の下の笑たる所をいふ

かりまた一つぞ、射のこして有りける。あはれよからん敵の來れがし。尋常なる矢一つ射て、腹きらんと予思ひける。川ぐらの法眼は、其日の矢合にしそんじて、何の用にもあはせで、其門弟三十人計、まばらにうすまひてたちたるうしろより、其たけ六尺計なる法師の、きはめて色くろかりけるが、装束も眞黒に予したりける。楯のひたたれには、黒革を二寸に切りて、一寸はたゝみて、たせしたる鎧に、五枚甲のためしたるを、猪頸にきなして、三尺九寸有りける、こくしつの太刀に、熊の皮の後輪入れて予はきたりける。さかつらゑびら、矢くばり尋常に、塗笑に黒羽をもつてはきたる矢の、ふとさは笛竹などのやうなるが、笑巻よりかみ、十四束にたふたふときりたるを、つみさしに指て、かまらだかにおひなし、とづゝみの弓の九尺計有りける四人張をつえにつき、ふしきにのぼりて申しけるは、抑此たび、衆徒のいくさを見候ふに、まことに臆地のなく、しなされて候ふ物かな。源氏を小勢なればとて、あざむきて、しそんせら

○大衆の大將軍、虎能自分の武勇を恃みて自負の詞なり

れ候ふかや。九郎判官と申すは、世にこえたる大將軍なり。召しつかはるゝ者、一人當千ならぬはなし。源氏の郎等とも、みなうたれ候ひぬ。身方の衆徒、大勢死に候ひぬ。源氏の大將軍と、大衆の大將軍と、運くらべのいくさ仕り候はん。かく申すは何者やと思召す。紀伊國の住人、鈴木黨の中に、さる者有りとはかねて聞召してもや候はん、以前に候ひつる、川ぐらの法眼と申す、不覺人には似候ふまじ。幼少の時よりして、腹あしき、えせものゝ名をえ候うて、紀伊國を追出だされて、奈良の都東大寺に候ひし、惡僧だつるくせ物にて、東大寺も追出されて、横川と申す所に候ひしが、それも寺中をれひ出たされて、川ぐらの法眼と申すものを頼みて、此二年ころ吉野には候へ。さればとて横川より出來り候ふとて、其異名を、横川の前司覺範と、申す者にて候ふが、中さし參らせて、現世の名聞と予んせうするに、御手はづ給りては、後世のうつたへところ、存じ候はんずれと申して、四人張に、十四束を取りてはげ、かなぐり引

○予んせうする、存せんすると云へる詞なりするは此頃の詞にて懸たるまでなり



○くつまき、儀をすけてまきたる所せめては儀を射込みてくつ巻の際まで立ちしなり  
○是程の弓勢、足利が剛弓を驚かせしなり  
○た、中、真中なり

○うらかいせず、鏡の裏へ貫けざるをいふ  
○主、鏡に射して着たる人をいふ  
○こうかい、弁歎

によつひきて、ひやうとはなつ。忠信弓杖つきて立ちけるを、弓手の太刀打をば射こし、うしろの椎の木に、くつまきせめてたつ。四郎兵衛是をみて、はしたなく射たる物かな。保元の合戦に、鎮西の八郎御曹子の、七人張に十五束を以て、あそばしたりしに、鎧きたるものを、射ぬき給ひしが、それは上古の事、未代にはいかでか、是程の弓勢有るべしとも覺えず。一の矢射らんじて、二の矢をばたと中を射んとや思ふらん。胸中射られて、かなはじと思ひければ、尖り矢をさしはげて、あてはさしゆるし、く、二三度しけるが矢比は少しとほし、風は谷より吹あぐる、思ふ所へはよもゆかじ。たとへあてたりとも大力にて有るなれば、鎧の下に、さねよき腹巻なぞや、着たるらん。裏かがせずしては、弓箭の疵に成りなん。主をば射ば、いそんずる事も有べし。弓を射ばやと予思ひける、太唐の養由は、柳の葉を百歩に立ちて、百矢を射けるに、百矢あたりけるとかや。我朝の忠信は、こうかいを五段に立てて、いはづさず。まし

○おなく、無念とちよふなり  
○うらひく、甚忽にひくなり  
○鳥打、弓の名どころにて未詳と振り皮さの中央なり  
○平家物語に鳥打を紙にて巻たりとあるも同所なり鳥打の名は環より出たり  
○前業、前世の宿効なり

○とびやうし、朝拍子にて拍り鐘と俗稱するもの

てゆんでの物をや、矢比はすこし遠けれども、何しに射はづすべきと予思ひけるが、はげたる矢をば雪の上になて、小がりまたをさしはげて、小引にひきて待つ所に、覺範一の矢を射そんじて、念なく思ひなして、二の矢を取つてつがひ。うしろひく所を、よつひいてひやうといる。覺範が弓の鳥うちを、はたといられて、弓手へなげ捨て、腰なる籠かなぐりすて、我も人も運のきはめは、前業限り有り。さらば、見参せんとして、三尺九寸の太刀ぬき、稻妻の櫛になりて、真向にあてり、おめきてかゝる。四郎兵衛も、思ひまうけたる事なれば、弓と旅をなげ捨て、三尺五寸のつら井と云ふ太刀ぬきて、待ちかけたり。覺範は象の牙をみかくがごとく、れめいてかゝる。四郎兵衛も獅子の忿をなして、待ちかけたり。近付くかどすれば、はやりきたる太刀の、ゆん手もめてもきはらず。なぎうちにさんく、に打ちてかゝる。忠信も、入りちがへてぞ切りあひける。打あはするおどのはためく事、御神樂のどびやうしを打つがごとし。敵は



○今は斯うと、今は斯限りの様

○うけ太刀、打つ事なして受るのみなるを云ふ弱りたる体なり  
○まじりける、眼はせけるの義

太刀を以て、ひらいたる脇の下より、つとよりて、荒鷹の鳥、やをく  
とらんとする様に、しころをかたおけ、みたれ入りて予切りたりけ  
る。大の法師攻めたてられて、額に汗をながし。今はかうぞ思ひ  
ける。忠信は、酒飯をもしたゝめずして、けふ三日に成りければ、う  
つ太刀もよわりける。大衆は是をみて、よしや覺範、勝にのれ。源  
氏はうけ太刀に見え給おぞ。すきなとらせそと、力をそへてぞきら  
せける。しばしはすゝみて切けるが、いかゞしたりけん。是もうけ  
太刀にぞ成にける。大衆是をみて、覺範こそうけ太刀に見ゆれ。い  
ざやおりあひて、助けんといひければ、尤さ有るべしとて、ありあ  
か大衆はたれくず。いわう禪師、常陸の禪師、主殿のすけ、やくい  
のかみ、かへりさかの小ひじり。治部の法眼、山科の法眼とて、究  
竟のもの七人、ためきてかゝる。忠信是を見て、夢をみる様に思ふ  
處に、覺範叱つて申しけるは、こはいかに衆徒、狼籍に見え候おぞ  
や。大將軍のいくさそば、はなちあはせてころ、物を見れ。おちあ

○末の生世の敵  
証のまての証

○内兜は兜の内  
にて面部をいよ中  
も大方耳の下の邊  
にあたり此邊尤  
通たる故なり  
○鉢つけはしころ  
の第一の板をいよ  
鉢へ取付る故なり  
○三四段、實記に  
云るは三四丈にあ  
たるなり

ひては、末代の環璫にいはんずる爲かや。末の世の敵と、思はんず  
る予やと申す間。たちあひたりとて、嬉しともいはざらん物ゆゑ  
に、たゝはなち合せて、物をみよとて、一人もたちあはず。忠信は  
にくし、きやつ一ひき、ひきてみばやと予思ひける。持ちたる太刀  
をうちありて、甲の鉢の上にからりとなげかけて、少しひるむ所を、  
はきろへの太刀をぬきて、はしりかゝりて、丁どうつ、内甲へ、太  
刀のきつさを、いれたりけり。あはやと見ゆる所を、かたむけて  
丁どつく、鉢つけを、したゝかにつかれれども、額には子細なし。  
忠信は三四段ばかり、ひいてゆく。大のあし木の有り、たまらずゆ  
らりと予こえにける。覺範おひかけて、むずとうつ。打ちはづして、  
あし木に太刀を打ちつらぬきて、ぬかんくとする際に、忠信三四  
段計、するくどゝひて、さしのぞきてみれば、下は四十丈計なる磐  
石なり。是予龍返しとて、人もむかはぬ難所なり。弓手もめても、足  
のたてどもなき、ふかき谷の、面をむくべきやうもなし。敵はうし



○草摺、錠の關より前に三枚後に四枚下りたる板なり

○寶物なり、つらわさといへる不比等公相傳に前云へる太刀なり

ろに雲霞のごとくに、つゞきたり。爰にて斬られたらば、あへなく討れたるといはいはれんする。かしてにて死たれば、自害したりといはんと思ひて、草摺つかんで、磐石に向て、あいでゑを出して、はねかりけり、二丈ばかりとび落て、岩のはさまに足ふみなほし。甲のしころおしのけてみれば、覺範も谷をのぞきてぞ、立ちたりける。まさなく見わさせ給ふぞや。返し合せ給へや。君の御供とだに思ひ参らせ候はし、西は西國の博多の津、北はほくさん、佐渡の島、東は蝦夷の千島までも、御供申さんするぞと、申しもはてず、あいでゑを出して、はねたりけり。如何したりけん。運のきはめかなしきは、草摺をふし木の角に引きかけて、まつさかさまに、どうところび、忠信が打物ひつさげて待つ所へ、のたのたところびてぞ、來りける。おきあがる所を、以てひらいて丁どうつ。太刀は聞ゆる寶物なり。腕はつよがりけり。甲の眞向はたと打ちわり。しやつらを、なから計ぞ切付けゝる。太刀をひけばがはとあす、おきんくとしけれども、

○東西を聞きければ、手負ひし兵にさくなるべし  
○我を助けよ、負傷者の忠信へ云へる語さきこゆ  
○むなしきやから、既に死したる者ありとの語

たゞよわりによわりて、膝をおさへてただ一聲、うんと計を最期にて、四十一にてぞ、死にける。思ふ所に切りあせて、忠信はしばしやすみて、おさへて首をかきおとし、太刀のさきにさしつらぬきて、中院が峯に上りて、大の聲を以て、大衆の中に此首見しりたる者や有る。音に聞えたる覺範が首をば、義經が取たるぞ、門弟あらば取て供養せよ、とらせんとて、雪の中へぞなげ捨ける。大衆是をみて、覺範さへもかなはず。まして我らこそあらんず。いさや籠に歸りて、後日の腔職にせんと申しければ、きたなし共に死なんと申す者もなく、此籠に同すぞと申し、大衆は籠に歸りければ、忠信ひとり吉野に捨てられて、東西を聞きければ、甲斐なき命生きて、我をたすけよと云ふ者も有り。むなしきやからも有り。忠信郎等共を見けれども、一人も息のかよふ者なし。比は廿日の事なれば、曉かけて出る月、宵はいまだ闇かりけり。忠信はかならずしなれざらん命を、死なんとせんも腔なし。大衆と寺中の方へゆかんとぞ思ひけ



○高紐、結纒の上  
にある太き紐なり

○負け給ひて、衆  
徒等が我の敗を隠  
蔽して云へるなり

○方丈、寺の正室  
なり

○うれんずらんは  
他へ轉らざる義を  
なり

る、甲をばぬいて高紐にかけ、みだしたる髪を取りあげ、血の付き  
たる太刀拭ひ打ちかづき、大衆よりさきに、寺中の方へぞゆきける。  
大衆是をみて、こゑなくにれめきける。寺中の者どもは聞かざるか  
や。九郎判官殿は、山のいくさにまけ給ひて、寺中へ落ち給ふぞ。そ  
れ遁し奉るなどぞれめきける。風はふく。雪はふる。人々是を聞付  
けず。忠信は大門にさし入りて、御在所の方をおし拜み、南大門をま  
つ下りに行きけるが、左の方に大なる家有り。是は山科の法眼と申  
す者の坊なり。さし入りてみれば、方丈には人一人もなし。厨のか  
たはらに、法師二人、兒三人居たり。様々の菓子どもつみて、瓶子  
の口包ませ、たたりけり。四郎兵衛是を見て、是こそよき所なれ。  
何ともあれ、おのれらが酒もりの銚子はそれんずらんと、太刀打かた  
げて、様の板をあらゝかにおみて、内につと入る。兒も法師もいか  
でかれどろかぞ有るべき。腰やぬけたりけん。取る物もとりあへず、  
高匍にして、三方へにげちる。忠信は思ふ座敷にむすど居なほり。菓

○提子盃より酒を  
ん越、提子の酒を  
提子にうつし暗め  
て盃より出して飲  
まんは時間移らん  
なり  
○提子のくびに手  
を入れて、此頃の  
提子は口大きなり  
と聞ゆ引を隠すは  
胸巻の素焼にて焼  
く焼れしなり

子どもひきよせて、思ふ様にしたゝめて、疲をやすめて居ける所に、  
大衆はこゑをききて、思ふ様にしたゝめて、疲をやすめて居ける所に、  
らん程に、時刻うつしては叶あまじと思ひ。酒に長じたる男にて、瓶  
子のくびに手を入れて、かたはらを引きてほして、うちのみて、甲  
は膝の上にし置き。少しもさわがず、火にて額をあぶりけるが、重  
き鎧は着たり。雪をばふかくこきたり、軍疲に酒はのみつ。火には  
あたる。敵のよせてれめくをば夢にもしらす、ねあり居たりけり。大  
衆は爰に押しよせて、九郎判官是に御わたり候ふか、出てさせ給へ  
と云ひける。聲におどろき甲を着、火うちけし、何にはとかるぞ心  
ざしの有る者は、こなたへ参れやと申しけれども、命を二つ持たら  
ばこそ、さうなくもいらぬ。たゞそとにうすまいて居たり。山科の  
法眼申しけるは、落人を寺中に入れて、夜をあかさん事も心得。我  
等世にだにもあらは、是程の家一日に一つづも作りけん。たゞ焼  
き出して、耐ちころせとこそ申しけれ。忠信は内にて是をきいて、敵



に焼き殺されて、有りといはれんずるは口をしかるべし。手つから  
 やけ死けるといはれんと思ひて、屏風一雙に火を付けて、天井へな  
 げあげたり。大衆是を見て、あはや内より火を出したるぞ、出で給  
 はん、所を射ころせとて、矢をはげ太刀長刀をかまへて、待ちかけ  
 たり。やきあげて忠信は廣様に立ちて申しけるは。大衆も萬事を  
 しづめて、是をきけ。まことに判官殿と思ひ奉るかや。君はいつか  
 落ちさせ給ひけん。是は九郎判官にてはわたらせ給はぬぞ。御内に  
 佐藤四郎兵衛藤原の忠信といふ者なり。わが打取り人の討取たるな  
 ど、後日にあらそあべからず。たゞいま腹をきるぞ、くびを取り  
 て、鎌倉殿の見参に入れよとて。刀をぬき、左の眼にさしつらね  
 く様に、刀をば鞘にさして、内へこんで歸り、はしり入り。内  
 殿のひきばし取りて、天井に上りて見ければ、東のとびのをは、い  
 まだやけざりけり。せき板をがはとあみはなし、とんで出でみけれ  
 ば、山を切りて、かけ作りにしたる樓なれば、山と坊との間一町あ

○ひきばし、引橋  
 にて外殿の内殿と  
 に通ふ處に假にし  
 たる欄と聞わたり  
 ○磯の尾、屋根の  
 端の木なり

まりには過ぎざりけり。是程の所を、はねそんじて、しする程の業  
 になりては、力およばず、八幡大菩薩、示現を垂れ給へど祈誓して、  
 めいごゑを出してはねたりければ、うしろの山へ、さうなくとび付  
 きて、上の山にのぼり。松の一ひら有りける所に鎖ぬぎ。甲の跡を  
 枕にして、敵のあわてふためく有様を、見て予居たりける。大衆申  
 しけるは、あらおそろしや、判官殿かと思ひつれば、佐藤四郎兵衛  
 にて有りけるもの、たばかられおほくの人をうたせつるこそやすか  
 らぬ、大將軍ならばこそ、くびを取りて鎌倉殿の見参にも入れ。に  
 くし、たゞおきて、焼殺せよとぞいひける。火もきえ、焔もしつま  
 りて後やけたるくびをなりとも、御坊の見参に入れよとて、手々に  
 さがせども、死骸もしれざりければ、やけたる首もなし。扱こそ大  
 衆は、人の心は、かうにても、かうなるべきものなり。死しての後  
 までも、かばねの上の恥を見せしして、塵灰に焼うせたるらめと申  
 して、寺中にて歸りける。忠信其夜は、藤王權現の御前にて夜をあ

○かうにてもかう  
 なるべき、剛の上  
 にも剛にあるべき  
 ものなり







ちにけり。跡をかへりみければ、武藏坊も君も、いまだもとの所に、はたらかずして居給ふ。我等が是までおつるに、此人やとまゝり給ふは、いかなる事をか思召し候ふやらんと、申しもはてざりけるに、二合の長櫃を、一合つと取りて、東の磐石にひけて、なげおとし。つみたる菓子をば、雪の底に、心しづかにほり埋みて予、立ち給ひける。辨慶は、はるかのさきにのひたる。常陸坊におひつき各あどをみるに、くもりなき鏡を見るがごとし。誰も命をしくば、靴をさかさまにはきて、おち給へやと予申しける。判官是を聞き給ひて。武藏坊は奇異の事を、常に申す予とよ。いか様に靴をば、さかさまにはくべき予と、仰せければ、武藏坊申しけるは、扱ころ君は梶原が舟に、逆櫓と云ふ事を申しつるに、御笑ひ候ひつると申せば、まことに逆櫓と云ふ事をしらす。まして靴をさかさまに、はくといふ事は、今こそ初てきけ。さらば善悪はきて、未代の瓊瑤にもなるまじくは、はくべしと予の給ひける。辨慶さらばかたり申さんとて、

○十六の大國云々、佛敎にて印度の事をいへり  
○かくさん國、某散國と書きて佛家より盛國の事をいへる詞なり

十六の大國、五百の中國無量の予くさん國までの、代々の御門の次第々々、其合取の櫓をかたり居たれば、敵は矢比に近付けども。眞國に立ならびて、しづくとぞ語らせて聞給ふ。十六の大國の内、西天竺と覺えて候ふ。しらない國はらない國と申す國あり。彼國の境に、かうふ山と申す山あり。麓に千里の廣野あり。此かうふ山は、寶の山にて、たやすく人をも入れざりしを、はならい國の王、此山をとらんと思召して、五十一萬騎の軍兵を々して、しらない國へ打ち入り給ふ。彼國の王も、賢王にて渡らせ給ひける間、かねて是をしり給ふ事有り。かうふ山の北のこしに、せんのはらと云ふ所有り。是に千頭の象有る中に、一の大象有り。國王此象を取て飼ひ給ふに、一日に四百石をはひ。公卿賤職有りて、此象をかひ給ひては、何の益かましますさん。と申されければ、御門の仰せには、歩合取にあふ事、なからんやと宣旨をくだし給ひしに、思ひの外に此軍出來にければ、武士をひけられず、此象を召して、御口を象の耳にあて、朕が思



を給ふなど、宣旨をふくめて、敵陣へはなち給ふ。大象いかりを  
 なして、惡象なれば、天に向ひて一聲吠えければ、大なるほら貝を、  
 千揃へて吹がごとし。其聲骨髄にとほり、たどへがたし。左の足を  
 出して、そなたをふみければ、一度に五十人の武者をふみころす。七  
 日七夜の合戦に、五十一萬騎みなうたれぬ。供奉の公卿侍三人。上  
 下十騎に討ちなされ、かうふ山の北のこしへ、にげこもり給ふ。比  
 は神無月廿日あまりの事なれば、藪に紅葉ちりしきて、むらく雪  
 のあけぼのをふみしたきて、おち行く。國王御身をたすけんために  
 や靴をさかさまにはきて、おち給ふ。さきは跡、あとはさきに予な  
 りにける。おひ手是をみて、是はいわうの賢王にてましますば、い  
 かなるはかりことにてや有らん、此山は虎おす山なれば、夕日西に  
 かたぶきては、我等が命もはかりがたしとて、藪の里にぞ歸りける。  
 國王御命をたすかり給ひて、我國へ歸りて、五十六萬騎の勢を揃へ  
 て、今度の合戦に打かつて、悦かさね給ひしも、沓をさかさまに、は

○法相三論、佛書  
 の名但し法相宗と  
 云るあり興福寺  
 なりなり

き給ひしいはれなり。異朝の賢王もかくこそましますしが、君は本  
 朝の武士の大將軍、清和天皇の、十代の御末になり給へり。敵をこ  
 らば我をこらされ。敵をこらすば、我をこれと申す、本文あり。人  
 をばしるべからず。辨慶においてはとて、眞先にはいてぞすゝみけ  
 る。判官是をみ給ひて、奇異の事を覺えける物かな。いづくにて是  
 をばならひけるぞと、仰せられければ、櫻本の僧正のもとに候ひし  
 時、法相三論の遺教の中に、かきて候ふと申しけり。あはれ文武二  
 道の碩學やとぞ、讀させ給ふ。武藏坊、我より外に、心も強に、案  
 もおかき者あらじと、自稱して、心しづかにれちけるに、大衆程な  
 くぞつゞきける、其日の先陣は治部の法眼ぞしりたりける。衆徒に  
 あうて申しけるは、こゝに、不思議の有るはいかに、今まで谷へ下  
 りてある跡の、いまはまた、谷よりこなたへ來る、いかゞと申しけ  
 れは、後陣にいわう禪師と云ふもの、走りよりて是れをみて、さる  
 こと有らん。九郎判官と申すは、鞍馬そだちの人なり。文武二道に



こえたり。つきろふ郎等、一人當千ならぬはなし。其中に法師二人有り。一人は園城寺の法師に、常陸坊海尊とて、修學者なり。一人は櫻本の僧正の弟子、武藏坊と申すは、異朝我朝の合戦の次第を、めいゝくに存じたる者にて有る間、かうお山の北のこしにて、一つの象に責たてられて、沓をさかさまにはきおちたる、はらない國のみかきの先例をひきたる事も有らん。すきなあらせど、たゝおひかけよや、と申しけり。矢比になるまではおともせで、近付きて同首に鬨をぞつと作りけれん、十六人一同におどろく所に、判官、もどよりいふ事をきかで、どの給ひければ、きかぬよしにて、しころをかたひけて、もみにもうでず落行きける。こゝに難所一つ有り。吉野川の水上、しら糸の瀬とぞ申しける。上を見れば、五丈計なる瀬の、糸をみだしたるがごとし。下をみれば、三丈れき／＼とある紅蓮の瀬、水上はとほし。雪のしたゝりに水量まさりて、瀬々の岩間をたゞく、波ほうらいをくづすがごとし。こなたも、ひかひも、水の面

○吉野川、大和國吉野郡にありて今も大河なり吉野山とは少し離れたり

は二丈ばかりなる磐石の、屏風を立たるがごとし。秋の末より、冬の今まで、降つひ雪はきえもせで、雪も氷もひとへに箔をのべたるがごとし。武藏房は人よりさきに、川のはたに行きてみれば、いかにして、ゆくべきとも見えす。されども人をいためんとや思ひけん。又例のことなれば、是程の山川を、遅参し給ふか。これこし給へやとぞ申しける。判官の給ひけるは、なにとして是れをばこすべきや。たゞ思ひ切て腹きれやとずの給ひける。辨慶申しけるは、人をばしるべからず。武藏はとて、川のはたへよりけるが、左右眼をおさぎ祈誓申しける。源氏を守り給ふ、八幡大菩薩は、いつの程にわが君をば、念れ参らせ給ふや。安穩に守り納受し給へと申し。目をひらき見たりければ、四五たんばかり下に、興ある節所有り。はしりよりてみれば、兩方さし出たる山、さきのごとくに、水はふかくたざりておちたるが、むかひを見れば、岸のくつれたる所に、竹の一ひら生ひたる中に、殊に高くおひたる竹三本、末はひとつにひす



○環珞、佛書より出たり莊嚴經に大結寶環珞紅真珠環珞等あり

○くれなる未濃、體の下を濃き紅にし上へ行くに従ひて段々薄くしたる絨し毛なり

ぼれて、日比ふりたる雪に押されて河中へたわみかゝりたるが、竹の末には環珞をさげたるに似たる垂氷がかりける。判官も是をみ給ひて、義經、とてもこえつべしとは、覺えねども、いでや瀬ふみしてみる。越しそんじて、川へいらば、誰もつゝきて入れよと仰せければ、さ承り候ひぬと申しける。判官其日の装束は、赤地のにしきの直垂に、くれなる未濃の鎧に、白ぼしの甲の緒をしめ。金作りの木刀はき。大中黒の矢、かしら高に負ひなし。弓に熊手を取りろへ。弓手の脇にかいはさみ。川のはたにあゆみよりて、草摺りからむで、しころをかたふけ。ぬいごゑを出してはね給ふ。竹のすゑに、がばとゝび付きて。さうなくするりとわたり給ふ。草すり濡れたりけるを、さつくと打はらひ、そなたより見つるよりは、ものにてはなかりけり。つゝけや殿原と仰せをかうあり、こす物はたれく。片岡、伊勢、熊井、備前、鷲の尾、常陸坊、雑色駿河次郎、下部に喜三太、是等を初として、十六人が、十四人はこえぬ。いま

○けんご、叶うまじ、決して叶うまじの意、香君にて人を嫌めたる詞○ひりに、是非とも云に同じ

二人はひかひに有り。一人はねの尾の十郎。一人は武藏坊なり。根尾こえんとする所に、武藏坊射向の袖をひかへて、申しけるは、御へんの膝のあるひやうをみるに、けんご叶うまじ。鎧ぬぎて越せよやと申しける、皆人の着てこゆる鎧を、それがし一人ぬくべきは、いかにと云ひければ、判官是を聞き給ひて、何事を申すぞ辨慶、とゝひ給へば、根尾に鎧ぬぎてわたれと申し候ひし、と申せば、わがみかはからひに、ひらに脱がせよと仰せける。みな人は三十にもたらぬ健者どもなり。根の尾は其の中に老体なり。五十六にぞ成にける。理をまけて、みやこにとまれと、度々仰せけれども君にてわたらせ給ひし程は、御恩にて妻子をたすけ。君又かくならせ給へば、我都にとままりて、初て人に追従せん事なしとて、思ひ切りてどこれまで参りける。仰せにしたがひて、鎧に具足をぬき置き、かくても叶ふへしとも覺えねは、弓の弦をはづあつめて、一つにひすび。端をひかひになげこして、そなたへひけ。つよくひかへよ、ちやう



○へんしうするが、個執するにて候じといふ様なる

○あけ巻、甲の後に付たる縛角結びにせし様なり

と取りつけとて、したのもろきふちを、水につけてぞ、ひきこしける。辨慶ひとり残りて、判官の越え給ひつる所をばこさす。川上へ一たんばかり、上りて、岩かたにありつみたる雪を、なきなたの柄にて打はらひて、申しけるは、是程の山川をこえかねて、あの竹に取付き。がたり、びしりと、し給ふこそ見苦しけれ。そまのき給へ。此川さうなくはねこえて、見参にいらんと申しければ、判官これを聞き給ひて、義経をへんしゆするろ、めなみやりそと仰せられて、つらぬきの緒のとけたるを、ひすばんとて、甲のしころをかたふけておはしける時ぬいやくといふ聲を聞えける。水ははやく、岩波にたきかけられ、たゞなかれに、なかれ行く。判官是を御覽して、あはやしそんしたるはと、仰せられて、熊手を取りなほし、川はたにはしりより来て、とほるあげまきに引かけ、是みよやと仰せられければ、伊勢の三郎つとよりて、熊手の柄をひすと取り。判官さしのそきて見給へは、鎧きて、人にすくれたる、大の法師を、熊手にか

○けふの命、希有の命なり  
○くしのはれ、解き難し試にいはと孔子のさもありはあれと申す事との難にや然らば敗むるに備る事勿れと云へる古語を引したるあらんか拍よく考ふべし

て、中にひつさげたりければ、水たふくとしてぞ、ひきあげ、るけふの命生きて、御前に、が笑して予出きける。判官是を御覽して、あまりにくさに、いかに口のきいたるには似ざりけり、と仰せられければ、あやまちは常の事、くしのはれと申す事候はずやと、狂言をぞ申しける。昔人は思ひく、に落ちゆけども、武藏坊はかちもせず。一村有りける竹の中に分け入りて、三本おひたる竹の本に、物をいふ様にかきくとき、申しけるは、竹も生有る物、我も生ある人間、竹は根ある物なれば、青陽の春も来たらば、又子をもさしかへて、みるべし。我れらは此度死ては二度歸らぬならひなれば、竹をきる予。我らが命にかはれとて、三本の竹を切り、本には雪をかけ。末をば水にかけて予出したりける。判官におひ付き参らせてあとをか様にした、めたると申しける。判官跡をかへりみ給へば、山川なればたぎりておつるむかしの事を思召し出しかんじ給ひける。歌を好みしきよちよくは舟に乗りてひるがへし。笛を好みしほうちよは竹



○腹巻に袖ついで、腹巻は元交紐の下に着る爲の物なれば袖はなきを此時腹巻を袖の代りに用ひし故に袖を臨時に付たるなり

に乗りてくつがへす。大國の穆王は、壁に上りて天にあがる。ちやうはくばうは浮木に乗て、こかひをわたる。義經は竹葉に乗て、今の山川を渡る予との給ひて、上の山に予あがり給ふ。ある谷の洞に風少しのそけき所有り。敵川をこえは、下り矢さきに一矢いて、矢だねつきば腹をきれ。きやつばら渡りえずは、嘲弄してかへせやとぞ仰せける。大衆程なく押しよせ。かしてうぞ越ぬ給ひたる。爰やこゆる。かしてやこゆると、くちくくにのしりけり。治部の法眼申しけるは、判官なればとて、鬼神にても、よもあらじ。越えたる所は有らんと、向をみれば、なびきたる竹を見つけて、さればこそと思ひて、是に取付きこえんには、たれかこわざらん。よれやものどもとぞ申しける。かね黒なる法師、腹巻に袖付きたるが、手ばこ長刀脇にはさみて、三人手に手を取りくみて、ゐいこゑを出してぞ、はねたりける。竹の未に取り付きて、ゐいやと引きたりければ、武藏がたゞ今本を切てさしたる竹なれば、引かづくぞ見えし。岩波にた

たゝきこめられて、二度とも見えす、底の水層となりけり。向には、上の山にて十六人、同音にぞつと笑ひ給へば、大衆あまりやすからずして音もせず。ひたかのせんじ申しけるは、是は武藏坊といふ、をこの者めが所爲にて有る予。しばらくゐては、中々をこの者がまし。又水上をめぐらんずるは、日數をへてころ、めぐらんずれ。いざや歸りて詮議せんぞぞ申しける。きたなし。ついでにはね入て、しなんといふもの、一人もなし。尤此義につけやとて、もとの跡へ予歸りける。判官是を御覽して、片岡を召して仰せけるは、吉野法師にあてて、いはんずるやうは、義經が此川を越えかねて有りつる是までおくりこしたるこそ、うれしけれと云ひ聞かせよ。後のためもころあれと仰せければ、片岡、白木の弓に、大のかぶら取りてつがひ、谷をしに一矢射かけて、御錠やくと云ひかけ、れども、聞えぬ様にして予ゆきける。辨慶はぬれたるよるひきて、大きなるふし木にのぼりて、大衆をよびて申しけるは、情有る大衆あらば、西塔



○竹子、曲師も定まらず時に應じて立舞ふ事といふなるべし  
○万歳樂、正月十六日の男婦等に部曲を歌ふて末に萬歳樂と必ず囃す事ありて後には常にはやす阿となりしなり  
○春は櫻の云々、六段一柱の今様歌なり

に聞えたる、武藏が亂拍子みよとぞ申しける。大衆是を聞きいり、ものも有り。片岡はやせやと申しければ、まゑとや中さしにて、弓の本をたゝいて、萬歳樂とぞはやしける。辨慶折ふし舞ひたりければ、大衆もゆきかねて、是をみる。まひはおもしろく有りければ、笑事をぞうたひける。春は櫻のながるれば、吉野川とも名付たり。秋は紅葉のながるれば。たつた川ともいひつべし、冬も末になりぬれば、法師も紅葉でながれたり。とをり返し、舞ひたれば、たれどはしらす衆徒の中より、をこのやつにて有るぞや、とぞいひける。おのれども、何ともいはずいへとて、其日はうこにてくらしけり。たそかれ時にもなりしかば、判官侍どもにおほせけるは、そも御嶽左衛門は、いしう心ざし有りて、参らせつる酒肴を念なくおひちらされたるころ、ほいなけれ。たれか其用意相かまへたる。参らせよ。つかれやすめて、一先おちんとぞ仰せける。皆人は敵の近付き候ふ間さきにと急ぎ候ひつるほどに、相かまへたる者も候はず、と申し

○餅ひ、今の餅にて餅ひと云る方本語なり  
○一乗、佛法をいふ  
○菩提の佛、後世を頼む佛  
○道の神、道の神にて善の神三柱也  
○さんじんこわう、三神玉なるべし

○毛よき鎧、或し毛の美しき鎧

ければ、人々はたゞ後を期せぬぞとよ。義経は我身ばかりは、かまへて持ちたるぞとて、間おなし機にたち給ふぞと、見えしに、いつの程にか取り給ひけん、たちはな、もちひを、甘ばかり檀紙につゝみて、引合に取出させ給ひけり。辨慶を召しては一つづゝと仰せければ、直垂の袖の上におきて、ゆつりはを折て敷き。一をば一乗の佛に奉る。一をば菩提の佛に奉る。一をば道の神に奉る。一をばさんじんこわうに奉る。一をば菩提の佛に奉る。餅ひもみれば十六有り。人も十六人。君の御前に一つさしおき。残りをは面々に予くばりける。今一のころに、佛の餅ひとて、四つおきたるに取りやし、五つをば、それかしか徳分にせんと申す。皆人々是を給りて、手々にもちてぞなきける。あはれなりける世のならひかな。君の君にてわたらせ給はよ、これに心ざしを、思ひ参らせば、毛よき鎧、骨強き馬などを給りてこそ、御恩の機にも思ひ参らせ候ふべきに、是を給りて、しかるべき御恩の機に思ひなし、悦ぶこそかなしけれとて、鬼神をあざむ



○小鏡、み文字旗  
入せしにて小筋な  
るべし次文に詞さ  
云る事二つまであ  
るにて知るべし  
りかたは栗形にて  
今刀の下緒を付る  
も栗形といふ受な  
るは手を掛る用な  
るべし

き妻子をもかへり見す命をも塵芥とも思はぬものゝおとも、みな  
鏡の袖をぞぬらしける。心の中ころかなしけれ。判官も御涙をな  
し給ふ。辨慶もしきりに涙はこぼるれども、さらぬ体にもてなし。  
此殿原の様に、人の参らせたる物を持ちてたべとて、なかれぬもの  
を泣んとするは、をこのものにてこそあれ。怪力は力におよばざる  
事なり。身をたすけ候はん計に、我もちたり。殿原も手々に取りて  
もたぬころ、不覺なれ。ことならねども、是にもちて候ふとて。餅  
ひ廿計ヲ取出しける。君もいしうしたりと思召しけるに、御前にひ  
さまづきて、左の脇の下より、黒かりける物の、大なるを取出し、雪  
の上に予置きたりける。片岡なになるらんと思ひて、さしよりてみ  
れば、くりかた打たる小鼓に、酒を入れて持ちたりけり。おどころ  
より土器二つ取出し。一をは君の御前にさし置きて三を参らせて、筒  
打ちありて、申すやう。飲みてはおほし。酒は筒にてちひさし。思  
おほきあらばこそ。すこしづゝもとてのませ。残るさけをば、もち

○しきたんさいふ  
塵巻は馬本にし  
たへさある可  
すべし枕の冠帯を  
敷せらるへは其に  
因りたる塵巻の銘  
にして鶴毛の巻に  
はちりたるべし

たる土器にて、さしうけさしうけ三を飲みて、雨もふれ風もふけ。今  
夜は思ふ事なしとて、其夜はそれにて夜をあかす。明れば十二月廿  
三日なり。さのみ山路はものうし。いさや藪へとの給ひて、鏡をさ  
して下り、北の岡、しげみが谷といふ所までは出で給ひたりけるが、  
里ちかゝりければ、賤の男しづの女も、軒をならべたり。落人のな  
らひは、鏡をきてはかなおまじ。我ら世にだにあらは、鏡も心にま  
かせぬべし、命にすぎたる物あらじとて、しげみが谷の古木の本に、  
鏡腹巻十六領ぬぎすて、方々に予おち給ふ。明年の正月のすゑ、二  
月の初には、奥州へ下らんすれば、其時かならず一條今出川の邊に  
て、行あふべしと仰せければ、承りてたのくなく立別れ。あ  
るひは木幡、をつがは、醍醐、山科へ行く人も有り。鞍馬の奥へゆ  
くも有り、洛中にしの女人も有り。判官は侍ひ一人も具し給はず、雑  
色をもつれ給はず。しきたんと申す腹巻めし。太刀脇にはさみ。十  
二月廿三日の夜うちふけて、南部の勤修坊とくこのもとへぞ、おは



しける。

義經記卷五終

義經記卷六

生田目經徳校註

一 忠信都へ忍びのほる事

投も佐藤四郎兵衛は、十二月二十三日みやこに都に歸りて、晝はかたほと  
 りに忍び、夜は洛中に入り、判官の御行衛を尋ねけり。されども人  
 まちくまぢくに申しければ、一定をしらず、あるひは吉野川に身を投け  
 給ひけるとも聞え、或は北國にかゝりて、陸奥へ下り給ひけるとも  
 申し、聞くも定めざりければ、都にて日を送る、とかうする程に、十  
 二月二十九日いちにちになりけり。一日片時も、心やすくゝらすべき方も  
 なくて、年のうちもけふばかりなり。明日あすにならば、あらたまの年  
 立かへる、春の初にて、元三の儀式ぎしきなども事よろしからず、いづく  
 に一夜をだにも明すべきとも覺えず。其頃忠信ただしん佗事たじなく思ふ女一人、  
 四條室町しじょうむろまちに、小柴の入道せのぢのにりだうと申す者の娘に、かやと申す女なり、判官都  
 におはせし時より見初て、淺からぬ心さしにて有りければ、判官都

○一定を知らず、  
踏破を得ざるなり

○あらたま、年と  
 云る詞の冠辭  
 ○元三、一月一日  
 をいふ年と月と日  
 と三つの元なる故  
 なり儀式は厚祿白  
 散置ぬめ其他なり  
 ○他事なく、他の  
 事を持つて、其事  
 を思ふ事



○川尻、淀川の尻  
の端にて地名なり

○具足せん、携帶  
せんの意なり

○やうくに、様  
々になり

○物ならぬ、敷な  
らぬと云やうの意

○披露、世に顯す  
との意なり又次に  
云る披露は命令を

を出で給ひし時も、津の國川尻までしたいて、いかならん舟のうち、  
波の上までもと暮ひしかども、判官の北の御方あまた、一船にのせ  
奉り給ひたるも、あはれ詮なき事かなと思ふに、我さへ女を具足せ  
ん事も、いかゞと思ひしかば、あかぬ名残をふりすて、獨り四  
國へ下りしが、心ざしいまだ惚れざりければ、二十九日の夜うちふ  
けて、女を尋ねて行けり。女出あひて、なのめならず悦びて、我方  
にかくしおき、やうくにいたはり、父の入道に此事しらせたりけ  
れば、忠信を一聞なる所によびて申しけるは、かりそめに出させ給  
ひしより此方はいづくにも御行衛を承はらず候ひつるに、物なら  
ぬ入道をたのみて、是までおはしましたる事こそ、嬉しく候へどて、  
ろにて年をすおくらせけり。青陽の春も来て、嶽々の雲むらさき、  
裾野も青葉まじりになりたらば、陸奥へ下らんとす思ひける。かゝ  
りし程に天に口なし、人を以ていはせよと、たが披露するともなけ  
れども、忠信が都に有る由聞えければ、六波羅より探すべきよし

下す事にて後世に  
云ふに似たり事は  
同じけれと書ひて  
まかはれり  
○一定出ん、極め  
て決断せしなり  
○道理云々、長恨  
野の文に有る天國爲  
比翼鳥有地願爲有  
連理枝とある詞を  
とれるなり

○梶原、三郎兵衛  
景久  
○今の男、梶原を

披露す、忠信是を聞きて、我ゆゑに人に耻を見せしめて、正月四日  
に京を出んとしけるが、けふは日もいむ事有りて、たゞざりけり。  
五日は女に名残を惜しまれてたゞす。六日の曉は一定出んとすしけ  
る、すべて男の頼むまじきは、女なりき。昨日までは連理の契り比翼  
のかたらひ淺からず、いかなる天魔のすゝめにてや有りけん、夜の  
程に女心かはりぞしたりける。忠信京を出て後、東國の住人梶原と  
申す者在京したりけるに、初て見えそめけり。今の男と申すは、世  
にあるもの也。思ひかへじと思ひ、此事を梶原にしらせて、討つか  
搦むるかして、鎌倉殿の見参に入れたらば、勳功疑ひ有るべからず  
なぞ、思ひしらせんと思ひけり。かゝりければ五條西洞院に有りけ  
る梶原がもとへ、使をすやりける。急ぎ梶原女のもとへすゆきける。  
忠信をば一間なる所にかくし置、梶原三郎をすもてなしける。其後  
耳に口をあて聞きけるは、よびたて申す事は別の子細なし。判官殿  
の郎等、佐藤四郎兵衛と申すもの有り。吉野の戦に討ちもらされて、



○勳功、勳功によりて所領を給ふか本義にて其所領を直に勳功と云ひなうはしたり鎌倉頃の詞に多し

○一門の大事、一門の總代として禁裡守藤の爲在京する云ふ

過ぎぬる廿九日の暮方より是に有り、明日は陸奥へ下らんと出立つ、下りて後知せ奉らぬとて、恨み給ふな。我と手をくだかすとも、足輕をもさしつかはし、討か、からひるかして、鎌倉殿の見参に入れ、勳功をも望み給へとぞ申しける。梶原三郎是を聞て、あまりの事なれば、中々とかく物もいはず。唯うとまじきもの、あはれにわりなきを尋ぬるに、稻妻かげろふ、水の上にある雪、それよりも猶あだなるは、女の心なりけるや。是をば夢にもしらすして、是を頼みて身をいたづらになす、忠信こそ無様なれ、梶原三郎申しけるは、承り候ひぬ、景久は一門の大事を身にあって、三年在京仕るべく候が、今年も二年になり候ふ。在京の者のりやうやく叶はぬ事にて候ふ、さればとて忠信追討せよと云ふ宜旨もなし、欲に耽つて合戦に忠をいたしたるとても御鏡ならねば御恩も有るべからず、しそんじては一門の瓊瓊なるべく候ふ間、景久は叶ふまじ。猶も御心ざし切ならん人に、仰せられ候へと云ひすて、急ぎ宿所へ歸りつゝ、色を

○色をも香をも、古今集に君なりうで離にか見せん梅の花色をも香をも知る人が知ると云ふ古歌なり今は女之情を知らざるを云ふ

○はした物は下婢なり  
○江原小四郎、北條時政の子なり四郎の子なる故に小四郎と稱せり又北條殿は時政頼朝の男なり故に世人尊敬して殿と稱せり此時京都守護の爲に上京して六波羅に居りしなり

○さしく、みて、潜めてにて身をひらめて見るなり  
○其期、時節到来と云に同じ

も香をもしらぬ無道の女と思ひしり、終に是をば問はざりけり、か襟に梶原にもうとまれ、腹をすえかねて、六波羅へ申さんと思ひつゝ、五日の夜に入りて、はしたものの一人召して六波羅へ参り、江間の小四郎を呼び出して、此由つたへければ、北條殿にかく申されたり。時刻をうつさずよせてとれとて、二百騎の勢にて四條室町にぞれしよせたり。昨日一日今宵よもすがら、名残の酒とてしひたりければ、前後も知ず臥たりけり。頼む女は心がわりして失せぬ。常に髪けづりなをしける、はしたものの有りけるが、忠信がふしたる所にはしり入りて、あらゝかにおこし、敵よせて候ふぞとつげたりける

二 忠信最期の事

忠信敵の聲におどろき、おきあがり、太刀取なほし、さしくみてみければ、四方に敵みちくたり。遁れて出べき方なし。内にて獨言にいひけるは、初有る物は終り有り。生有る物必滅す、其期は力



○犬死、死して功なきをいふ  
 ○直垂の袖を結ぶ、臨明けより手を出して袖と袖とを肩の上にて結び合せしなり  
 ○おしもうて、揉んでなるを軍記詞に云へり  
 ○えはしかけ、柳結にてえはしし紐なり馬鞍子の落まじき爲に鉄巻と云る如くに結びしなるべし  
 ○ずらうず、ずらんがなり  
 ○はういつ、放流にて橋間をいふ

およばすや。屋島津の國、長門の壇の浦、吉野の奥の合戦まで、随分身をばなきものところ、思ひつれども、其期ならねば、今日までの必ぬ。然りとはいへども、たゞいまが最期にて有りけるを、驚くこそおろかなれ。さればとて犬死すべき様なしとて、ひらくとぞ出立ちける。白き小袖に黄なる大口、直垂の袖をひすびて肩にうちこし、昨日みだしたる髪をいまだけづりもせず取上げ、一所にゆひ、烏帽子引きたておしもうで、ぼんのくぼに引き入れて、為ぼしかけを以て、額にひすどゆひて、太刀を取さし、うつぶきてみれば、いまだほのくらくて、物の具の色はみえず。敵はひらくにひかへたり。中々なるを通りて、まぎれゆかばやとぞ思ひける。されども敵甲冑を上るひ、矢をはげて、駒に鞭をすゝめたり。おひかけて散々に射られんすらうす。手おひて死もやらず、生ながら六波羅へ取れんす。判官のおはする所知らんすらんと問はゞ、知らずと申さば、さらばはういつにめたれとて、礼問せられ。一たん知すと申すとも、次第に生

○すくやう者、すくやか者にて砲の義なり  
 ○精兵、射撃に達せし人をいふ  
 ○町屋云々、路邊に精兵多くして追手の馬を馳る妨げとなりて急にも追はざりしをいふ  
 ○しつふす入、逃げおす入と云ふなり

根みたれなん後には、有のまゝに白狀したらば、吉野の奥にとゞまりて、君に命を参らせたる心さしも、ひになりなん事ころかなしけれ。いかにもして愛をのがればやとぞ思ひける。中門の様にさし入りてみければ、上にありたる座敷有り。ひたと上りてみければ、上薄く葺きける屋根なれば、月はも、星はたまれとふきければ、所々はまばらなり。すくやう者にて有る間左右のかいなを上げて、家を引あげ、つと出て梢を鳥のとぶか如くに、ちりにもつてぞ落ちて行く。江間の小四郎是をみて、すわや敵はおつるぞ、たゞ射ころせとて精兵どもにさんさんに射さす。手にもたまらざりければ矢こそ遠々ぞなりにける。未明ぼの、事なれば、町里小路にはつし置きたる雑車、駒のひづめしどろにしてとぶ様にもかけざりければ、かくて忠信をぞ失ひける。其まゝ、おちゆかは、中々しおあすべかりつるに、我行衛を案じ思ふ。かくかたぼとりは、在京の者に下知して、指あさかれなん。洛中は北條殿父子の勢を以てさがされん。とても通



○飛、軒より約りて戸を横にしたる如くにて上げ下しする物なり戸は今の廻し戸なり  
 ○見度所、判官の常に住み所にて其名残を見たく思ふなり忠臣の情哀れ深し  
 ○鎌倉殿の御舅、頼朝の妻政子の父なるを云ひ六波羅殿は武家の政事を行なふ支那なる故に

れぬ物ゆゑに、未々のやつばらの手にかゝりて、射殺されんころ口をしけれ。一兩年も判官のすみ給ひし、六條堀川の御所に参り、君を見参らすると思ひて、そこにてともかくもならばやと思ひて、六條堀川の方へぞ行きける。去年まで住なれ給ひし跡を、歸りきてみれば、今年はいつしか引かへて、門をしたつる者もなく、様どひとしく塵つもり、葎遣戸皆くづれたり。御簾をば常に風やまく。一まの障子の内に分け入りてみれば、蜘蛛の糸をみだしたり。是をみるにつけても、日ごろはかくはなかりし物をと思ひければ、たけき心も前後不覺にこそなりにけれ。見度所をみめぐりて、さて出居にさし出て、腰所々に切りておとし、葎あけて、太刀取なほし、絹の袖にておしのこひ、何にてもあれと細言云ひて、北條の二百餘騎を、たゞ獨して待ちかけたり。あはれ敵や、能敵かな。關東にては鎌倉殿の御しうと、都にては六波羅殿、我が身に取ては過分の敵予かし。あたら敵に犬死せんするこそかなしけれ。よからん鎧一領、やなくひ

人は六波羅殿と京で暮れせしなり

○小櫻威し、藍草に小き櫻の花を黄に染出したる草を細く織ちて威したるなり  
 ○四方白、四天の旗を儀にしたる甲  
 ○丸木弓、昔の弓はけり合せしに非ず丸木を其儀換て弓合せしなり

一腰もかな、最期の軍して腹切りなると、思ひ居たりけるか、誠には鎧一領發されし事の有りし予かし。去年十一月十三日に都を出て、四國の方へ下り給ひし時、都の名残を捨てかねて、其夜は鳥羽の濱に一夜宿し給ひたりし時に、常陸坊を召して、義經か住みたる六條堀川には、いか成者の住まんすらんと仰せければ、常陸坊申しけるは、誰か住み候はん。おのづから天魔のすみかどころ、成候はんと申しければ、義經か住みなれし所に、天魔の栖かどならん事、うかるべし。主の爲におもき甲冑を置きつれば、守りとなりて、惡魔をよせぬ事の有るなる予とて、小櫻おとしの鎧四方白の甲山鳥の羽の矢十六さして、丸木の弓一張をへて、おかれたりしぞかし。未有りもやすらんと思ひ、天井にひたくと上りて、さしのぞきてみれば、己の時斗の事なれば、東の山より日の光さしたる、すきまより入りて、かゝりやきたるに、甲の星金物魏峨として見えたり。取下して草摺なかにきくだし、矢かきかひて弓をしはり、すひきうちし



○草摺長、扇ゆり  
 上て固く若れは草  
 摺のゆるものなり  
 ○すびきは矢をは  
 げず空を引きて  
 強弱を試る事なり  
 ○まりのかゝり、  
 駿河の場へ梅樹松  
 松の四本を植るか  
 故實なりこれをか  
 らまらふ

○手矢とりて、矢  
 をいまだ可につが  
 はず手に持たるを  
 云ふ

○左馬頭、徳朝を  
 云ふ

て、北條殿の二百余騎、遅しと待つ所に間もすかさずおしよせたり  
 先陣は大庭にこみ入りて、後陣は門外にひかへたり。えまの小四郎  
 義時、まりのかゝりを小橋に取りて申されけるは、きたなし四郎兵  
 衛、とても遁るまじきぞ。あらはに出て給へ、大將軍は北條殿、か  
 く申すは江間の小四郎義時と云ふ者なり。はやく出て給へといへ  
 ば、忠信是を聞きて、様の上に立ちたるか、部のもとがはどつきお  
 とし。手矢取りてさしはけ申しけるは、江間の小四郎に申すべき事  
 有り、あはれ御邊達は、法を知り給はぬものかな。保元平治の合戦  
 と申すは、上どくの御事なれば。内裏にも御所にも、恐れをなし、  
 思ふ様にころふかまひしが、是はそれには似べくもなし。某と御邊  
 とは、私戦にこそあれ。鎌倉殿も左馬の頭殿の御君達、我等か君も  
 御兄弟予かし。例へば人して申しけるは、小四郎殿へ申し候ふ。伊  
 豆駿河の若黨の、ことの外の狼藉に見へ候ふを、萬事をしつめて、剛  
 の者の腹さるやうを御覽せよや。東國の方へも、主に心ざしも有り、

○ちんじちうりよ  
 う、珍事頂厄なる  
 べし  
 ○見参に入れて、  
 お膳に入れたの故  
 なり  
 ○手綱打すて、下  
 馬するを云ふなる  
 べし  
 ○引合、鏡の右の  
 脇腹にて紐の前後  
 を引合せて紐にて  
 結びし所をいふ此  
 紐をさるなり  
 ○ついたて、突き  
 立なり  
 ○いたけだけ、肩  
 丈け高にて座した  
 る体の高きなり今  
 立膝といふ  
 ○冥途、くちを道  
 にて死てゆく事

ちんじちうりようにもあひ、又た敵に首を取らせしとて。自害せんす  
 るものゝ爲に、是こそ末代の手本よ、鎌倉殿にも自害の様を、最期  
 の言葉をも、見参に入れてたべと申しければ、さらば靜に腹をきら  
 せて、首をとれとて、手綱をうちすて是をみる、心やすげに思ひて、  
 念佛高聲に三十遍計申して、願以此功德と回向して、大の刀を抜き  
 て。引合をふつと切つて、膝をついたて、わたけだかになり、刀を取  
 りなほし、左の脇の下にがはとさしつらぬきて、右の方の脇の下へ  
 するりとひきまはし、心さきにつらぬきて、臍のもとまでかきおと  
 し、刀をおしのこひて打みて、あはれ刀や、まうおさに跳へて、能  
 や作るを云ひたりし印あり。腹を切るに少しも物のさわるやうにも  
 なきものかな、此刀をすてたらば、屍にそへて東國までとられんす。  
 若き者ども、よき刀あしき刀といはれん事もよしなし、冥途までも持  
 つべきとて、おしのこひて鞍にさして、膝の下におしかゝいて、疵  
 の口をつかみて引あげ、こぶしをにぎりて腹の中に入れて、腹わた



○盛衰、現世をいふ梵語なり

○業、宿業にて前世の所業によりて現世の苦を受けるをいふ

をつかみ出し、様の上にさんぐくに打ちらし、冥途まで持つ刀をば、かくするぞとて、束を心もとへさしこみ、鞆はをりほねの下へつき入れて、手をむづとくみ、死けもなく、息をつよげに、念佛申して居たり。扱も命しにかねて、世間の無常を觀んじて申しけるは、あはれなりける沙婆世界のならひかな。老少不定のさかひ、げに定なかりける。いかなる者の矢一に死をして、跡までも妻子にうきめをみすらん。忠信いかなる身を持つて、身を殺すにしにかねたる、業の程こそかなしけれ。是もたゞあまりに判官を懸ひしと思ひ奉るゆゑに、是迄命はなにかきかや。是す判官のたびたりし御佩刀是を御かたみにみて、冥途も心やすくゆかんとて、ぬいてれきにたりける太刀を取りてさきを口にあくみて、ひさをあさへて立あがり、手とはなつてうつふしにがはとたをれけり。鑢は口にとままり、きつさきは鬘の髪をわけて、うしろにするりとすとほりける。おしかるべき命かな。文治二年正月六日の辰のこくに、つひに人手にかゝらず

して、生年二十八にて失せにけり、

三 忠信か首鎌倉へ下る事

○大路を渡して、京中の道跡一條以下を持廻りて見せあり也  
○獄門、獄舎の門なり

北條殿の郎等伊豆國の住人、みまの彌太郎と申す者、四郎兵衛か死骸のあたりに立ちよりて、首をかきかとし、六波羅に持参し、大路をわたして、東國を下すへきとぞ聞えける。されども朝敵の者の獄門にかけらるべきころ、大路をわたせ。是は頼朝が敵義経が郎等をや。別してわたさるへき首ならずと、公卿より仰せられければ、北條ことほりとてわたさず、小四郎五十騎の勢をぐして、首を持せて關東へ下る。正月十日に京を出で、同じ廿一日に下着し、鎌倉殿の見参に入れて、謀叛の者の首取りて候ふと申しければ、いづれの國たれがしと申す者すと御尋ねあり。判官殿の郎黨佐藤四郎兵衛と申す者にて候ふ、と申しければ、討手は誰と仰せければ、北條と申しける。初めたる事にてはなれども、いしうし給ひつるとの御氣色なり。自害の體最期の時のことば、こまぐと申されければ、鎌

○初たる事にて、今迄四功口度々なれども別しての功とあり  
○いしう、いみじ



うの略語  
○御氣色、機嫌よ  
きをいふ

○八州國、關東は  
八州をいふ

○私問持問をいふ

倉殿あはれ強の者かな。人ごと此心を持たばや、九郎につきたる若黨一人としておろかなるものなけれ。秀衡もみる所有りてころ、多くの侍の中に、是ら兄弟をは付けつらん。いかなれば東國に、是程の者なからん、餘の者百人を召しつかはんよりも、九郎か必ざしをふつとわすれて、頼朝につかへば、大國小國はしらす、八ヶ國に於いては、いづれの國にても一國はとぞ仰せける。千葉葛西是を承り、あはれよしなき者の有様かな、いきてだにも候ふならばとぞ申しける。畠山申されけるは、心およばす、よくころ死候へばこそ、君も御氣色よく候へ生きてとり下り、参らせ候はんずるに、判官殿の御行衛しらぬ事はあらじとて、私問つよくせられ参らせなば、生きてたるかひも候ふまじ。終に死すべき者の、よの侍どもに顔をまもられんも、心うかるべし。忠信程の強の者、日本をたふとも、判官殿の御心ざしを恐れ参らせて、君に随ひ参らせ候ふまじきものをと、残る所なく申されける、後代のためしに首をばかけよとて、堀の

○勝長壽院、別  
八幡宮の別當なり

○弓取、武士をい  
ふ此頃の詞なり

彌太郎承りて、座敷より立ちて、由井の濱八幡の鳥居の東にぞかけられける。三日過ぎて御尋ね有りければ、いまだ濱に候ふと申しければ、不便なり國とほければ、したしき者しらすで取らざるらん。強の者の首を久しく晒しては、所の惡魔となる事も有り、首を召しかへせとて、たゞも捨てられず、左馬の頭殿の御供養に作られたる、勝長壽院の後に埋めさせ給ひける。猶も不便にや思召されけん、別當の方へ仰せ有りて、一百三十六部の經を書て供養にせられけり。昔も今も、是程の弓取あらしとぞ申しける。

四 判官南都へしのび御出ある事

扱も判官は、南都くわんしゆ房のもとへ、たはしましたりける程に、くわんしゆ房是をみ奉りて、大に悦び、幼少の時より、あかめ奉りける、普賢こくうさうのわたらせ給ひける、佛殿に入れ奉りて、機嫌にいたはり奉る、をりくことに申されけるは、御身は三年に平家を賣め給ひ、おほくの命をほろぼし給ひしかば、其罪いかでかの



○高野、高野山粉川は是も紀伊國粉川寺なり

○つれなきもさし、無用の髪を著へて在俗して在ん

○阿闍梨、僧の一名

○冠者、近頃元服したる者をいふ詞

がれ給ふへき。一心に御菩提心をあこさせ給ひて、高野粉川にとりこもり、佛の御名を唱へさせ給ひて、今生いく程ならぬ、來世をたすからんと思召されずやと、すゝめ奉り給ひければ、判官申させ給ひけるは、度々仰せ蒙り候へども、今一兩年も、つれなきもどとりつけて、つらく世の有様もみんとこそ給ひけれ。されども、もしや出家の心出来給ふと、たつとき法もんなを、常はとき聞せ奉り給ひけれども、出家の御心はなかりけり。夜は御つれくくなるまゝに、くわんしゆ房の門外にたゝすみ、笛を吹きならし、なぐさませ給ひける程に、其頃奈良法師の中に、但馬の阿闍梨と云ふ者有り。同宿に和泉美作へんのきみ、是ら六人くみして申しけるは、我南都にて悪行無道なる名を取りたれども、別にし出したる事もなし。いざやよるよるたゝすみて、人の持ちたる木刀をうばひて、我等か調法にせんとす云ひける。尤しかるべしとて、よるく人の木刀を取りありく、はんくはいが謀をなすもかくやらん、但馬の阿闍梨申し

○毛を吹て、小事を吹して大事を得るを云ふ

○横紙を破る、紙は破にさくるとも横に裂くを云て無理なる事の譬へに云る詞なり

けるは、日比はありとも覺ぬ冠者、きはめて色白くせいもちいさきが、よき腹まき着て、こがね作りの太刀の、心もおよばぬをはき、くわんしゆ房の門外に、よなよなたゝすみぞ、おのれが太刀やらん。主にも過分したる太刀なり。いざよりとらんとす申しける。美作申しけるは、あはれ詮なき事をの給ふものかな。此程九郎判官殿の吉野の修行に攻められて、くわんしゆ房を頼みておはするとまき。ただおかせ給へと申せば、それは臆病のいたる所ぞ、などあらざらんといへば、それはさる事にて、便宜あしくては、いかゞ有るへからんと申しければこそ、毛を吹きて、疵を求むるにてあれ。人のよこがみやぶるになれば、さこそあれとて、くわんしゆ房のほとりをねらふ。各六人衆士の蔭のほのくらき所に立ちて、太刀の鞘に腹巻の草摺をなげかけて、爰なる男の人を打つぞやといは、各聲に付きてはしり出て、いかなるしれものぞ、佛法をうらうの所に、たびく慮外して、叩つくるこそ心ぬ。命なこそしそ。侍ならばもと



○しれ者、痴れ者にて人を罵る詞

○ひしく、清閑なまかたなり

○こがりはと云へる詞他に聞えず小反刃にて長刀の体を云るかとも思へる事にて聞にて云ふ事すはらず考へ難し

よりを切つて。寺中を追へ、凡下ならば耳鼻をけづりて、おひ出せとて、とらぬは、ふかくらんともとて、ひしくと出てあひ、すゝみよりける。判官はいつもの事なれば、心をすまして笛を吹き給ひて、おはしけり。けうがる、風情にて、とをらんとする者有り、判官の太刀の尻鞘に腹巻の草摺をはらりとあて、爰なる男の、人をうつぞやといひければ、残りの法師ども、さなはいはせぞとて、三方よりたひかゝりたり。かゝるなんこそなけれど思召し、太刀ぬいて、ついちをうしろにあて、待ちかけ給ふ所に、長刀さし出せはあつと切り、長刀こぞりはの間に、四つ切りおとし給へり。か様にさんぐに切り給へは、五人をばおなし枕に切りおせ給ふ。但馬は手を負ひてにけて行くを、節所におつかけ、太刀のむねにてたゝきおせ、生けながら、つかんて取り給ふ。これのは南都にて、何と云ふ者ぞと、ひ給へは、但馬の阿闍梨と申しければ、命はをしきかどの給へは、生をうけたる者の、命をしからぬ者や候ふ、と申しければ、さ

○中々死するは、返りて死たる方耻なしてよからんとなり  
○ちうよう、は前に云へる如く頂厄なるをやうをように願書の誤りしなるべし  
○まこと、勤修房の名と聞ゆれど文字知り難し

ては聞にはにす。おのれは不覺人なりけるや。かうべを切りて捨てばやと思へども、これのは法師なり、それかしは俗なり、俗の身として僧をきらん事、佛を害し奉るに似たり。おのれをばたすくなり。此後か様の狼籍すべからず。明日南都にて披露すべき様は、それがしこそ、源九郎と組だりつれといは、扱強の者といはれんするぞ。しるしはいかにと人とは、なしとてたへて人用おべからず。是をしるしにせよとて、大の法師を取りて、あふのけ、胸をおまへ刃をぬきて耳鼻をけづりはなされけり。中々死たらばよかるべしとなげきけれども、甲斐予なき。其夜南都をば、かきけす様に予失せける。判官は此のちうようにあはせ給ひて、くわんしゆ房に歸りて、持佛堂にどくこをよひ奉りて、暇申して、是にて年をおくり度思ひ候へども、存するむね候お聞、都の方へ罷出て候ふ。此程の御情つくしかたく覚え候ふ。もし浮世にながらへ候は、申すにおよばず、又死して候ふと聞召し候は、後世を頼み奉る。師弟は三世契りと申し候へ



は、未世にて必ず参會し奉り候ふべしとて、出でんとし給へば、とくこはいかなる事ぞや、しばらく是におはし候ふべきかと、存候ひつるに、思ひの外御出候はんずるこそ、心得がたく候へ。いかさま人の忠言に付きて候ふと覺え候ふ。たとひいかなる事を人申し候ふとも、身として用ふべからず。しばしは是におはしまして、明年の春の比、いづかたへもわたらせ給へ。ゆめくかなひ候ふまじと、御名残をしきまゝに定め奉り候へは、判官申されけるは、今宵こそおなごりをしく思召れ候ふとも、明日門外に候ふ事、御覽し候ひなば、義經か愛想もつきて、思召されんずると、仰せられければ、くわんしゆ房是を聞きて、いか様にも今宵ちうようにあはせ給ふと、覺へて候ふ。此程わか大衆ども、朝恩のあまりに、よなく人の太刀をうばひ取るよし、承り候ひけるが、御はかせは世にこえたりければ、うばい取り奉らんとして、しやつばらか斬られ参らせて候ふらん。それに付きては何事の大事か候ふべき。れうしに聞へ候は、とく

○朝恩の余り、朝恩に付きてなり  
○なうじ、御覽にて容易に洩り聞ゆる事

○よしくなる様、種々なる事との意

○菊池原田以下は九州の豪族なり

○關より西、注坂の關より西なり

こか爲にかしくなる様も候ふらん。定めて關東へも所へ、都に北條おはしまし候へは、時政私には叶ふまじとて、關東へ子細をもうされずらん。鎌倉殿もさうなく宜旨院宜なくては、南都へ大勢をばよもひけられ候はじ。其程の儀にて候は、御身平家追討の後、都におはしまして、一天の君の御覺えもめでたく、院の御感にも入り給ひしかば、宜旨院宜も申させ給はんに、たれかおどるべき。御身は都に在京して、四國九國の軍兵をめさんに、なとか参らで候ふべき。幾内中國の軍兵も一統になりて参るへし。鎮西の菊池原田松浦うすき、べつき、の者とも召されずるに、参らずば片岡武藏などの、あらずともをさしつかはし、少々追討し給へ。他所はみだるゝ事も候ひなん。半國一になり、あらちの山、伊勢の鈴鹿山を切りおさき、あふ坂の關を一つにして兵衛佐殿の代官、關より西へいれん事有るべからず。とくこもかく候へは、興福寺東大寺、山三井寺吉野十津川新馬清水一つにして参らせん事は、やすき事にてこそ候へ。それ



○御内、主人といふ事もあれは愛なるは一家中を云る詞なり

○吾朝、皇國をいふ義經自一人と自負せしにさくこか義助を感するなり

も叶ふまじく候は、とくこか一どの恩をも忘れじと思ふ者、二三百人も候ふ。かれらを召して城廓をかまへ、やぐらをかき、御内に候ふ一人當千の兵をも召具して、やくらへ上りて弓取りて候は、心強なる者どもに軍せさせて、よそにて物をみ候ふべし、自然自方ほろひ候は、幼少の時より頼み奉る本尊の御前にて、とくま持經せば御身は念佛申させ給ひて、腹をきらせ給へ、とくこも劍を身に立て、後生までもつれ参らせん。今生は御祈の師、來生は禪知識にてこそ候はんすれど、誠に頼もしげにぞ申されける。是につきてもしばらくあられまほしく、思はれけれども、世の人の心知りかた、我朝には義經より外はと思ひつるに、此とくこは世にこえたる強の人にておはしけると、思召されければ、やがて其夜の内に、南都をば出でさせ給ひけり。いかてか獨りは出し参らせんなれば、我ため心やすき御弟子六人をつけ奉り、京へぞ送り奉りける。六條堀川なる所にしばらく待ち給へとて、行方しらす失せ給ひぬ。六人の人

○放ち合せ、他へ出して人を關係せず討たするやうの事

やひなしく予かへりける。それより後はくわんしゆ房も、判官の御行衛をばしり奉らず。されども奈真には人おほく死ぬ、但馬や披露したりけん、判官殿くわんしゆ房のもとにて、謀叛をたてして、かたらふ所の大衆したがはぬをば、とくこ判官にはなちあはせ奉ると、風聞しける。

五 關東よりくわんしゆ房召さるゝ事

南都に判官殿おはしますよし、六波羅に聞えければ、北條大におどろき、急ぎ鎌倉へ申されける。頼朝梶原を召して仰せられけるは、南都のくわんしゆ房と云ふ者、九郎にくみして世をみたすなるが、奈真法師も大せいうたれて有るなり。和泉河内の者ども、九郎に思ひつかぬさきに、これはからへと仰せられければ、梶原申しけるは、ろれこそゆゝしき御大事にて候へ。僧徒の身として、左様の事思召し立ち候はんこそ、ふしぎに候へと申す所に、又北條より飛脚到來して。判官殿南都におはせず、とくこがはからひにて、かくし奉る由



○陳狀、口供云  
よにおなは此頃の  
詞なり

申されければ、梶原申しけるは、さらは宣旨院宣をも蒙り給ひて、くわんしゆ房を見へ下して、判官の御行衛御尋ね候へ、陳狀にしたがひて、死罪流罪にもと申しければ、急ぎ堀の藤次近家に仰せ付けられ、五十余騎にてはせ上り、六波羅に着きて此由を申しければ、北條殿近家を召しぐして、院の御所に参じて、子細を申されければ、院宣には、まろがはからひに有るへからず。くわんしゆ房といふは、當代の御所の師、佛法興立有賢廣大慈悲の知識なり。内裏へ耳細申さでは叶まじとて、内裏へ奏聞せられければ、佛法興立の有賢たる人にて、左様にひが事なとを企んにおいて、朕もかなはせ給ふべからず、頼朝がいきとをる所理ならずといふ事なし。義経も本朝の敵たる上は、くわんしゆ房をわたすべしと、宣旨下りければ、時政悦をなして、三百余騎にて南都にはせ下りて、くわんしゆ房に宣旨のおもひきを披露せられたり。とくて是を聞きて、世は末代といひながら、王法のつきぬることかなしけれ。上古は宣旨と申しければ、

○當代、今上帝を  
申す

○空と云へども、寛  
平の御時神皇亮に  
驚の目たるを勅に  
よりにて人捕んと  
せしに驚は既に飛  
んしたるを勅  
也と聞かたれば  
驚は其處にすくみ  
て人捕らへり  
れたりと云る古事  
あり枯れ木に花さ  
く事考へ得ず

○公卿、公は三公  
卿は三位以上總稱  
なり

枯れたる草木も花咲き實をひすば、空と云つばさもあちけるとこそ、承りつたへしに、されば今は世もか様になれば、末の代もいかとあらんずらとて、涙にひせび給ひけり。たとひ宣旨院宣なりとも、南都にてこそかばねを捨つべけれども、僧徒の身として、穩便ならねば、東國の兵衛佐は諸法もしらぬ人にて有るなるに、哀れついでもかな。關東へ下りて、兵衛佐を教化せはると思ひつるに、くだれとの給ころ嬉しけれと、願て出立ち給ひけり。公卿殿上人の君達か、くもんの心ざしおはしましければ、師弟の別れをかなしむ、東國まで御供申すべきよしと、申し給へとも、とくて仰せられけるゆめゆめ有るへからず、身罪科のために召し下され候ふ間。とかとて其難とば、いかでか遁れさせ給ふべきと、いさめ給へは、なくなく、跡に止まり給ふ。ともかくも成りぬと聞召されは、跡をさくらひ渡らせ給へと、なくなく、契りて出て給ふ。此別を物にたとふれば、釋尊の御入滅の時、十六羅漢、五百人の御弟子、五十二類にいたるまで、



○十六羅漢、釋尊の弟子の中にて勝れて神通を得たる人

○五十二類、鳥獸の類にて釋尊入滅の場に集りて悲かし物をいふ

○黒谷、洛東神樂屋に今も現存す其所なり

かなしみ奉りしも、いかてか是にはまさるべき。かくてとくこ北條に々せられて、平の京に入り給ふ。六條の持佛堂に入れ奉りて、やう／＼ぞいたわり奉る。江間の小四郎申しけるは、何事も思召し候はゞ、承りて南都へも申すべく候ふ、と申されければ、何事かを申すべき。但し此邊に年來知りたるかたの候や。是へ参り候ふを聞きては、尋ぬべき人にて候ふか。來られ候はぬは、いか様にも世にはゞかりをなし候ひて、と覺へ候ふ。苦しかるまじく、候はゞ、此人に見参し下らばやと仰せられければ、義時承り、名を何と申すぞと云ひければ、元は黒谷に住み候ひしか、此程は東山に法然房と仰せられければ、扱はちかき所におはしまし候ふ、上人の御事候ふとて、頓て御使を奉る。上人大きに悦びたまひて、急ぎ來り給ふ二人の智識御目を見合せ、たかひに御涙にむせび給ひけり。くわんじゆ房仰せらんけるは、見参に入りて候ふことは、悦び入りて候へども、面目なき事の候ふぞ。僧徒の身として、謀叛の人にくみしたりとて、

○より下され、捕らはれて下るをいふ

○九條の袈裟、三衣の中にて上衣とす僧の禮服なり

○東大寺、南都にて聖武天皇の御削立なり

東國まで取り下され候ふ。其難を遁れて歸らん事も、不定なり、さればいにしへより、さきたち参らせん。さきにたゞせ給ひ候はゞ、御菩提を吊ひ参らせんと契り申して候ひしに、さきだちまいらせて、とからはれ参らせんこそ悦び入りて候へ。是を持佛堂の御前におかせ給ひ御目にかゝり候はんたびことに、思召し出し後世を吊ひて給り候へとて、九條の袈裟をはづし奉り給へは、東山の上人なく／＼請取り給ひけり。東山の上人、紺地の綿の經袋より、一卷の法花經を取ら出し、くわんじゆ房に参らせ給ふ。たかひに御かたみを取りかはして、上人歸り給ひければ、とくこは六條にとままりて、いと涙にむせび給ひけり。此くわんじゆ房と申すは、本朝大會の大伽藍、東大寺の院主、當帝の御師となり、廣大慈悲の智識なり。院参し給ふ時、腰輿牛車にめされて、あさやかなる中童子大童子、然るへき大衆あまた御供して参らせし時は、左右の大臣も各渴仰し給ひしどかし。今はいつか引きかへて、日ごろ給ひし素絹の御衣をばめ



○傳馬、驛より出  
す馬をいふ  
○關九、相坂關に  
住して琵琶を彈き  
たる國法師なり傳  
雅三位之につきて  
秘曲を受しと云ひ  
傳へたり  
○小野小町、相坂  
に住し事附會の云  
服なり  
○圓城寺、三井寺  
なり東に向へは左  
に當るなり  
○打出濱、大津に  
小淵邊の名所なり  
○野路宿原、近江  
にあり  
○標針、峠にて今  
現存す鐘山鐘吹た  
けも近江なり

されず、麻の衣のいやしきに、ろらで久しき御々し護摩の煙にあす  
ぶる御けしき、なか／＼たつとくぞ見え奉る。六波羅をいたし奉つ  
りて、みなれぬ武士を御覽じけるだにかなしきに、あさましげなる傳  
馬に乗せ奉る。所々の落馬は、めもあてられず覺へたり。粟田口打  
過ぎて、松坂こえてこれやあ坂の、蟬丸の住み給ひし四官河原打  
ち過ぎて、逢坂の關をこえければ、小野の小町が住みなれし關守を  
あしをかみ、をんじやうじを弓手になし。大津うち出の濱邊で、瀬多  
のから橋あみならし。野路宿原も近くなり。念れんとすれを念られ  
ず、常に都の方をかへりみて、ゆけばやう／＼都は遠くなりけり。  
おどにはきけと目にはみぬ、小野のすりばり霞にくもるかゝみ山、膽  
吹のたけも近くなる。其日は堀の藤次鏡の宿にとままり、次の日  
たはしくや思ひけん、長者に興をかりて、のせ奉る。都を御出の時、  
かくこそめさせ参らすべく候ひしかども、鎌倉の聞え其傳りにて、御  
馬を参らせ候はんずるにて候ふと申しければ、とくと、道の程の御

○問ひ状、状は假  
字にて尋問の條々  
なり  
○侍も召せ、梶  
原當時侍所々司に  
て武士の進退を察  
りし故なり

情こそ悦び入りて候へど、仰せられけるこそ哀れなれ。夜を日につ  
ぎて下りける程に、十四日にかまくらに着給ふ。堀の藤次の宿所に  
入れ奉りて、四五日は鎌倉殿にも申し入れず。ある時とくに申し  
けるは、御いたはしく候ふて、鎌倉殿にも申し入れず候ひつれども、  
いつまで申さでは候ふべきなれば、只今出仕つかまつり候ふ、今日  
御見参有るべきところ覺へ候ひぬと申しければ、思ふも中々心ぐる  
し、とくしてげんさんに入り、御問状をも承り候ふて、愚僧のむね  
を申し度ころ候へど、仰せられければ、藤次、頼朝の御前に参り、  
この由まをしあげる。梶原を召して、今日の中に、とくに尋ね聞  
くべき事有り。侍ども召せと仰せられければ、承りて召しけるに、侍  
には誰々ぞ、和田の小太郎義盛、佐原の十郎、千葉の介、笠居の兵  
衛、豊田の太郎、宇都の宮の彌三郎、うなかみの次郎、小山の四郎、  
なかぬまの五郎、小野寺のせんじ太郎、川越の小太郎、同く小野次  
郎、畠山の次郎、いなけの三郎、梶原平三父子を召されける。鎌倉



○中門、總門は殿舎との間にある小門なり下口は其小門の口なるべし常に罪人などを礼問する所なるべし

○座敷しどろ、禮を正さず亂れたるを云ふ  
○當座、對座といふ如き意にいへり  
○紫へりのた、此頃の紫は今東國うすへりにて

殿仰せられけるは、くわんしゆ房に尋ねどはするさしきには、いづくの程かよかるへき。梶原申しければ、御中門の下口邊こそ能く候ふと申しければ、畠山御前にかしてまゝり、申されけるは、くわんしゆ房の御座敷の事承り候ふは、中門の下口と申し上げ候ふ。是は判官殿にくみし奉りたりといふ、其のゆゑと覺へ候ふ、さすがにくわんしゆ房と申すは、御學匠と申し、天子の御師匠と申し、東大寺の院主にてははしまし候ふ。御氣色わたらせ給ふによつてこそ、是迄も申しくだし參らせおはしまして候へ。さてそ遠國にて候ふとも、座敷しどろにては、世の聞へもあしく存じ候ふ。下口などにての御尋ねには、一言も御返事は申され候はじ。たゞ當座の御對面や候ふべからんと、申されたりければ、頼朝もかくこそ思ひつれとて、御簾を日比より高々まかせて、御さしきには紫へりのたゝみ、すいかんに立ゑばしにて、御見參有り、堀の藤次くわんしゆ房を入れ奉る。鎌倉殿思召しけるは、何ともあれ、僧徒なれば、究問は叶ふまじ、言

一人づゝの座に敷しなりうれに紫敷さしたる也

○陳狀、調狀を陳述する詞をいふ  
○かたつ、片端を合込て尋問したるをいふ  
○しやうの云々、按るに師匠の甘心に入りしよりとの義なるべし

○いやき、いの字の上にかの宗坂たるにて成行を正しくなるべし  
○三衣、僧の衣服を指すの語は佛教を論ぜし俱舍論なるの語をいふ

葉を以てつめて、せめあせて、とはんずる物をと思召しけり。とくご御さしきに居なをり給ひけり。とかく仰せ出されたる事もなくわらいて、大の御眼にてはたとにらませ給ひてぞおはしける。とくこそをみて、あはれ人の御心の中も、さてそ有らめと思はれければ、手にきりて膝の上におきて、鎌倉殿をつくぐとまもりて、御問狀も陳狀もさてそあらんずらんと覺へて人々かたつをのみ居たりけり。頼朝堀の藤次を召して、是がくわんしゆ房かと仰せられければ、近家かしてまつて予候ひける。しばらく有りて鎌倉殿仰せられけるは、押僧徒の身と申すは、釋尊の教法まなひて、しじやうのかんしんにいつしより此かた、いきようをたゞしく、三衣を墨染にて、佛法をこらうらうし、經論諸教のまへに眼をさらし。無縁の人を用ひ、結縁のもののみちびくこそ、僧徒の法とは申し候へ。何ぞ謀叛の者とくみして、世をくつがへさんどのはかりこと世にかくれなし。九郎天下の大事になり。國土の亂をたくむ者を入れたて、あまつさへ奈良

五り  
七り  
入侍



○おたしからず、  
感しかうなり

○すくやかならん  
ことなり、誰かな  
らん小舎人の義な  
り小舎人は難人な  
り

法師を我にくみせよとの給ふに、用ひざる者をば、九郎にはなち合せて斬らせ給ふでう、甚おだしからず。それを不思議と思ふ所に、猶以て四國西國の軍兵を一つになし、中國畿内の者をもめされんに、参らざる者をば、片岡武藏など申す、あらずともをさしつかはし、追討して御覽せよ。他所はしらす、東大寺興福寺は、よくこがはからひなれば、かなへさらん時は、うち死せよなんぞ、すゝめ給ひたる事、以ての外に覺へて候ふに、人をつけて都までおくられ候ひけるは、九郎か有所にたいては知りたるらん。虚言をかまへず正直に申され候へ。其旨なくば、すくやかならん、小舎ねりめらに仰せ付けて、糾問を以て尋ねん時、頼朝ころまつたく御事のものには有まじけれど、したゝかにとはれければ、くわんしゆ房はどかくの返事にもおよばず、はらくと、涙をなかし、手をにぎりてひさの上におき、萬事をしづめて、人々聞き給へ。そもく聞きもならはぬ言葉かな、わ僧はいかに、よくこと名字をよびたりとも、おかくしんにて

天の弟

○いやくの弟、  
彌まきれなき弟との  
語

○衛門督、源平の  
乱の主謀者は  
○頼朝、義朝の長  
男にして頼朝の兄  
なり平治の亂後捕  
はれて誅せらる  
○朝長、義朝の次  
男にして是も頼朝  
の兄なり平治の亂  
後義朝と共に運れ  
道にて病みて従ふ  
事能はず父に乞ふ  
て殺されし人  
○なや、北條中  
の小子なり平家物  
語にて見えたり

は、よもあらじ。わそうどの給ひたればとて、高名も有るまじ、都にて聞きしには、國の將軍と成りて、かゝる果報にも生れけり。情もおけするを聞きしに、果報は生れ付の物也、殿のためにもいやくの弟、九郎判官には、はるかにおどり給ひたる人にて有りけるや。申すに付けて陰なき事にては候へとも、平治に御邊の父、下野の左馬の頭、衛門の督にくみして、京の軍に討ちまけて、東國の方へ落ち給ひし時、義平もきられね。朝長も死ぬ、明る正月の初には、父も討れしに、御邊の命をしく、かねて美濃の國伊吹山の邊をまよひありき、おもとの者どもに生えられ、都までひきのぼせ、源氏の名をなかし、すでに誅せられ給ふべかりしに、池殿のあはれみおかくして、死罪を申しなためられて、彌平兵衛に預けられ、永曆の八月の比かどよ、伊豆の北條なごやの蛭か島といふ所に流され、廿一年の星霜をへて、田舎人と成りて、さこそかたくなはしくおはすらめと思ひしに、少しもたがはさりけり。あらむさんや、九郎判官と



敬拜し給ふ事、ことほりかな。判官とまうすは、情も有り、心も強なり、慈悲ふかくおはしまし候ふなり。治承四年の秋の比、奥州より馬の腹筋はせきり、駿河の國うき島か原にかり居て、一方の大將軍請取りて、一張の弓を脇にはさみ、三尺の劔をはきて、西海の波にたよひ、野山を家とし、命を捨て、身を捨れ、いつしか平家を討ふとして、御身をせめて一兩年世にあらせ奉つらばやと、骨髄をくだき給ひしに、人の讒言今に初たる事にては候はねども、ふかき心ざしを捨て、兄弟の中不和に成り給ひし事のみこそ、甚以ておろかなれ。親は一世の契、主は三世の契と申せども、是か初やらん、中やらん、をはりやらん、我もしらす、兄弟は後生まての契とこそ承り候へ。其の中をたがへ給ふとて殿をば人の數にてはおはせぬ人と、世には申すげにこそ候へ。去年十二月廿四日の夜打更て。日頃は千騎万騎を引々してこそおはしまし候ふに、侍一人をだにもくせず、腹巻斗に太刀はきて、あみ笠といふ物うちき、万事を頼むとておはし

○申すげに、申す種子との様なり

○あらぬ事、僧を引らひて従はぬをば放ち合せてうたせし事なす

○おまん、わうざんにて狂言の音なるべし

（あはれ）  
やうをかとし  
へりぞかし

たりしかば、いにしへ見すしらぬ人成とも、いかでか一度の慈悲をたれざらん。一度はくんこう望み、いかなる時は祈りしぞ。いかなる時はうち奉るべき。是を以てけうりやうし給へ。あらぬ様に人申したりし事の、もれ候ふげにこそ。去年の冬のくれに、出家し給へど、たびくすめ、申しかども、其堀原がために、出家はしたくもなしとの給ひ候ひつる。其比判官殿はき給ひし太刀を、うばひ取り奉つらんとて、悪僧どもきられ参らせて候ひしを、人のわざんをかまへて、申し候ひつらん。まつたくなら法師くみせよと、申したる事、さらになし。其ちうよらに南都を落ち給ひし間、心中のいか斗やるかたもなく、おはしますらんと存し候うて、いさめたる事候ひし。四國九國の者を召し候へ。東大寺興福寺は、とくこがはからひなり。君は天下に御覺をいみせくて、院の御感にもいらせ給ひて候へば、在京して、日本を半國つゝ知行し給へど、すゝめ申せしかども、とくこか心をきやうしやくして、出て給へば、申々はつかしくこそ、思



○まやうしやく、校附にて考へ附むやうの能なるべし  
○君にしたらね、頼朝かは知られぬにて官仕は奉公と云か如し

ひ奉り候ひしか。君にもしられぬ宮づかひにて候へども、殿の御爲にも祈りしやかし。平家追討の爲に、四國におもむき給ひしに、波部にて、源氏の祈りしつべき者や有ると、尋ぬられ候ひけるに、いかなるたまのものが、見参に入れて候ふ。とくこを見参に入れて候ひければ、平家を呪咀じて、源氏をいのれと仰せられ候ひしに、其罪のがれなんと、たびく辭退申しかば、御房も平家と一つになるかと、仰せられ候ひしおそろしさに、源氏を祈り奉りし時も、天に二の目てらし給はず。二人の國王なしどころ申候へども、我朝を御兄弟、手にぎり給へどころ、祈り参らせしに、判官は生れ付不運の人なればつひに、世にもたち給はず。日本國残る所なく、殿一人して知行し給ふ事、これはとくこか祈りの、感應する所にあらずや。是より外はいかに私問せらるるども、申すへき事候はず。かたの如くも智恵有る物を思はずは、何の益か有るべき。いかなる人承りにて候ふぞ。とくく首をはねて、鎌倉殿の憤りを休め奉り給へやと、

○殿一人して、朝朝一人してとなり

○あはれ、あつはれの能なり  
○人のまはとくこをさしていふ

残る所もなくの給ひて、はらくとなき給へば、必有る侍ども、袖をぬらさぬ人なし。頼朝もみすをさつと打おろし給ひて、萬事御前しづまりぬ。やゝ有りて、人や候ふと仰せられければ、さはらの十郎、和田の小太郎、畠山三人、御前に畏まつて予候ひける。鎌倉殿、たからかに仰せられけるは、かゝる事こそなけれ。六波羅にて尋問くべかりしを、梶原申すに付けて、御房を是まで呼び下し奉りて、さんくに悪口せられ奉りたるに、頼朝こそ返事にをよばず、身の置所なけれ。あはれ人の陳状や。尤かくこそ陳じたくあれ。誠の上人にておはしましける人かな。ことばりにてこそ、日本第一の大伽藍の院主とも成り給ひけれ。朝家の御祈にもめされける、ことばりとぞ感せられける。此人を鎌倉に、せめて三年とゞめ奉りて、此所を佛法の地となさばやと、仰せければ、和田の小太郎、さはらの十郎承はり、くわんしゆ房に申しけるは、東大寺と申すは、星霜久しく成りて、利益候ふ所なり。今の鎌倉と申すは、治承四年の冬のころ、



○十悪、殺生偷盜淫慾賭博懸懸口兩舌貪瞋痴を云ふ佛家の罪  
○五逆、君を殺し父母を殺し夫を殺し兄を殺すをいふ  
○破戒、佛家より出たる罪にて佛の戒律を破る物をいふ

初てたてし所なり。十悪五逆破戒無暫の輩のみおほく候ふへば。是にせめては、三年わたらせおはしまして、御利益候へかして申せと候ふと、申したりければ、とくこ、仰せざる事にて候へとも、一兩年も鎌倉に有度も候はずと仰せられける。かさねて佛法興立の爲にて候ふと、申されければ、されは三年は是れにこそ候はめと、仰せられけり鎌倉殿大きに悦び給ひて、いづくにかする奉るべきと仰せられしかば、さはらの十郎申しけるは、あはれよき次第にて候ふ物かな。大御だうの別當に参らせ給へかして、申されたりければ、いしく申したりとて、佐原の十郎初て奉行を承りて、大御だうの造營を仕り、勝長壽院のうしろに、檜皮の御山庄を作りて、入れ奉る。鎌倉殿も日々の御参詣にて候ひける。門前に鞍置馬たちやひひまなし。鎌倉は是れぞ佛法の初めなる。折々ことに、判官殿御中なほり給へと仰せられければ、安き事にて候ふとは申し給ひけれとも、梶原平三、八ヶ國の侍のしよしなりければ、景時父子が命にしたかふ

○さふらひの所司、頼朝鎌倉に幕府を開きて侍所を置れ和田小太郎義盛を以て別當とす別當に亞くは所司あり梶原平三景時この所司たり別當所司の任たるや家人の武士を推退し出ては軍奉行となりて機密に預るか故に其権威甚強大なりしなり

○女房、幕中には女官御家にて侍女すへて女の奉公して一局に住める者を云ふ稱なり受むるは妾の類月聞ゆ

者、風に草木のなびくおせいなれば、鎌倉殿も、御心に任せ給はず。かくて秀衡か存生の程は、さて過ぬ。死去の後は嫡子元吉の冠者か、はからひと申して、文治五年四月廿四日に、判官うたれ給ひぬと聞召しければ、誰ゆゑに今まで鎌倉になからへけるぞ、かほどうき鎌倉殿に、いとまこひも無益とて、急き上落あり。院もなほ御たつとみふかくして、東大寺に歸りて、此程すたれたる所とも造營し給ひ、人のとひくるも物うしとて、閉門しておはしけるが、自筆に二百三十六部の經をかき供養して、判官の御菩提を弔ひて、我御身をは水食をとめて、七十餘にて往生をぞとげられけり。

六 静鎌倉へ下る事

太夫判官四國へ趣き給ひし時、六人の女房達、白拍子五人、惣じて十一人の中に、殊に御心ざし深かりしは、北白川の静と云ふ白拍子、吉野の奥まで具せられたりけり。都へかへされて、母の禪師がもとにそ候ける。判官殿の御子を枉じて、近き程に産をすへきにてあり



○白拍子、元來拍子の名なるが御曲の名なりしなり其様は白き水干に袴をさし、せ馬帽子引入たりければ男婦とも云し由徒然草に載たり源平盛衰記に馬千姫若の前に始るとあり當時盛に流行して高貴の人も厭せしなり

○堀の藤次云々の事は疑ひあり此事東鑑に據れば藤は吉野山にて輝色等に財寶を奪取し一人山中に彷徨せしを吉野の衆徒捕へて鎌倉へ獻りし申を正しく載たり恐くは本文限りなるべし

○法勝寺、自信公の創立にして洛東にありしなり今の南禅寺の邊なりと古老云へり

○能は天下に嘘れなし、能は能をいふにて今の能曲には非ず反靜か舞に堪能なり事は徒然草に多助助か申けるは通衆入

しを、六波羅に此事聞えて、北條殿江馬の小四郎を召して、仰合られけるは、關東へ申させ給はでは叶ふまじとて、早馬を以て申されければ、鎌倉殿、梶原を召して、九郎か思ふ者に、靜と云ふ白拍子、近き程に産すべきよしなり。如何有るべきと仰られければ、景時申けるは、異朝を訪ふらひ候にも、敵の子を妊じて候女をば、景時申き顔を拉ぎ、髓をぬかるゝ程の罪科にて候なれば、もし若君にておはし候は、判官殿に似參らせ候とも、又御一門に似參らせ給ふとも、愚かなる人にてはよも御坐まし候まじ。君の御代の間は、何事か候べき。君達の御行衛こそ覺束なく思ひ參らせ候へ。都にて宜旨院宣を御申し候てこそ、下し給ひて御座近く置き參らせ給ひ、御産の体御覽して、若君にて渡らせ給ひ候は、君の御計ひにて候べし。姫君にて候は、御前に參らせ給ふべしと申したりければ、然らばとて堀の藤次を都へ上せられける、藤次六波羅にも着きしかは、北條殿と打伴れ、院の御所に参りて、此由を奏聞しければ、院宣に

は、先きの冠者はらのごとくには、有るべからず。時政かはからひに尋ね出し、關東へ下すべしと仰下されければ、北白川にて尋ねけれども、遂に通るへきにはあらねども、一旦の悲しみを遁れん爲めに、法勝寺なる所に隠れ居たりしを、尋ね出して、母の禪師諸共に具足して、六波羅へ行く。堀の藤次請取りて下らんとしける、磯の禪師か心の中こそ無慘なれ。共に下らんとすれば、眼の當り憂き目を見んすらんと悲しき、又止まらんとすれば、唯獨りさし放つて、遙々と下さん事もいたはしく、それ人の習ひにて、子五人十人持たるも、一人欠くれば嘆くやかし。況んや自からか、唯獨り持たたる子なれば、止まりてもたへて有るべきとも覺えず。去りども愚かなる子かや、姿形は王城に聞えたる、能は天下にかくなし。兎に角に諸共に下らんと思ひ、預りの武士の命をも背きて、徒歩跳にて下りける。幼少より召使ひし、さいはう、其あまど申ける、二人のはしたものの、年頃馴れし、主の名残をしみて、なくくつれてぞ



御師の手の中に興  
ある事共を携ひて  
鶴の御師と云ける  
女にをしえて舞せ  
けり云々御師かむ  
すめ静と云ける此  
舞をつけり是白拍  
子の根元云々とあ  
るにて知るべし  
○二位殿、頼朝の  
室政子を云なれど  
二位に叙せられし  
は遙に後年の事な  
るを後より云へる  
詞なり

下りける、親家も道すがら、様々に勞はりてぞ下りける。兎角して  
都を出て、十四日に鎌倉に着きたり。此由申上ければ、静を召して、  
尋べき事有りて、大名小名をぞ召されける。和田畠山宇都の宮千  
葉葛西江戸河越を初として、其數を盡して悉も鎌倉殿には、門前に  
市をなしておびたし。二位殿も静を御覽せられんとて、幔幕を引  
き、女ばう其數参りあつまり給ひけり。藤次ばかりこそ、静を具し  
て参りたれ。鎌倉殿静を御覽じて、ゆうなりけり。現在弟の九郎だ  
にも、愛せざりせばとぞ、思し召しける、御けしきに見え給ひけり。  
母の御師も、二人のはしたるものも、御前へは参り得ず。門前に泣き  
居たり。鎌倉殿是を聞き召して、門前に女の聲として、さも高聲に  
泣き叫ぶは、如何なるものぞと、御尋ね有りければ、藤次承り、静  
が母と、二人の下女にて候と申しければ、鎌倉殿女は苦しかるまじ。  
こなたへ召せとて召されけり。鎌倉殿仰せられけるは、殿上人には  
見せ奉らすして、など九郎には見せけるぞ、其上、天下の敵に、成

○天下の敵、制敵  
といふ此時諸國追  
討の院宣を下され  
し故なり

○神泉苑、二條に  
あり油の形今も存  
す古は大きふる油  
にて歷代の帝王此  
所にて雨を降り玉  
ひし事多し  
○人々あまた、思  
ひ人多かりしかど  
もとの哉  
○堀川殿、義經の  
邸六條堀川なり

○こしかた、來し  
方にて既往の事な  
り

り参らせたる者にて有るにぞ、仰せられければ、御師申しけるは、  
静十五の年までは、多くの人の仰せられしかども、廊下も候はさ  
りしかども、院の御幸に召し具せられ参らせて、神泉苑の池にて、  
雨の祈りの舞の時、判官に見えそめられ参らせて、堀川の御前に召  
され参らせしかは、唯だ假染の御遊びの爲めと。思ひ候へしに、割  
なき御心さしにて、人々あまた渡らせ給ひしかども、所々の御住居  
にてこそ、渡らせたまひしに、堀川殿に取置かれ参らせしかば、清  
和天皇の御すえ、鎌倉殿の御弟にて参らせ給へば、是こそ身に取  
は面目と思ひしに、今かゝるべしと、かねては夢にもいかでか知り  
候べきとて、さめくゝとなきければ、御前の人々は是を聞て、鎌倉殿  
の御前をもはからず、こし方より今迄の、静が身の上を、おめす  
をくせず申たりくゝとて、各稱め給ひけり。其後鎌倉殿仰られける  
は、九郎が子を妊じたる事、世に隠れなし。只今陳し申に及ばず、  
近き程に産すべきとこそ聞きつれ。頼朝が爲めには、全く敵の未な



○つよやく、口の  
中にてつよやくと  
物言ふやうの事  
にて俗に小言をわよ  
と云に似たり

れば、静が胎内をあけ、子を取て失ひ、梶原とぞ仰せける。静も母も是を聞きて、兎角の御返事にも及はず。手に手を取り組み、顔に顔を合はせて、聲も惜しませず悲みけり。二位殿も聞し召して、静が心の中、さこそと思ひやられ給ひけん、御幕の内に御落涙の音頻りにこそ聞えけれ。侍共承りて、かゝる情なき事こそなけれ、然あらぬだに、東國はをんこくとて、恐しき事に云ひならはし候に、静を失なひて、名を流し給はん事こそ、淺ましけれとぞ、つぶやきける。梶原此事を聞てつゐたち、御前に参り、畏てぞいたりける。人々是を見て、あな心なや、又如何なる事か、申さんずらんと、耳をそばたてゝぞ聞きけるに、静の事承り候、少人てそかきり候はんづれ。母御前をさへ、失へ参らせ給はん事、其罪いかでか、遁れさせ給ふべき。胎内にやどる、十月を待つこそ、久しく候へ。是は既に、來月御産あるべきにて候へば、源太が宿所を、御産所と定めて、若君姫君の左右を申上べきと申たりければ、御前なる人々袖をひき膝を

○つい立ち、突い  
立ちにて寝立つ  
事

○自然の事、産死  
といふ産婦人の  
大事とする故に存  
亡不定に思ふなり

さし、此世中はいかさま未代といひながら、たゞ事あらじ。是程に梶原が、人の爲に憐みを思ひて、申したることはなしとぞ申あへり。静是を聞き、都を出でし時よりして、梶原と云ふ名を聞くだにも心うかりしに、況して景時が宿所に有て、産の時自然の事あらば、よみぢのさはりとも成るべし。あはれ同じくは堀殿の承ならば、いか斗りうれしかりなると、工藤左衛門して申したりければ、鎌倉殿に申入れれば、道理なれば安き事なりと仰られて、堀の藤次返したる。時に取て親家面目とぞ申ける。藤次は急ぎ宿所に歸りて、妻女にあひて云けるは、梶原既に申し給ひて候つるに、静の訴訟にて、親家に返し預り参らせ候へぬ。判官殿の聞し召さるゝ所も有り。是にて能々勞はりて参らせよとて、我は側に候て、やかたをば御産所と名付て、心有る女房達、十餘人付け奉りて予、もてなしける。磯の禪師は、都の神佛に予祈り申ける。稻荷祇園賀茂春日日吉王山七社八幡大菩薩静が胎内にある子を、例へ男子なりとも、女子になしてた

○稻荷祇園賀茂、  
京都春日は大和日  
吉王山七社近江  
八幡は山城なり



○其月、産の臨月をいふ  
○其心つく、産の期にのちむなり

○祈る祈りは云々、女子にあらずを諸神に祈りしも空しくさなり

○藤倉、前世にて成したる業の現世に報ふを云なり

べと予申ける。斯くて月日かさなれば、其月にもなりにけり。静思ひの外に堅牢地神も憐れみ給ひけるにや、痛むこともなく、其心付くと聞て、藤次の妻女、禪師諸共にあつかひけり。事さら御産も平安なり。少人なき給ふ聲を聞きて、禪師餘りの嬉れしさに、白き絹にをしまきてみれば、祈る祈りは空しく、三神相應したる若君にて予おはしける。唯一目見てあな心うやとて、打伏しけり。静是を見て、いと心も消えて思ひけり。男子か女子かと問へ共答へねば、禪師の抱きたる子を見れば男子なり。一目見てあら心うやとて衣をかづぎて伏しぬ。稍々有りて、いかなる十悪五逆のもの、偶々人界に生を受なから、月日の光をも定だかに見奉らすして、生れて一日一夜をだにも過さず、頓て冥途に歸らんこそ無慘なれ。前業限り有る事なれば、世をも人をも恨むべからずと思へ共、今の名残り、別かれの悲しきぞやとて。袖を顔におし當て、ぞ泣き居たる。藤次御産所に畏て申けるは、御産の左右を申せと、仰せ蒙り候間、只今

○抱き初めよ、失へとの命を包めてケ様にいへるもの也

参りて申し候はんずると申ければ、迎も通るまじき事ならねば、とくくど予云ける。親家参りて、此由を申したりければ、安達の新三郎を召して、藤次が宿所に静が産したり。頼朝が鹿毛の馬に乗りて行き、由井の濱にて失しなへと仰せられければ、消常御馬給はつて打出て、藤次の宿所に参りて、禪師に向ひて、鎌倉殿の御使に参りて候。少人は若君にて渡らせられ候よし、聞召して抱きそめ参らせよとの、御説にて候と申ければ、憐れはかなき消常かな、すかさば賊と思ふべきや。親をさへ失なへと仰せられし敵の子。殊に男子なれば疾く失なへとこそ有らめ。しばし最期の出で立せさせんと申されければ、新三郎岩木ならねば、さすが憐れに思ひけるが、心よはく待けるが、斯くて心よはく叶ふまじと思ひ。ことく敷候御出立も入候まじとて、禪師が抱きたるを奪ひ取り、わきに狹み馬に打乗り、由井の濱にはせ出でけり。禪師悲しみけるは、ながらへて見せ給へと申さばころひがことならめ。今一度幼けなき顔を見せ



○うの駒、神樂舞の臨曲の名なるを  
空には其をとりて  
下女の名に用ひし  
なり

給へど、悲しみければ、御覽しては中々思ひかさなり給へなんと、  
情なきけしきにて、かすみを隔て遠ざかる。禪師は草履をだにも着  
きあへず、薄絹かつがすそのこま計り具して、濱の方へ下りける。  
堀の藤次も禪師をどさらへて、跡につきて下りける。静も共にし  
たひけれども、堀が妻女申けるは、産の別れなりとて、様々に諫さ  
め取り止めければ、出でつる妻戸の口に倒れ伏してぞかなしみける  
禪師は濱に尋ね、馬の跡を尋ぬれ共、少人の死體もなし。今生の契  
りこそすくなからめ。むなしき姿を今一度見せ給ひと、悲しみつゝ、  
なきさを西へ歩みける所に、いなせ川のはたには、眞砂に蹴られて、  
子共あまた遊びけるに逢ふて、馬に乗たる男の口かど、泣たる子や、  
すつるとへは、何かはみわけ候はね共、あのみぎはの材木の上に  
こそ、なげ入れつれと云ける。藤次が下人居りて見ければ、只今迄  
は、つぼむ花のやうなりつる少人の、いつしか今は引きかへて、む  
なしき姿を尋ね出して、磯の禪師に見せければ、おしまきたる衣の

○母に見せて、母  
は馬子に對して静  
をいへるなり  
○中々、返りてと  
云におなし

○生をかへたる、  
死して現世を生  
目しからぬなり  
○あやしやう、哀  
傷さてなるへし

色はかはらねども、あとなき姿と成りはてけるこそ悲しけれ。若し  
や若しやと、濱の砂の暖かなる上に、衣のつまを打引きて置きたり  
けれども、事きればはて、見えしかば、取て歸りて母に見せて、悲し  
ませんも中々罪ふかしの思ひて、爰に埋まんとて、濱のいさを手  
にて掘りたれども、こゝも淺ましき牛馬の蹄の通ふ所とて、いたは  
しければ、さしも廣き濱なれども、捨て置くべき所もなし。唯だむ  
なしき姿を抱きて、宿所に歸りける。静是を請取、生をかへたる  
ものと、へだてなく身にうへて悲みけり。あやしやうとて、親のな  
げきは、ことに罪深き事にて候物をとて、藤次が計らひにて、少人  
の葬送、故左馬の頭殿の爲めに建立せられける、勝長壽院のひがし  
に、埋みて歸りけり。斯る物うき鎌倉に、一日にても有るべき様な  
しとて、急ぎ都へ上らんとす出立ける。

七 静若宮八幡へ参詣の事

磯の禪師申しけるは、少人の事は思ひまふけたることなれば、扱お



○三島、伊豆國にあり今宮幣大社なり鎌倉の時殊に尊崇ありと經に見ゆ

○くわしよく、過辱にや然らばくわちよくなり

きぬ。御身安穩ならば、若宮へ参らんと、兼ての宿願なれば、いかでかたゞは上り給ふべき、八幡はあらちを五十一日忌ませ給ふなれば、精選潔齋してこそ、参り給はめ。其程は是にて日數を待ち給へとて、一日くんと逗留有りけり。さる程に鎌倉殿、三島の御社参り予聞えける、八ヶ國の侍共御供申ける、御社参の御つれくんに、様々の物語を予申しける、其中に川越の太郎、静が事を申し出したりければ、各かやうのついでならでは、いかで下り給ふべき。あはれ音に聞てゆる舞を、一ばん御覽せられざらんは、無念に候と申ければ、鎌倉殿仰せられけるは、静は九郎に思はれて、身をくはしよくにするなるうへ、思ふ中をさまたげられ、其かたみにも見るべき子を失なはれ。何のいみじきに、頼朝が前にて舞ふべきと仰せられければ、人々は是は尤も御鏡なり。さりながら、如何して見んする予と申ける。抑といか程の舞なれば、かほせに人々念をかけるる予と、仰られければ、梶原、舞に於ては、日本一にて候予と申しける。鎌

○せきて流れず、水の堰を止らる、を云るなり爰は水のつきしなれば此例少し違へり  
○次第、先例と云か如しれいもんは頼門にて効驗ある寺の觀と云こゆ  
○おけんのりじゆ、示驗納受なり

○内侍と云るに云々、他の九十九人は内侍所に召れて頂戴を下さる、者なればその流はるべし  
○しんむしやう、

倉殿とくしや。何處にて舞ひて、日本一とは申しける予、梶原、申しけるは、一歳百日の日での候けるに、賀茂川桂川みなせきて流れず。つゝ井の水も絶えて國土のなやみに候けるに、しだい久しきれいもん、ひえの山、三井寺、東大寺、興福寺などの有賢の高僧貴僧百人、神泉苑の池にて、仁王經を講し奉らは、八大龍王もちげんなうじゆうたれ給ふべしと、申しければ、百人の高僧貴僧を請し、仁王經を講せらさしかとも、其驗もなかりけり。又或人申しけるは、容顏美麗なる白拍子を、百人召して、院御幸なりて神泉苑の池にて舞はせられば、龍神納受し給はんと云へば、さらばとて御幸有て、百人の白拍子まはせられしに、九十九人舞ひたりしに、其驗しもなかりけり。静一人舞ひたりしとて、龍神ちげん有べきか。内侍所にめされて、祿おもき物にて候に、申したりければ、とても人數なれば、唯だ舞せよと仰せ下されければ、静舞ひたりけるに、しんむしやうの曲といふ白拍子を、なから斗舞ひたりしに、みこし



神無上にて未詳  
○なからば中ばな  
○八大龍王なり波  
り、雷鳴を龍王の  
事にしてへるなり

○一番見たし云  
々、此事東鑑には  
醍醐北方政子の類  
りに所望せられし  
によりて静か舞ひ  
御事とせり本文と  
違へり

のだけ、愛宕山の方より、黒雲俄に出来て、洛中にかゝると見えければ、八大龍王なりわたりて、稻妻ひかめきしに、諸人目を驚ろかし、三日の洪水をながし、國土安穩なりしかば、扱こそ静か舞ひにちげん有りけるとて、日本一と宣言を給りけると承りし、と申しければ、鎌倉殿是を聞召して、扱も一番見たしとぞ仰せられける。誰にかいはせんずると仰せられければ、梶原申しけるは、景時が計らひにて、舞はせんぞと申しける。鎌倉殿いかゝ有るべきとぞ、仰せられける、梶原申しけるは、我朝に住ひせん程の人の、君の仰せを、いかでか背き参らせ候べき。其上既に死罪に定まりしを、かげときが申してこそ、宥め奉りて候へしかば、是非とも舞はせ参らせんずると申しければ、然らば行きてすかせと仰せられける、梶原行きて磯の禪師を呼び出して、鎌倉殿の御酒けにこそ御渡り候へ。かゝる所に、川越の太郎、御事を申し出され候つるに、あはれ音に聞え給ふ御舞、一ばん見せ参らせばやとの、御きしよくにて候。何か苦し

○御舞色、御内意  
と云か如く事にて  
此頃の詞なりいな  
○かやうの道を立  
ける、白拍子を密  
業とする事の及し  
まざるなり

く候べき。一ばん御舞ひ候いて、君に見せ奉り給へかしと申したりければ、此よし静に語れば、あら心うやと斗にて、きぬ引かづぎておし給ひけるが、凡て人のかやうの道をたてける程の、くちをしき事はなかりけり。此道ならんには、かゝる一方ならぬ、なげきのたえぬ身に、さりとてうき人の前にて、舞ひなど、たやすく言はれつるこそやすからぬ。中々つたへ給ふ、母の心ころうめらしけれ。然れば舞はと舞はせんと思し召るかどて、梶原には、返事にも及はず。禪師梶原に此よしを云へければ、相違して歸りけり。御所には今やくと待ち給ひける所に、景時参りて候。二位殿の御方より、いかに返事はと御使有、御鏡と申しつれ共、返事をだにも申され候はぬと申しければ、鎌倉殿も元より思ひつる事を、都に歸りてあらむ時内裏院の御所にて、兵衛のすけの舞ひまへといはざりけるかと、御尋あらん時、梶原をつかへにて、まへと申され候へしかども、何のいみじさに、舞ひ候べきとて、遂にまはずと申さば、頼朝がかひな



○工藤左衛門と  
 う、祐經幼少の伯  
 父伊藤入道が爲に  
 京に上せられ武者  
 所に懸候する事多  
 年にして同所の一  
 騎に至りし人なり  
 故に京童と云ひし  
 なるべし又祐經利  
 口にして善能あり  
 し事なども曾我物  
 所等に見えたり  
 ○さうのづし、塔  
 の圖子にて鎌倉の  
 小字と聞ゆ

きに似たり。いかゞ有るべき、誰か言はずべきと仰せられければ、  
 梶原申しけるは、工藤左衛門こそ、都に候へし時も、判官殿、常に  
 御目かけられし者にて候へ。しかも京童にて、口きゝにて候。かれ  
 に仰せ付らるべく候はむと申しければ。祐經召せとて召されけり。  
 其頃左衛門、たうのづしに候けるを、梶原つれて参りける。鎌倉  
 殿仰せられけるは、梶原以ていはすれども、返事をだにもせず、御  
 へん行きて、すかして舞はせやと仰せられければ、斯る難義の御使  
 かな。御錠にてだにも舞ひ給はぬ人を、某申したればとて、舞ひ給  
 はんども覺えず。かゝる御錠こそ大事なれど、思ひわづらひ、急ぎ  
 我家に歸り、妻女に申しけるは、鎌倉殿より、いみじき大事を承て  
 こそ候へ。梶原を御つかひにて、仰せられつるだにも、もちひ給は  
 ぬ静を、我らに参りて。すかし舞はせよと仰せ蒙りたるころ、祐經  
 が爲には、大事に候へ。といひければ女房聞て、それは梶原にもよ  
 るべからず。左衛門の尉にもよるべからず。情は人のためにもあら

○こちなき、此頃  
 の嗣にて今物語に  
 もあり骨の推なり  
 當時は坂東人なり  
 此妻女は京人と聞  
 ゆればかくは云る  
 也  
 ○さうひ、訪問  
 なり  
 ○小松殿、頂盛を  
 いよ  
 ○たさしき人、  
 上頭をいよ  
 ○伊藤次郎、祐經

○あかぬ中を云  
 々、祐經の前妻は  
 伊藤次郎の女なり  
 しを祐經工藤を感  
 みて其妻を等ひ返  
 したるを云ふ本文  
 同足らず此を合  
 て見るべし

ばころ。景時がゐなかととこにて、こつなきさまのおせいにて、舞  
 をまひ給へとこそ、申しつらめ。御身とてもさこそおはせんずらめ。  
 たゞ様々の菓子を用意して、堀殿のもとへ行きて、とふらひ奉るや  
 うにて、内々こしらへすしらへすかし奉らん、なをかゝなはさる  
 べきと、よにやすげに云ける。祐經が妻女と申すは、千葉の介か  
 京の時、まうけたりし、京わらはの娘、小松殿の御内に、冷泉殿の  
 御つぼねとて、おとなしき人にてぞ有ける。をうち伊藤の次郎に、  
 中をたがひて、本領をとらるゝのみならず。あかぬ中を、引別られ  
 て、其本意をとげんと思ひ、伊豆へ下らんとしけるを、小松殿祐經  
 に名殘を惜しませ給ひて、年ころ少しおとなしけれ共、是を見よと  
 て、祐經に見えろめて、互の心さし深かりけり。治承に、小松殿の  
 かくれさせ給ひて後は、頼むかたなかりければ、祐經に具足せられ  
 て、東國に下りけり。年久しくなりたれども、さすが狂言綺語のた  
 はふれも、いまだ拾れざりければ、すかさん事も、やすしとや思ひ



○其本意を遂げ、伊藤入道を討て所領を取戻さんとの本意なり  
○たをなしけれ、祐經に比しては年のたけたる妻女との哉

○今儀、此頃の曲にて今も有る四段の曲なれど此頃は四段に限らざる事此書前より見ゆアリ

けん、急ぎ出立、藤次が宿所に行きけり。祐經先つさきに行きて、磯の禪師に云けるは、此程何ぞなく、打まされ候へば、おろかなりとぞ、思し召れ候らん。三島の社へ御参詣にて、渡らせ給へば、精進なくてはかなひがたく候間、打たへ参り候はねば、返すくれば入れ入て候。祐經がさい女も、都の者にて候。堀殿の宿所まで参りて候。それく禪師よきやうに、申させ給へど、申して我が身は、歸るていにもてなして、側にかくれてぞ候ける。磯の禪師靜に、此よしをかたれば、左衛門の常にとらひ給ふだに、難有思ひ候に、女房の御出までは、思ひもよらず候に、是までの御おとづれ、よろこび入て候とて、我がかたをこしらへてぞいれける。藤次が妻女、もろともに行きてぞもてなしける。人をすかさんとする事なれば、酒宴はじめて、いく程もなかりけるに、祐經が女房、今様をうたひける。藤次が妻女も、催馬樂をう歌ひける。磯の禪師珍しからぬ事なれども、きせんと云ふ、白拍子をうかすへける。さいばらそのこ

○催馬樂、上古より曲なり  
○おんじやう、音響なるべしかうへて白拍子をうたふを云事とてこえて源平盛衰記に佛の前の舞上所に祝の白拍子がうへて舞登したりと見へたり  
○おんじやう、音響歎文字うつりは吉野の條下にいへり  
○かうけつ、桐葉にて今の世の括り染またかの子と云る物なり

○昔京をば云々、祐經の妻の國にて前にいへる狂言筋語これなり

まも、主におどらぬ上手ともなりければ、共にうたひて遊びけり。春の夜のおぼろの空に雨ありて、ことさら世間しづかなり。壁に立ちそふ人もきけ。終日の狂言は、千年の命をのぶるなり。我も歌ひてあそばんとて、別の白拍子をうかすへける。おんじやう、もしうつり、心も言葉も及ばず。左衛門の財藤次、壁をへだてて是を聞てあはれうちまかせのさしきならば、なごかすいさんせざるべきとて、心も空にあまがる、斗なり、白拍子過ぎければ、錦の袋に入たる、びわ一めん、かうけつの袋に入りたる、琴一ちやう、取出て、びはをはこのこまふくろより取り出して、をあわせて、左衛門の財の女房のまへにをく、琴をばさいはら取出しことちたて、靜が前に予置きたりける。管絃過ぎければ、又左衛門の女房、心有さまの物語りなごせられつ、今やいはまじくとぞ思ひける。昔の京をば、なんはの京とぞ申けるに、れたぎの郡に都を立られしより以來、東海道をはるかに下て、ゆいのあしかより、東栢摸の國をさかのこほり、



○をさかの那、今は相模に無し  
 ○和光同塵、佛家の語にて本地垂迹の義に同じ  
 ○八相成道、釋迦の八相にて一上天下天二配林三出林四出家五降魔六成道七轉法輪八入涅槃以上八相なり  
 ○こさいの者、巨細の案内者との義なるべし

ゆいのこし、ひつめのこばやし、鶴が岡のふもとに、今の八幡をいはひ奉る。鎌倉殿にも氏神なれば、判官殿をなとか守り給はさらん、和光とうぢんは、けちえんの初め、八相じやうだらは、りもつの終り、何事か御祈りの感應なからんや。當國一のふさうにて渡らせ給へば、夕はさんろうの輩、門前に市をなす、朝には参詣の輩、肩をならべてくびすをつく、然れば日中には叶ひ候まじ。堀殿の妻女も若宮の案内者にておはしまし候。わらはも此所のこさいの者にて候へば、明日まだ夜こめて、御参詣候て思召す、御宿願もとげさせはしまし。其次でに、御かひなさし、法らくし参らせ給ひ候なば、鎌倉殿と判官殿と、御中もなほらせおはし候て、思召まゝなるべし。奥州に渡らせ給ひ候、判官殿も、聞召しつたへさせ給はし、我が爲めに、たんせいを致し参らせ給ふと聞召しては、如何斗りうれしとこそ、思召し候はんすれ。たましく、かゝる次でならでは、いかでさる事候べき。理をまげて、御参詣候へ。あまりに見奉りてより、

○路宣、神の人に略して宣下ある事

○侍、武士の威候せる席なり遠侍など云る侍なり  
 ○かいなまし、胸さしにはさしは一さし舞ふなど云るるべし今の世の手踊りさ云る程の物と聞ゆ後の詞によれば幸樂にある事と見えたり  
 ○はううつ、放逸にて奇蹟といふ意味なり

いとゝをろかに思ひ参らせず候へば、責めての事に申し候なり。御参詣候はし、御供申し候はんとぞすかしける。静是を聞て、げにとや思ひけん、母の禪師を招きて、いかゞ有るべきと、云はければ、禪師も、あはれさもあらまほしく、思ひければ。是れは八幡の、御説宣にてこそ候へ。是程に深く思召ける嬉しさよ。とくく参らせ給ひと、云ひければ、さらばひるはかなふまじ。寅の時に参りて、辰の時にかたの如く舞ひて、歸らばやと申ける。左衛門の女房、祐經にはやきかせたくて、斯と云はせければ、祐經壁を隔て、聞く事なれば、使の出ぬまに、馬に打乗り、急ぎ鎌倉殿へ参りて、侍につと入れは、君を初め参らせて、侍共いかにやくと問ひ給へは、寅の時の参詣、辰の時に御かいなさしと、高らかに申したりければ、鎌倉殿頓て御参詣有りけり。静舞ぬると聞て、若宮には、門前に市をなす、拜殿回廊の前、雜人共ゐいやつきをして、物の差別も聞え候はずと申しければ、小舎人を召して、はういつにあたりをひ出せ



○尤もさるべし、然有るへしにて舞臺をかくるがよかりんさなり

と仰せける。源太承りて、御誼ぞと云ひけれども、ちひす。小舎人ばらはういつにさんぐくに打ち、男はあぼしを落し。法師は笠を打ちおとさる。きすを蒙るもの、數多有りけれども、是程の見物を一期に一度の大事ぞ、疵はつく共、入らんすとて、身のなりゆく末を知らずして、くより入間、中々騒動する事おびたし。さはらの十郎申しけるは、あはれ兼て知り候は、回廊のまん中に、舞臺を張りて、参らせ候はんずるものと申しける。鎌倉殿聞召し、あはれ誰が申しつるすと、御尋ね有りければ、さはらの十郎申きて候と申す、さはら故實のものなり。尤もさるべし、預てしたくして参らせよと、仰せられけり。十郎承りて、急きの事なりければ、若宮しゆりの爲に、積み置かれたる、材木を一時に、運ばせて、高さ三尺に舞臺をはりて、からあやもんしやを以て包みたる。鎌倉殿御感有りける。静を待つに、日はすでに巳の時斗に、成るまで参詣なし。いかなる静なれば、是程に人の心をつくすらんなど、ぞ申しける。

○からあや、最上の綾きんしやは紋紗にて妙に紋ある所謂の舞紗なり

○其日の役人、舞の役をするといふ

○すきもの、せうしや、すきもの好色家をいふせうしやは笑止やにて曲引の調なるへし  
○さしも聞えぬ、さはら高名ならぬとの事

○ちくさ、千種にて種々に勧誘するを云ふ

遙に日闕て、こしをかきて出来る。左工門の財應次が女房もろとも、打つれて回廊にやまうでたりける。禪師、さいばら、そのこま、其日の役人なりければ、静とつれ回廊の舞臺へなをる。左工門の女房は、同姿なる女房達、三十余人引具して、さじきに入ける。静は神前に向ひて、ねんじゆしてぞ居たりける。先確の禪師珍らしからねども、法らくの爲なれば、さはらにつみ打せて、すきものせうしやと云ふ、白拍子をかやへて舞たりける。心も言葉も及はれず。さしも聞えぬ、禪師が舞だにも、是程おもしろきに、況して静が名にしおふたる舞なれば、さこそ面白かるらんとぞ、申しあひけり。静人のふるまひ。まくの引きやう、いかさまにも、鎌倉殿の御参詣と覺えたり。祐經か女房すかして、鎌倉殿の御前にて舞はすと覺ゆる。あはれ何共して、今日の舞をまはで歸らばやとぞ、ちくさにあんじ居たりける。左工門の財を呼ひて申しけるは、今日は鎌倉殿御参詣と覺え候。都にてないし所にめされし時は、内藏頭の



○四條のきすは  
ら、此御不審なり  
もしきすはきみの  
誤なりとや  
○わさ、此法樂の  
爲に下向せんと  
なり

○内の御かやう、  
舞中にて内侍所の  
御樂と云る事  
ある也されど御樂  
につまみを打つ事  
を聞かず梶原が傳  
聞の誤なるべし

ふみつに囀されて、舞ひたりしぞかし。神泉苑の池の雨さひの時  
は四條のきすはらにはやされてより舞候ひしが、此度は御おしんの身  
にて、召し下され候ひしかば、つまみ打などをもつれても下り候は  
ず。母にて候人のかたの如くの、かいなさしを法らくせられ候。我  
々は都に登り、又こそつまみ打用意して、わざと下りて、法らくに  
舞候はめとて、頓てたつけしきに見えければ、大名小名是を見て、  
興さめてぞありける。鎌倉殿も聞召して、世間せはき事かな。鎌倉  
にてまはせんとしけるに、つまみ打のなくて、遂にまはざりけりど、  
聞えん事ころ、耻かしけれ。かちはら、侍共の中に、鼓打つべき者  
や有る、尋ねて打たせよと、仰せられければ、景時申しけるは、左  
衛門の尉ころ、小松殿の御時、内のみかぐらに召され候けるに、殿  
上に名を得たる小鼓の上手にて候なれど、申したりければ。さらば祐  
經打て舞せよと、仰せ蒙りて申しけるは、あまり久しく仕らで、つ  
つまみの手色などよと、思ふ程に候まじけれ共、御詮にて候へば、仕

○鼓の手色の手、  
曲をいよ色口青色  
(ないう)などのい  
ろなり  
○鐘、大に見えた  
る御拍子の事なり

○なんばう、どれ  
位の事やあると云  
ふ語なり  
○とびやうし、御  
拍子とて今の撞鐘  
のことなり  
○時の子  
○かほさり  
○かくさう、樂家  
なり

りてくを見せ候はめ。たゞし鼓一ちやうにては、かなおまじ。鐘の  
役を、召され候へと申たり。鐘は誰れか有るべきと、仰られければ。  
中沼の五郎ころ候へと、申しければ、尋ね打せよと仰せければ、眼  
病の身をそんじて、出仕を不仕と申しければ、さ候は景時仕りて、  
見候はやと申せば、なんぼうの梶原はとびやうしと、さへもんに  
御尋有り。中沼に次では梶原こそと、申したりければ、さては苦し  
かるまじとて、鐘の役とぞ聞えける。さはらの十郎申しけるは、時  
の調子大事の物にて候に、誰れにかねとりをふかせばやと申せば、  
鎌倉殿誰か笛吹きぬべき者やあると、仰せられければ、和田の小太  
郎申しけるは、畠山こそ院の御威に入し、笛にて候へと、申しけれ  
ば、いかでか畠山の賢人だいの、異様のかくたうにならんとは、  
かりそめなりともよもいはじと、仰せられければ、御詮にて見候は  
んとて、畠山の座敷へ行きける。畠山に此子細を御詮にて候と申し  
ければ、畠山君のみうちきりせめたる、工藤左衛門つまみ打て、八



○かくしやう、俗性にて繪性の事なり系圖正敷と云ふか如し  
○紺くつ、紺色の萬壽なり結は今の萬布なり  
○袴のうば、袴の相引の左右さまに

○なむりやう、南鏡にて金の名なり  
○たくはく、五色の糸を交せて組たる紐なり  
○色くしく、花々しくの事なり

ヶ國の侍の所司梶原がとひやうしあはせて、重忠が笛吹きたらんずるは、ぞくしやうたゞしき、かくたうにこそ、あらんずらんと、打わらひて、従ひ参らすべきよしを、申し給ひつゝ、三人のかくたうは、所々より思ひくに出立ち出られけり。左衛門の尉は、こんくすの袴に、とくさ色のすいかんに、たてゑぼし。したんの唐羊の革にてはりたる、鞍のむつの緒のしらべをかきあはせて、左の脇にかきはさみ、袴のそはたからかに差狭み、上のまつ山廻廓の天井にひよかせ、手色打ならして、登りのかくたうを待ちかけたり。梶原はこんしすの袴に、山鳩色のすいかんたてゑぼし、なむりやうを以てつゝりたる、黄金のきくかた打たる圓拍子に、たくほくの緒を入れ、祐經か右の坐敷になをりて、鞍の手色にしたかひて、鈴蟲などの鳴く様にあはせて、畠山を待ちけり、畠山は幕の綻びより、坐敷の鉢をさしのぞきて、別して色々しくも出たゞす。白き大口に、白きひたゞれ、紫草の紐付て、折ゑほしのかたくをきつとひきたて

○やうてう、横調にて笛の事なり

○かくとう、樂黨なるべし樂人の姓なり

○わりびし、刺菱にて菱を割たる圖を繪せしなり  
○みなくれなむ、一面に紅色に染たる扇なり

、松風と名付たる、かんちくのやうでうを持、袴のそばたからかに引きあげて、幕さど引あけつと出たれば、大の男のおもらかに、歩みなして、ふたいにのぼり、祐經が左の方にす、居なをりける。名を得たる美男なりければ、あはれなりとぞ見えける。其年廿三にそ成ける。鎌倉殿是を後覽して、みすの内より、あはれかくたうやとぞ、ほめさせ給ひける。時に取ては興あかしとぞ見えける。静是を見て、よく予辭退したりける。同じくは舞ふとも、斯るかいたうにてこそ舞ふべけれ、心かるくも舞たりけり。いかにかるく敷あらんとぞ思ひける。禪師をよびて、舞のしやうやくをぞしたりける。松にかゝれる藤の花、池のけきはに咲きみだれ。そら吹風は山かすみ、はつねゆかしきほとゞすの聲も、をりしり顔に予覺ねける。静が其日の装束には、白き小袖一かさね、唐綾を上にはきかさねて、白き袴ふみしたき、わりびしぬいたる水干に、たけなる髪をたからかに、結なして、此程のなげきにおもやせて、薄げしやう眉



○かいどう東、海  
道なり  
○白拍子は多く、  
白拍子の曲は多く  
知りたれ共との義  
なり  
○あゝ感ずる、あ  
つと聲を揚てほひ  
るなり  
○心なしてや、  
静に余り長く舞は  
せんは心無しのの  
指なり  
○せめをうまちた  
りるは追めて  
静の事なり  
○一折、平家物語  
藤原の月見に折返  
しく舞ふと云ふ  
事あり一折は物語  
に同じ一かへりと  
云か如し  
○しつやしつ、古  
今集に「古の舞の  
をた巻くり返し昔  
を今になすよしも  
かな」と云る初の

細やかにつゝりなし、みなくれなるの扇をひらき、ほうでんに向ひ  
てたちたり。さすが鎌倉殿の御前にての舞なれば、おもはゆくや  
思ひけん、舞かねて予やすらひける。二位殿は是を御覽じて、去年  
の冬、四國の波の上にてゆられ。吉野の雪にまよひ。今年はいだ  
うの、長旅にてやせおとろへて、見えたれ共、静を見るに、我朝に  
女ありともしられたりぞぞ、仰せられける、静其日は、白拍子は、  
おほく知りたれども、殊に心にそむものなれば、しんむしやうの曲  
と云ふ、白拍子の上手なれば、心もよばぬは色にて、はたとあ  
げてぞ歌ひける。上下あゝ感ずる聲、雲にもひよく斗なり。近きは  
聞てかんじけり。聲も聞えぬも、さこそ有らめとて予かんじける。  
しんむしやうの曲、なからばかり、かろへたりける所に、祐經心な  
しとや思ひけん、すいかんの袖を、はづしてせめをぞうちたりける  
静君か代をうたひあげたりければ、人々是を聞き、情なき祐經かな  
と、一折まはせよかしとぞ申しける。せんずる所てきのまへのまひ

五文字を臨時にし  
つやしつと歌めて  
うたひしなり  
○はけなく、身に  
相應せぬことなり  
○おほえし人の云  
々、前の言を今に  
なすよしもかなと  
歌ひしを頼朝不興  
に思ひしに又靜其  
次の句に覺えし人  
の跡たえにけりと  
歌ひ添へたりしか  
頼朝の氣色直りて  
塵を再び上し舞な  
れと此の邊河足ら  
ざるは早くより祝  
文など有りしなる  
へし  
○見入ず、物をも  
食せぬ事なり

ぞかし。思ふ事を歌はとやと、思ひて。  
しつやしつくのをたまきくり返しむかしを今になすよしもかな。  
吉野山みねの白雪ふみわけて入にし人のあとをこひしきと。歌ひ  
ければ。鎌倉殿みすをさとあろしけり。鎌倉殿、白拍子は、興さめた  
るものにて有けるや。今のまひやう歌ひやうけしからず。頼朝おな  
かにすみ馴れしかは、聞しやらじとて歌ひける、しづのをだまきく  
り返しとは、頼朝が世つきて、九郎か世になれとや、あはれおほけ  
なく、覺えし人のあとたえにけりと、歌ひたりければ、みすを高か  
にあげさせ給ひて。かるく歌もほめさせ給ふ物かな。二位殿より  
御引出物、色々給はりしを、判官殿の御祈りのために、若宮の別當  
に参りて、堀の藤次が女房諸共に、打つれてぞかへりける。あくれ  
は都にとて上り、北白川の宿所に歸りてあれども、物をもはかく  
しくみいれず、うかりし事の餘れかたければ、問ひくる人も物うし  
とて、たと思ひ入てぞ有りける。母の禪師も、なぐさめ兼ねて、い



○てんりうじ、天龍寺然らば林下は嵯峨野なり  
○様をかへ、尼になりしをいふ

とゞ思ひあかゝりけり。あけくれ持佛堂に引籠り、經をよみ、佛の御名をとなへて有けるが、斯る浮世になからへても、何にかせんとや思ひけん。母にもしらせす髪を切りて、そりこぼし、てんりうじのおもとに、草のいほりを引ひすび、せむじ諸共に、行ひすましてぞ有ける。妾心人にすぐれたり、をしかるべき年ぞかし。十九にて様をかへ次の年の秋の暮れには、思ひや胸に積りけん。念佛申し往生をぞ還けにけり。きく人貞女の心ざしを、かんしけるとぞ聞えける。

義經記卷六終

義經記卷七

生田目經徳校註

判官北國落の事

○文治二年は東鑑には文治三年二月十日前伊豫守陸奥(陸奥を云ふ)云々  
陸奥伊勢美濃等國  
赴奥州是依侍陸奥守秀衡入道權朝也  
相具妻室男女皆假  
云々とあり本文一年の相違なり或は二を三に誤る歟  
○節所、難路との  
難なり

治二年正月の末になりぬれば、大夫判官は、六條堀河に、忍びておはしける時もあり。又嵯峨のかたほとりに、忍てればしける時もありけるが、都には判官殿の御故に、人々多く損じければ、義經ゆへ、民のわづらひとなり、人あまた損するなれば、いかなる所にもありとせき、見ばやと、思はれければ、今は奥州へ下らばやとて、別れくになりける侍共を召れける。十六人は、一人も心變りなくて予、参りける。奥州へ下らんと思ふに、何の道にかゝりてか、よからんずる予と仰られければ、各申しけるは、東海道こそ名所にて候へ、東山道は節所なれば、自然の事のあらんずる時は、よけて行べきかたもなし。北陸道越前の國敦賀の津に下りて、出羽の國の方へ行かんずる船に便船して、よかるべしとて、道は定め、扱姿をばい



○くわんしゆ坊、  
義經の師にて前卷  
より擧出たり  
○一乗菩提、一乗  
は佛法にて菩提は  
後世を願ふ事跡は  
奥備と云に同じ  
○ごしんさし、藤  
身指にて山川の業  
中の事と聞ゆ

かやうにしてか、下るべきと、様々に申しける中に、増尾の七郎申しけるは、御心安く御下りあるべきに候はし、御出家候ふて、御下り候へと申ければ、終にはさこそあらむすらめども、南都くわんしゆ坊の千度出家せよと教化せられしを背むきて、今身のをき所なきまゝに、出家しけると聞えんも耻しければ、此度はいかにもして、機をもかへず、下らばやとの給ひければ、片岡申けるは、さらば山伏の御姿にて、御下り候へと申ければ、いざとよ、それもいかゝあらんずらん、都を出し日よりして、比叡山王、越前國に氣比の御社平泉寺加賀の國しも白山、越中の國にをきてかみ、出羽國には羽黒山とて、山社多き所なれば、山伏の行逢て、一乗菩提のみね、しやかのたけの有さまは、大金剛童子のごしんさし、富士の峰、山伏の禮義などを問ふ時は、誰かきらくして答へて通るべきと仰ければ、武藏坊申しけるは、うれほどの事こそ、易く御入候ふ。君は鞍馬にねはしまし、かば、山伏の事もあらく御存じ候らん。常陸坊は遠

○せんぼう、阿毘  
無頼法にて台宗に  
て行ふ動行

○ごこ山伏、何れ  
の山伏の事  
○羽黒山、出羽國  
にて當時有名なる  
寺院なりしなり

○頭巾すかけ、

城寺に候しかば申に及ばず。辨慶は西塔に候しかば、一乗菩提のこど、あらく存じて候へば、なごか陳せで候べき。山伏の勤には、せんぼう阿彌陀經をだに、詳らかに讀み候ぬれば、堅固くるしくも候まじ。ただ御思召たゝせ給へとぞ申しける。ごこ山伏と問んずる時は、ごこ山伏とかいはんする。越の國直江の津は、北陸道の中途にて候へば、うれより此方にては、羽黒山伏の熊野へ参り、下向するぞと申べき。それよりあなたにては熊野山伏の羽黒に参ると申べき。羽黒の案内しりたらん者やある、羽黒には、ごの坊に誰がしといふ者ぞと問する時は、いかとせんずる、辨慶申しけるは、西塔に候し時、羽黒の者として、御上の坊に候ひしもの、申候ひしは、大黒塔の別當の坊に、荒讀岐と申す法師に、辨慶はちと違はぬ由、申候ひしかば、辨慶をば荒讀岐と申候べし。常陸坊をば小先達として、筑前坊とぞ申しける。判官仰せられけるは、元より法師なれば、御邊たちは戒名うけずとも、苦しかるまじ。何ぞ男の頭巾すかけ笠



さきんは山伏の冠に鈴かけは山伏の表衣なり  
○葛、葛布をいふ大口は袴の一種なり

○村千鳥をいかりにしたる、千鳥を摺りたる也袴は袖の縫を引て染たるをいふ

○こんづ、行者の履をいふ  
○淨衣、白き狩衣なり

○かちんの腰巾、黄褐色のはつき也福かちの訓を膝負のかちを取なして軍陣にも此色を用ひしなり  
○袴の括り、指貫

かけたらんずるか、片岡或は伊勢の三郎、増尾なをいひたらんずるは、似ぬことにて、あらんずるはいかに、さらば皆坊號をせよとて、思ひくゝに名をぞ付ける。片岡は京の君、伊勢の三郎をば宜旨の君、熊井太郎は治部の君とぞ申しける、扱上野坊、上總坊、下野坊などい云、名をつけてぞ呼ひける。判官殿は殊にしる人おはしければ、あかの付たる白き小袖二つに、矢筈付たる地白の帷子に、葛大口村千鳥をいかりにしたる柿の衣に、ふりたる頭巾、目の際までひつかうで、戒名をば大和坊とぞ申ける。思ひくゝの出立をぞしける。辨慶は大先達にてありければ、袖みぢかなる淨衣に、かちんのはつきに、こんづはいて、袴のくゝりたからかに結いて、新宮やうの長頭巾をぞさげたりける。武藏坊はきさん太と云ふ下部を、強力になして、さげさせたる、笈の足にのめほりたる鉞に、刃は八寸ばかり有りけるをぞ、ゆいそへたり。天頂には四尺五寸の大太刀を具横櫛にぞをきたりける。心つきも出たちも、あはれ先達やとぞ

の袴にて狩衣の下に着る故に狩袴といふ布の括り袴なり襦に括り袴をさし貫ある故にさし貫の袴といふ俗に故袴といふなり  
○新宮様の長頭巾、熊野新宮の山伏の用ひたる一種の頭巾なるべし羽黒山伏の熊野より下向熊野山伏の羽黒に穿る体には必用の物なり  
○袴の目はひ如是く平假名のいの字に似たる故の名なり古は器物の飾りに用ひたり此は父の形にて火は大火なる故に祀せしなり

見えける。惣じて勢は十六人。笈十挺有り。金剛童子の本尊を納れたりけり。一挺の笈には、折らぬ鳥帽子十頭直垂大口を入たりける。残り八挺の笈にはみな鎧腹巻をぞ入たりける。かやうに出たち給ふことは、正月のすゑ、御吉日は二月二日なり。判官殿奥洲へ下らんとて、侍共を召して、かやうに出立つといへども、なほも都に思ひをく事のみおほし。中にも一條今出河の邊にありし人は、未だありもやすらん、具して下らんなどいひしに、しらせすして下りなば、さこそ名残もあかく候はんすゝめ。苦しかるまじくば、具して下らばやもの宜ひければ、片岡武藏坊申けるは、御供申べきものは、皆これへ参り候。今出河には誰か御渡候あやらん、此の御方の事候あやらんと申しければ、此比の御身にては、流石にうよとも仰られかねて、つくぐと打案じ給ひて。おはしける。辨慶申けるは、事も事にころ候はんづれ。山伏の頭巾さゝかけに、笈かけて、女房をさきに立たらんずるは、さしも尋とき行者にも見え候まじ。又敵追かけ



○ちうちやうの  
藤、十丈の藤なる  
べし  
○三従の女、少に  
せして父母に従ひ  
嫁して夫に従ひ老  
て子に従ふを云ふ  
○おほろけなら  
ぬ、大休ならぬと  
云知事阿

られん其時は、女房をしづかに歩ませ奉り、さきに立たらひは、よ  
かるまじく候と申しけるが、思へばいとおしや、此人は久我大臣殿  
の姫君、九にて父大臣殿には後れ参らさせ給ひぬ、十三にて母北の  
方に後れ給ひぬ、其後は乳母の十郎權の頭より外に、頼む方ましま  
さず。容顔いつくしく、御情深く渡らせ給ひけれども、十六の御歳  
は微かなる御住居なりしを、いかなる風の便りにか、此君に見染め  
られ参らせ給ひしより此方、君より外に又知る人も渡らせ給はぬ予  
かし。ちうちやうの藤は松に離れて便りなし、三従の女は夫に離れ  
て力なし。又奥州へ下り給ひたるども、情も知らぬあづま女を、  
見せ奉らんもいたはしく、御心の中も推量に、おほろけならぬではよ  
も仰られ出さじ。さらば具し奉りて下らばやと思ひければ、あわれ  
人の御心としては、上下の分別は候はず。移れば變る習ひの候に、  
さらば入せおはしまして事の跡を御覽じて、試にも下らせればしま  
すべきにても候は、具足し参らせ給ひ候へかして、申しければ、

○かの源氏の大  
將、光源氏の物語  
源氏の巻を引たる  
阿なり  
○中門の廊、表門  
と車寄との間にあ  
る中門にて其左右  
に廊あるなり

判官よに嬉しげにて、いざらばとて、御柿の衣の上に、薄衣かづ  
き給ひて、御出ある。武藏も淨衣に衣かづきして、一條今手川の久  
我大臣殿の、ふる御所へぞればしましける。荒たる宿のくせなれば、  
軒のしのぶに露をきて、まがきの梅もにほひあり。かの源氏の大将  
の、荒たる宿を尋ねつゝ、露分入給ひける、古きよし見も今ころ思  
ひ知れける。判官をは中門の廊に隠し奉りて、辨慶は御妻戸の際に  
参り、人や御渡り候ふと問ければ、いづくよりとこたふ。堀川の方  
よりと申しければ、御妻戸をあけて見給へば、辨慶にてぞありける。  
日比は人づてにこそ、聞給ひしに、あまりの御嬉しさに、北の方簾  
の際に寄り給ひて、人はいづくにぞと問へ給へば。堀川に渡らせ給  
ひ候が、明日は陸奥へ御下り候ふと申せど、仰の候つるは、日ごる  
の御約束には、いかなる有様にてころ、具足し参らせ候はんと、申  
しては候へども、路々も差塞がれて候なれば、人をさへ具足し参ら  
せて、憂き目を見せ候はん事、痛はしく思ひ参らせ候へば、義經御

○具足、身に取り  
添る儀にて同行す  
る事になれり今の  
阿に携帶するは云  
に同じ



○た、ならぬ、儀  
庭の事をいふ中古  
に多し何なり

さきに下り候て、若しなからへて候はし、來年春の比は、必らず御  
迎に人を參らせ候べし、それまでは御心永く待せおはしまし候へど、  
申せどこそ仰られ候つれど、申しければ、此度だにも具して下り給  
はぬ人の、何の故にか態と迎ひには給はるべき、あはれ下りつき給  
はさらんさきに、老少不定の習ひなれば兎も角もなりたらば、とて  
も遁れさりけるもの故に、なぞ具して下らざりけんと後悔し給候と  
も、御心ざしありしほどは四國西國の波の上までも、具足せられし  
ぞかし。さればいつしか變る心の怨しさを。大物浦とかやより、都  
へ歸されし具後は、思ひ絶たる言の葉を、又廻り來るとかく慰さめ  
給ひしかば、心弱くも打解けて、二度うき事のはに、かゝりぬるこ  
ろ悲しけれ。中につけていかにぞやと覺ゆれども、知られず知られ  
て、われいかにもなりなば、後世までも、けに残すは罪深き事と聞  
程に申候ぞ、過ぬる夏の頃より、心亂れて苦しく候しを、たゞなら  
ぬとかや人の申候しが、月日に添へてゆふべも苦しくなり増れば、

○六波羅、鎌倉の  
支廳にて下京にあ  
り

其隠れあるまじ。六波羅へも聞えて、兵衛の佐殿は、情なき人と聞  
けば、とりも下されざらん。北白河の靜は、歌をうたひ、舞もまへ  
ばころ、一の咎は通がれけれ。われくはそれにも似べからず。た  
ゞ今憂き名を流さん事こそ悲しけれ。何と云ひても人の心強きなれ  
ば力なしと打くとき、涙もせきあへず仰ければ、武藏坊も涙にひせ  
び給けり。燈火のあかりにて、常に住なれ給ひつる、御障子の引手  
を見ければ、御手跡と覺へて、

つらからば我も心の替れかしなぞうき人の戀しかるらん。とぞ  
遊ばされけるを、辨慶これを見て、いまだ御事をば思れ參らせさせ  
給はざりけると、あはれにて急ぎ判官にかくと申せば、判官さらば  
とておはして、御心みじかの御恨みかな。義經も御迎ひに參りて候  
へどて、つと入給ひければ、夢の心地して、問ふにつらさの御涙い  
とせせきあへ給はず、判官、扱ても義經が、今の姿を御覽せられは、  
日比の御心さしも、興さめてこそ、御思召れ給はめ、あらぬ姿にて

○さよにつらさ  
の、殿古今集に吹  
風もいよにつらさ  
の増るかを慰めか  
ぬる秋の山里とい  
ふ古歌を引し詞な  
り







○かいりき、戒力にて戒を待する暇との義なり

歩ませ奉り、義經山伏に似たるや、人は見に似たるぞと、仰せける。辨慶申けるは、君は鞍馬に渡らせ給しかば、山伏にもなれさせ候つれば、申に及ばず、北の方はいつ習はせおはしまさねとも、御姿少しも見に違はせおはしまし候はず。何事もかいりきと申す御事にて、渡せ候ひけりと、申す内にも哀を催す、涙のしきりにこぼれければ、も、さらぬ鉢にてぞありける。去程に二月二日、まだ夜深きに、今出川を出んとし給ふに、西の妻戸に人のをとしける。いかなるものならんと、御覽すれば、北の方の御めのもと、十郎權の頭兼房、白き直垂に、かちんの袴きて、白髪まじりのもとより引き亂し。頭巾うちき、年より候とも、是非とも御供申候はんとて参りたり。北の方、妻子を誰に預け置き、参るべきとの給へば、相傳の御主を妻子に思ひかへ、参らすべきかと申しもあへず、涙にむせひけり。六十三に成ける、またかし、よき丈な山伏にてありける。兼房泪を押へて申けるは、君は清和天皇の御末、北の方は久我殿の姫君ゆかし。

○物詣、神佛へ参る事

○よりの御車、用の車にて料と云に同じかるべし

たゞ假初に、花紅葉の御遊び、御物詣でなりとも、よりの御車などころめさるべきに、はるく東の路に、かちはぶしにて、出たち給ふ、御果報の程こそ、目も當られず悲し、涙を流しければ、残りの山伏をも、理りなり、誠に世には神も佛もましますぬかどて、各淨衣の袖をぞしぼりけり。御手に手を取組みて歩ませ奉れども、いつかならばせ給はねば、たゞ一所にぞおはしける。面白き事どもを語り出して御心を慰め奉りて、進め給ひけり。まだ夜ふかに今出川をば出させ給ひけれども、八つゝの鳥もしどろに鳴きて。寺々の鐘の聲はや打ならす程にあけられども、やうく栗田口まで出給ふ。武藏坊片岡に申しけるは、いかゞせん。いさや北の御方の御足早くなし奉るべし。片岡に申せと云ければ、御前に参りて申しける様、かやうに御渡り候は、見ち行べしとも存し候はず。君は御心静かに御下り候へ、我らは御さきに下りて、秀衡に御所造らせて、御迎ひに参り候はんと申して、御さきに立せ給ひければ、判官の仰には

○栗田口、京の出



○松坂、日の隈の邊と云ふ

○忍ぶ交りの忘草、忍草は軒に生る物忘れ草は萱草と云ふ古歌には住吉の岸に生る由により

いかに人の御名残惜く思ひ参らせ候へとも、これらに捨られては叶ふまじ。都の遠くならぬさきに、兼房御供して歸れど仰られて、捨て置きて進み給へば、さしも忍び給ひし御人の、御聲を立て、仰られるは、今より後は道遠しとも悲しむまじ。誰に預け置て、いづくへゆけども捨て給ふとて、聲を立て、悲しみ給へば、武藏又立歸り、是足し奉りける。粟田口を過ぎて。松坂近くなりければ、春の空の曙に霞にまがふ雁の、かすかに鳴きて通りけるを聞給ひて、判官かくぞつとけたまふ。

見てしろのやへのしら雲かきわけてうら山しくもかいるかりかね、北の方もかくぞつとけ給ふ

春をたに見すて、かへるかり金のなごのなさけにねをばなくらん。とてろく打過ぎければ、垣根に忍ぶまじりの念れ草打交り、荒れたる宿の事なれば、月の影のみ昔に變らじと、思ひ知られて哀なる、軒のしのぶをと給ひて、奉り給へば、北の方、都にて見し

よりも、しのぶ哀の打添ひて、いと哀れに思召して、かくぞつとけ給ふ。

すみなれし都を出てしのぶ草をくしらつゆはなみだなりけり。かくて大津の浦もちかくなる、春の日の長きに、終日あゆむくとし給へとも、關寺の入あひの鐘、けんと暮ぬと打ならし、怪しの民の宿借るほよになりぬれば、大津の浦にぞかゝり給ひけり。

大津次郎の事

爰に又うき事ぞ出来たる。天に口なし、人を以ていはせよと、たか抜驛するとしもなければ、判官山伏になりて、其勢十餘人にて、都を出給ふと聞えしかは、大津の領主山科の左衛門、圓城寺の法師を語らひて、城廓を構へて、相待つ、されども判官は、大津のなごさに、大なる家あり。是は鹽津、かいづ、山だ、やはせ、あはづ、松もどに聞えたるあき人の、ひねどの者、大津を申す者の家なり、辨慶宿を借らせけるは、羽黒山伏の熊野に年籠りして下向し候、宿

○大津、近江にて天智天皇の舊都  
○關寺、逢坂の關の邊にあり

○ひねどの者、主頼めく人  
○年籠り、年末に家を出て他に止宿



すれは老いすて  
中古に流行せし事  
なり  
○宿傳ふ習、僧に  
は宿々にて明々に  
宿を借す風習との  
事なり

をたひ候へど、からせたりければ、宿傳ふ習ふれば、左右なく宿を  
参らせたり。さ夜うちふけて、せんぼう阿彌陀經を、同音にぞよみ  
給ひける。是ぞ勤めの始めなる。大津次郎は、左衛門の召にて城に  
あり。大津の次郎が女、物こしに見奉りて、あらいつくしの山伏見  
や、遠國の道者とはの給へども、衣裳のいつくしさよ。いかにもた  
し人にはあらず、但し判官殿、山伏になりて下り給ふなるに、山伏  
大勢とよめて、城に聞わては身の爲も大事なり。次郎を呼びて、此  
事を知らせて、判官殿にてましますば、城まで申さずとも、私しに  
も討ちても擲めても、鎌倉殿の見参に入て、勳功に與りたらば、然  
るべきと思ひければ、城へ使を遣して、男を呼び寄せて、一間なる  
所へ招きて云けるは、時しもこそ多けれと呼しも、われく判官殿  
に、宿を貸し参らせて候は、いかとせんする、御邊の親類、我兄弟  
を集めて、擲めばやと予申しける。男申しけるは、壁に耳、石に口  
と云事あり。判官殿にておはすればとて、なにか苦しかるべき、擲

○壁に耳石に口  
事、の流れ安き壁  
への路

○ちたい、地体  
にて元來と云か如き  
所に云ふ城内の方  
言なり

め参らせられたばとて、勳功もあるまじ。誠の山伏に渡らせ給ふに付  
ては、金剛童子の恐れもあり。又判官殿にてはしませばとて、悉  
しけなくも鎌倉殿の御弟にてましますば恐れあり。我思か、り奉り  
ても、頼かるべき事ならず。かしがましくと予いひける。女これ  
を聞て、ちたいは男は、めこに甲斐くしく當るばかりを、本とす  
るおとこなり。女の申す事は、上つかたの御耳に入ぬ事やある。城  
へ出でさらば参りて申さんとて、小袖取て打かけ、やがて走り出  
行きける。大津次郎是を見て、彼奴を放し立て、はあしかりなんと  
や思ひけん。門の外に追ひつきて、ようれ今にはじめたる事か、風  
になびくかるかや、男に従ふ女とて、引き伏せて心のゆくく、予、  
さやなみける。かの女は極めたる為せ者なりければ、大路に倒れて  
おめきけるは、大津次郎は極めたる、ひが事の奴にて候予。判官の  
方人する予と予申しける。所の者これを開きて申しけるは、大津次  
郎の女ころ、例の醉狂ひして、男に打るゝとておめくは、又多くの

○おせ物、眞なり  
の物にて勝りたる  
阿



○放ち合せて、剛  
勢せず打拵きて  
さの筋なり

法師の歎きともならんや、唯放し合せて、打せよとて、とりさゆる者なければ、あすく打たれて、臥しにけり。大津次郎は直垂とりて着て、御上へに参りて、火打消して申しけるは、かゝる口惜しき事こそ御坐候はね。女めが物に狂ひ候。是聞こし召され候へ。何にも御渡り候へ。今夜はこれにてあかさせ給ひて、明日の御難をば、何にとして遁れさせ給候べき。是に山科左衛門と申す人、城廓を構へて、判官殿を待ち申候。急ぎ御出候へ。これに小舟を一艘持ちて候に召されて、客僧達の御中に、舟に心得させ給ひて候は、急ぎ御出候へと申ける。辨慶申けるは、身に誤りたる事は候はねども、左様に所にわづらひ候はんずるには、とりをかれ候ては、日數も延び候はんず。さ候は、暇を申とて出給ひければ、舟をば海津の浦にめし捨て、とく荒乳の山を越て越前の國へ入せ給へと申ける。判官出させ給へば、大津次郎も船津に参り、御船をこしらへて参らせける。かくて大津次郎、山科左衛門の許に走り歸りて申しけるは、

○荒乳の山、近江  
と越前の境にある  
深山なり

○別の事、別して  
信を尋なくはその  
意

海津の浦に弟にて候もの、ちうようにあひて、疵を蒙りて候と、承り候間、暇申して、別の事候はずば、頼てこそ参り候はんと申しければ、それ程の大事は、とくくぞ申しける。大津の次郎家に歸りて、太刀とつて脇に挟みて、矢かきたひ、弓を押張り御舟にをどり入て、御供申し候はんと、大津の浦をおし出す、勢多のうは風はげしくて、舟に帆をあげざりける。大津次郎申しけるは、こなたはあはづ大わらのたて給ふ、石のとうさん、こゝに見え候は、唐崎の松、あれは比叡山と申す山王の御寶殿を願りみ給ひば、其ゆくさきは竹生島と申して、拜ませ奉る。風に任せてゆく程に、夜半ばかりに、西近江いづくともしらぬうらを過ゆく程に、磯浪の聞ければ、こゝはいづくぞと問ひ給へば、近江の國かたゝの浦とぞ申しける。北の方これを聞召して、かくぞつゝけ給ひける。  
しきかあすいさはのみつのもりぬてかたゝもなみのうつぞやさしき白ひげの明神をよろにて拜み奉り、みかはのにうとうじやく



○うつらなく云々、後醍醐の既なり

○つきの香、下腹の香との説

せうが

うづらなくまのゝ入えのうら風におはるなみよる秋の夕ぐれ。と云ひけんふるき心も、今ころ思ひ知られけれ。いまづの浦をこぎ過ぎて、海津のうらにつきにける。十餘人の人々をあけ奉りて、大津次郎は御暇申すなり。こゝにふしぎなる事あり。南より北へ吹きつる風の、今又北より南へ吹きける。判官仰られけるは、彼奴は同じつぎのものながらも、情あるものかな。知らせばやと思食武藏坊を召して知せて下らば後聞てあはれと思ふべし、知せばやとの給へば、辨慶大津次郎を招きて、わざしなればしらするぞ。君にて渡らせ給ふなり。道にてともかくもならせ給はゞ、子孫の守ともせよとて、たひの中より朋黄の腹巻に小覆輪の太刀を取り添へてぞ、たびにける。大津次郎是を給て、いつまでも御供申したく候へ共、中々君の御爲あしく候はんづれば、暇申していづくにも君の渡らせおはしまさん所を承りて、参りて見参らせ候はんとて歸りけり。下郎な

○やせく、此阿伊勢三郎の條にもありや呼ばせは御前にて妻をよぶなり

○男いふとも、夫は義經を告げせんは云とも女は情ある者なれば止るこゝろ普通なれとの説なり

れども情ありて予覺えける。大津次郎は、家に歸りて見ければ、女はをどゝいの腹をすへかねて、いまだ臥してぞ居たりける。やこせくといひけれども、音をもせず。哀れわ女はせんなき事を思ふなり。山伏とよめて判官殿を號して、既に憂目を見んとせしよな。舟に乗せて海津の浦まで送り、船賃など責めければ、法もなく物をいひつる間にくさに、かなぐりとりたる物を見よとて、太刀と腹巻とを取出して、かばと置きければ、寝亂れ髪の際より、恐ろしげなる眼しばたき、流石に今は心ち取り直したる氣色にて、それも妾が徳にてこそあれとて、大あみにあみたるつらを見れば、あまりにうとましく予ありける。男いふとも、女のみにては、いかゞなど制しころすべきに、思ひ立ぬるこそ、恐ろしけれ。

荒乳山の事

判官、海津の浦を立給ひて、近江の國と越前の堺なる、荒乳の山へぞかゝり給ふ。をどゝひ都を出給ふて、大津の浦につき、きのおは



○舟心、船に酔るなり

○柿の衣にちうれ、柿の衣は清浄にすへき山伏の法服なれば女を異人事を恐れ懼りなり

○血を流す間あちの山、新血の意

御舟にめされ、舟心にそむし給て、あゆみ給ふべきやうなまき。荒乳の山と申すは、人跡たえて、古木たてかれ、巖石がよとして、路すなほならぬ山なれば、岩角をそばだて、木の根は枕を並べたり。いつふみ習はせ給ねば、左右の御足より流るゝ血は、紅を注ぐが如くにて、あちの山の岩角染ぬ所ぞなかりける。少々の事こそ、柿のころもにもたろれけれ。見奉る山伏ども、あまりの御痛はしさに、時々かはりくゞ、負ひ奉りける。かくて山深く分け入給ふ程に。日も既に暮れにけり。路の邊り二町計り分け入て、大木の許に敷皮をしき、炭をそばだて、北の方を休め奉る。北の方恐ろしの山や、是をは何山といふやらんと、ひ給へば、判官、是はひかしはあらしの山と申しけるが、當時はあちの山と申すと、仰ければ、面白や、昔はあらしの山といひけるを、何とてあちの山と名けんととの給へば、この山は、あまり巖石にて候程に、東より都に上り、京より東に下る者の、足を踏み損して、血を流す間、あちの山と

味を取れる時

○志賀の都、前に云る如く天智天皇大和國より志賀に都を遷し給ひしなり故に天智の宮と申近江大津の宮と申す  
○せんじやう、山上なり辨慶は信なる故に吳音を云るなり

は、申しけるなりと、の給へば、武藏坊是を聞て、是程の跡形なき事を仰候御事は候いす。人の足よりちを踏み垂らせはとて、あちの山と申候はんには、日本國のがんせきならん山の、あちの山ならぬことは、候はじ、このやまのしさいは、辨慶こそよく知りて候へど、申ければ、判官きゝ給ひて、それ程しりたらん、しらぬ義經にいせんよりも、なぞとくよりは申さぬぞと、仰ければ、辨慶申し候はんずる所を、君のさへぎりて、仰せ候へば、いかでか辨慶申すべき。此山をあちの山と申す事は、加賀の國にも、白山と申すに、女鉢ころの、りうくうの宮とて、おはしましけるが、志賀の都にして、唐輪の明神に、見染められ参らせ給ひて、年月を送り給ひける程に、懐妊既に、其月近くなり給ひしかば、同じくは我國にて、誕生あるべしとて、加賀の國へ下り給ひける程に、此山のせんぢやうにて、俄かに御腹の氣つき給ひけるを、明神御産近づきたるこそとて、御腰を抱き参らせ給たりければ、則ち御産なりてげり。其時



産の荒血をこほさせ給ひけるによりて、あらしの山とは申し候へ。さてこそあらしの山、あらしの山の、いはれしられ候へと申しければ、判官、義経もかくこそ知たりとて、笑給ひけり。

三の口の關とほり給ふ事

○三口關、上古此所に關を置かれ愛發の關といふ三關の一なり今關を此に設しは其要害なるによるか又は古關残りし物か

夜もすでにあければ、荒乳の山を出で、越前の國へいり給ふ、荒乳の山の北のこしに、若狭へかよふ道あり、のうみ山に行くみちもあり。そこを三の口とぞ申しける。越前の國の住人、敦賀の兵衛加賀の國の住人井上左衛門、兩人承て荒乳の山の關屋をこしらへて、夜三百人、ひる三百人の關もりをすゑて、關屋の前に亂杭を打て、色も白く向齒のろりなせしたる者をは、道をもすぐにやらす、判官殿とて搦めをきて、糺問してぞひしめきける、みち行人の判官殿を見たてまつりて、此山伏たちも、此難をば、よも遁れ給はじとぞ申ける、きくに付けても、いとと行くさきものうく、思食ける所に、越前のかたより、あさぎ直垂きたる男の、立文持ていそがはしげに

白紙にて包めて包紙の上下を其狀より餘る分を筋道に左へ折り又右へ折りにて扱基の方へ折り宛所封等を書き書式様あり

○着到を着る、出陣の前に諸方より來集る軍勢の名を帳に書留るを云なり軍勢の着到着到したる人々の名を書き故に着到といふ着到の前候を願申したる事なり

て予、行あひける。判官是を見給ひて、なにとも彼奴はしさいありて、通るやつにてあるぞとの給ける、笠のはにて顔かくして通さんとし給ふ所に、十餘人の中を分入て、判官の御前にひさまづきて、かゝることこそ候はね、君はいづくへとて、御下り候ぞと申しければ、片岡申しけるは、君とはた予、此中に、汝に君と、かしづかるべきものこそ覺ねと云ければ、武藏坊これ聞いて、京の君の事とか宜旨の君の事かといひければ、かの男、なにしにかくは仰候予、君をば見知り参らせて候間、かくは申候予。是は越後の國の住人、上田左衛門と申す人の、内に候しが、平家追討の時、檀浦の合戦の時、越前と能登加賀三が國の人数、着到つけ給ひし、武藏坊と見奉るは、ひが事かと申せば、いかに口きゝたる辨慶も、力なくて伏し目になりけり。せんなき御事かな。此道の末には、君を待参らせ候もの、たゞこれより御歸り候へかし。此山の峠より、東へ向ふてのうみ越にかゝりて、ひうちが城へ出て、越前の國こうにかゝりて、



平泉寺を拜み給て、熊坂へ出て、すかうの宮をよそに見て、かなづのうは野へ出て、しのはら安宅のわたりをやすせ給ひて、根上りの松をながめて、白山の権現をよそにて禮し給ひ、加賀の國、宮のこしに出て。大のゝわたりし給ひて、あをかさきのはしをこねて、たけのくりから山をへて、くろさかやちのふもとを、こいしやうにかゝりて、六色うじのわたりして、なごのはやしをなかめて、いはせのわたり、四十八かせをこえ。みやさきのこほりを、いちふりにかゝりて、かんばらながいしかと申す、難所をへて、のらみの山をよそにかし拜み給て、越後の國、々府につきて、直江の津より舟に召して、よな山をおきがけに、卅三里のかりやはま、かづきしらさきをこき過きて、寺をどまりに舟をつけ、くりみやいしを拜みて、十九里の濱にかゝりて、のつたりかんばら、八十里のはま、せなみあらかは、いはふねといふ所につきて、すどうと見ちは、ゆきしろみつに、山河まさりてかなふまじ。いはひがさきにかゝりて、おち

○小町、小野小町にて延喜の頃の人なり郡司の女と云る事確ならず  
○兼平の中將あづまへ下り、伊勢物語に本文なるは松の松の歌あれども墓の松の事は附會の説なり

ひつかさるねんじゆのせき、大いつ三のしやう、大ほんじを、とをらせ給ひて、羽黒の権現をふし拜み參らせ、清河と云所につきて、すきのをか舟に、さほさして、あいかはの津につかせ給て、みちは又こつ候、もがみのこほりにかゝりて、いなせきをこねて、宮城のはら、つゝじのをか、ちかのしほがま、松しまと申す名所く見給ては、三日横道にて候、かなよりの地蔵堂、かめわり山を越ては、ひかし出羽の郡司が娘小町と申す者の住たる、玉造ひろのさと、申す所。また小町か關寺に候ひける時、兼平の中將あづまへ下り給ひけるに、妹のあねはがもとへ、文かきてこづてしに、中將下り給ひて、あねはを尋ね給へば、むなしくなりて、年久しく成ぬと申せば、あねはがしるしはなきかと、仰られければ、ある人墓にうへたる松をこそ、あねはの松とは申し候へど、申しければ、中將あねはが墓に行きて、松の下に文を埋めて、よみ給ひけるうた、  
くり原やあねはの松の人ならばみやこのつとにいさといはまし







○關屋の大將軍、  
惣て長たる人を大  
將など云はる關屋  
の軍務と聞はたり

○御むろ殿、上古  
神と書上所を御室  
といふ古哥に御室  
にゆふ取して誰  
か代にか神のみむ  
ろを祝ひうめけん  
ともよめり愛も古  
言の遣れるなり

を見せ給ふ。これこそ判官の正身よと、おめきければ、身の毛もよだつばかりなり。判官進み出て仰られけるは、抑も羽黒山伏の何事をして候へば、是れ程に騒動せられ候やらんとの給へば、何條羽黒山伏九郎判官殿にてこそ、おはしませと申しければ、此關屋の大將軍は、誰殿と申すやと、いひ給へば、當國の住人教賀の兵衛、加賀の國の井上左衛門と申す人にて候へ、兵衛はけさ下り候ひぬ、井上は金津におはすると申しければ、主もおはせざらん所にて、羽黒山伏に手かけて、主に禰かくる、其儀ならば此笈の中に、羽黒の權現の御正躰觀音のおはしますに、此關屋を、御むろ殿と定めて、八重のしめを引きて、御禰をふれと仰られける。關守をも申しけるは、げに判官にておはしますは、其儀こそ仰らるへく候ふに、主に禰をかくべからんやうは、いかにぞと咎めける。辨慶これを聞きてかたのこごとく先達候はんする上は、山法師原が申す事を御咎め候てはせんまし、やあ大和坊、そこのき候へと申ける。いはれて關屋

○關手の手、假字  
にて代ふ能なり古  
語に郭公のうつて  
をばたる云へる  
は赤代を催促する  
との事なれば安の  
手も齊てと同じく  
關を通す人より關  
守に饒若しくは其  
他の物を贈るを關  
手と云ふ詞のあり  
しなり

の様にお給へる、是こそ判官にておはしませしけれ。辨慶申けるは、是は羽黒山の贖岐坊と申す、山伏にて候か、熊野に参りて、年籠りして、下向申候。九郎判官殿とかやをば、美濃の國とやらん、尾張の國とやらんより、生捕りて都へ上るとやらん、承候ひしが、羽黒山伏が判官といはるべきやうこそなけれ、と云ひけれども、何と陳じ給へども、弓矢をば、太刀長刀の、さやをばづして予、わたりにける。あどの人々も七人つれて予來りける。いと、關守共、されはこそとて、大勢の中に取籠めて、たゞ打殺せとおめきければ、北の方消え入る心ちし給ひけり。ある關守申しけるは、暫く靜まり給ひ。判官ならぬ山伏殺して、後の大事なり。關手を乞てみよ。首より今に至るまで、羽黒山伏の渡實、關手なす事はなきや、判官ならば子細を知らずして、關手をなして、とをらんといろくべし、現の山伏ならば、よも關手をはなさじと、これをもつてしるべきとて、さかくしげなる男進み出て申けるは、所せん山伏なりとて、五



○道せん、道鏡にて道にて休息する所へ興る錢との積なり

人三人こそあらめ、十六七人の人々に、いかで關手をとらではあるべき、せき手なしてとをり給へ。鎌倉殿の御教書にも、高下をつけきらはす、せき手を取て關守共の、兵糧米にせよと候間、關手を給候はんとぞ申しける。辨慶いひけるは、事新しき事を承候ものかな、いつの習ひに、羽黒山伏の、關手なす法ある。例なき事は叶ふまじきといひければ、關守共是を聞きて、判官にてはおはせぬと云ふもあり。或ひは判官なれども、世にこえたる人にておはしませば、武藏坊などいふものころ、かやうに陳すらめなす申し。又或者出て申けるは、さ候は、關東へ人を參らせて、左右を承り候はんほど、是に留め置き候はんぞ申ければ、辨慶これは金剛童子の御計ひにてころ、關東の御使ひ、上下の程、關屋の兵糧米にて、道せんくはて、御祈禱申して、心安く暫く休みて下るへしとて、ちつとも騒がず、十挺の笈をば、關屋の内にとり入れて、十餘人の人々、むらくと内に入て、つくとしてぞわたる。猶も關守怪しく思ひけり。辨慶關

○糶料、糶をさきと云るは先づ時に非ずして喰ふ糶と非ずといふ其に對して定時(一日に二度なりし也)に喰ふを時といふ俗の一種の詞なり候はし候は、食するが故に後には俗の食をはずすと時といひ亦糶の字をさきと訓む事ともなりしなり故に糶料とは食料との事なり

守にむかつて、問はず語りをすしむたる、此少人は出羽の國の、坂田の次郎殿と申す人の君達、羽黒山にて金王殿と申す少人なり。熊野にて年籠りして、都にて日數をへて、北陸道の雪きえて、やまがくにつたひて、粟の糶料など尋てさいしきなどなりとも、取りて下るべく候つるに、餘りに此少人故郷の事をのみ仰られ候間、いまだ雪も消候はねども、この道に思ひ申候て、いかとせんと歎き候ひつるに、是にて暫く日數を経候はん事こそ、嬉しく候へど、物語なぞして、草鞋をぬぎて、洗足し、思ひくゝに寝ぬ起きぬなど、したり顔に振舞ければ、關守共、是は判官殿にておはせぬ氣なり。たゞ通せやとて、關の戸を開きたれども、急がぬ體にて、一度には出ずして、一人づゝ二人づゝ、しづかに立やすらひくぞ出給ふ。常陸坊は、人よりさきに出たりけるか、跡をかへりみければ、判官と武藏坊と、いまだ關の様にそむ給へり。辨慶申しけるは、關手御免候お上は、判官にてはなしといふ、仰かうふり候ぬ、かたぐもつて



○長押、後世の無目敷居の類大いらかかはあつたかの轉らあつたかかは數珠の梵名なり

喜び入て候へども、此二三日、少人に物參らせ候はず候へば、苦し  
く候。關屋の兵糧米、すこし給ひ候て、少人に參らせて、通り候ば  
や。且つ御祈禱、かつうは御情にてこそ候へと云ひければ、關守共、  
物も覚えぬ山伏かな、判官かぞ申せは、口ではに返事し給ふ、又齊  
料乞い給ふ事は、いかゞと申しければ、長敷物まことは御祈禱にて  
ころあれ。それ參らせよと云ひければ、唐櫃の蓋に、白米一ふた入  
れて參らせける。辨慶是を取て、大和坊、是をとれといひければ、  
傍はらよりさし出て、受取り給ひけり。辨慶長押の上についで、  
腰なる吹螺貝取出し、おびたゞしく吹ならし、首にかけたる、大い  
らたかの珠數とつて押揉みて、尊げにぞ祈りける。日本第一金剛彦  
子かつらきは十萬のまん山のこほうしん、ならば七堂の大伽藍、は  
せは十一面觀音、稻荷祇園加茂春日大明神、比叡山王七社の宮、願  
くは判官此道にかけ參らせて、荒乳の關守の手にかけて、留めさせ  
奉り。名を後世に上げて、勳功たいくわいならば、羽黒山の霞岐坊

○送りこよ迎へこよ、修行的助によりて佛の行者を送り迎ふる事の義なるべし

○越前の關府、越前一國の政府なり

が、驗徳の程を見せ給へと祈りける。關守ども是を聽聞し。さも願  
もしげこそ思ひける。心中には、八幡大菩薩、願はくは、送りこよう、  
迎ひこようとなりて、奥州まで、左右なく届け奉り給へと祈りける、  
心の中こそ哀なる祈りとは覺ゆれ、夢みちゆく心ちして、あらかの  
關をも通り給ふ。その日はつるがの津に下りて、せいたい菩薩の前  
にて、一夜御通夜有りて、出羽へ下る舟を尋ね給へども、未だ二月  
の初めのことなれば、風はげしくして、行通舟もなかりけり。力  
をよばす夜をあかして、木邊といふ山を越て、日數もあれば越前の  
國の關府に予つき給ふ。それにて三日御とうりありけり。

平泉寺御見物の事

よこ道なれども、いさや當國に聞えたる、平泉寺を拜んと仰ける。  
各心得ず思ひけれども、仰なればさらばとて、平泉寺へぞかゝられ  
ける。その日は雨ふり風ふきて、世間もいとものうく、夢にぞと  
る心ちして、平泉寺の觀音堂にぞつき給ふ。大衆ども是を聞て長吏



○政所、寺中の政事を總理する所なり但し寺に限らず惣て事務を料理する所の通稱なり

の許にぞ告げたりける。政所の勢を催して、寺中と一同になりて、詮議しけるは、當時關東の山伏禁制にて候に、此山伏はたゞ人ども見えす。判官は大津さかもと、荒乳の山も通られて候なり。寄せて見ばや、いかさまにも是は判官にておはすると覺え候と詮議す。尤とて大衆出たつ。かの平泉寺と申すは、山門の末寺なり。されば衆徒の規則も、山上にととらす。大衆二百人。政所の勢をひかふとて、夜半ばかりに、觀音堂にぞおしかけたる。十餘人は東の廊下にぞゐたりける。判官と北の方は、西の廊下におはしたる。辨慶参りて今はこそと覺え候。是は餘の所には似べくも候はず。いかゞ御計ひ候ふ。さりながら、かなはざるまでは、辨慶陳じて見候はん間、かなましましげに候はゞ、太刀をぬき、にくいやつばらなど申して、とんであり候はゞ、きみは御自害候へとぞ申して出ける。大衆に問答の間、にくいやつばらといふてあると、耳をたてとそ聞き給ふ。心ぼそくぞありける。衆徒と申しけるは、抑も是はとて山伏にて候

○打まかせては、惣てはと云に同じ

ず、うちまかせては、ととまらぬ所にて候、いと申しければ、辨慶申しけるは、出羽の國羽黒の山伏にて候。羽黒には誰と申す人ぞ。大黒堂の別當に、霞岐の阿闍梨と申すものにて候とこたへけり。少人とは誰と申し候ぞ。坂田の次郎殿と申す人の御子息、金王殿とて、羽黒山には、かくれなき少人に候ぞ、といひければ、衆徒これ聞きて、此ものともは、判官にてはなき者ぞ、判官にておはしまさんには、いかでか是程に、羽黒の家内をばしり給ふべき。金王と申すは、羽黒に名譽の兒にて候なるぞ。長史事を聞きて、坐敷にゐなをりて、武藏坊を呼ひて、先達の房に申すべき事候といへば、辨慶も長史に膝をくみかけてぞゐたりける。長史申されけるは、少人の事承り候こそ、心も詞もおよばすおはしまし候なれ。學問の性は、いかやうにかはしまし候ぞといひければ、學問にたいは、羽黒山には、並びもおはしまし候はず。申すにつけては、過言にては候へとも。容顏にたいは、三井寺にもおはしまし候べき。と譽たりけり。學問



○ませもの、くせ者云ふか如き意に用ひたり所によりぬる者云へる事もあるなり

のみにも候はず、やう笛をいいては、日本一とも申すべしと云ひければ、長吏の弟子に、泉美作と申しける法師は、きはめて按ふかき、寺中一のあせものなり。長吏に申けるは、女ならばこそ、琵琶ひく事は、常の事にて候。これは女ぞと疑ふ所に、笛の上手と申こそ怪しく候へ。げにちとか笛を吹せて、見候はんと申す。長吏けにもとて、あはれさ候は、おとに聞えさせ給ふ。御笛をうけたまはり候て、世の末の物語にも傳へ候は、やと申されける。辨慶これ聞きて、やすきことやと返辭はしたれども、兩眼まつくらになるやうにぞ、おぼえける。さてしも有るべきことならねば、其やうを少人に申し候はんとて、西の廓下に参りて、かゝる事こそ候はね。ありもあらぬことを申して候ほどに、御笛遊されさせ参らせて、うけたま

わるべきよし申し候。いかゞつかまつるべく候と申しければ、さりさては、吹かすとも、出て給ひと仰られければ、あらこゝろやとて、衣引を被つきふし給ふ。衆徒もしきりに、少人の御出おそく候

○ねんいちかたわは死の名なりねんいちかたわは朝院意の思なりんか  
○花きて、衣袋を著るる云中古の書に多き詞なり

と申せば、辨慶たゞいまくと答へておたりけり。泉と申す法師いひけるは、さすがに吾朝には、熊野羽黒とて、大所にて候やかし。これに左右なく名譽のちを、平泉寺にて呼び出して、さんぐに嘲駢したりけると聞えん事、此寺の恥にあらずや。少人を出し奉りもてなすやうにて、そのついでにかかせたらんむ、苦るしからじと申しければ、尤も然るべしとて、長吏のもとに、ねんいち、みたわ、とて、名譽のちとあり。花折て出たせ、若大衆の肩首に乗りて参りける。正面坐敷長吏、東は政所、西は山伏、本尊をうしろにし奉つて、佛壇の際に南へひけて、少人の坐敷をぞしたりける。二人のちを坐敷になをりければ、辨慶奔りて、御出候へと申しければ、北の方、たゞやみにまよひたる心地して、出立給ふ。きのふの雨にしほれたる羅文紗の直垂に、下には白き色の衣をめしたりければ、猶も美しく見え給ひける。御髪尋常に結いまして、赤木の柄の刀に、だみたる扇さしうへて、御手に横笛持て御出あり。御供には、



○自然の事、自然  
其事の發せんとし  
はとの法なり

○大和坊、流經の  
變名なり

十郎權の頭、片岡伊勢の三郎、判官殿は殊に近く予おはしける。自然の事あらば、人々にはかくまじきものをと予思食ける。正面に出  
て給へば、殊に其の時は火を高くかゝげたり。北の方、扇取なをし、  
衣文かきつくるひ、坐敷になをり給ふ。今まではかたゝなはしき所  
もおはします。武藏坊心安く思ひけり。何ともあれ、しろんずる  
ほどならば、差違へて、いかにもならめと思ひければ、長吏に膝を  
きしりて予おたりける。辨慶申しけるは、詞候はぬ事、笛にかいて  
は日本一ぞかし。但し、さい一つ候ふ。少人羽黒におはしました候時  
も、あけくれ笛にのみ心をいれて、學問の御事も空々に御わたり候  
ひし程に、この八月に羽黒を出し時、師の御坊、今度道中、上下  
向の間笛をおかじと云ふ。誓言をなし給へとて、權現の御前にて、  
鐘をうたせ奉りて候へば、少人の笛をば、御免候へかし。是れに  
大和房と申す山伏の候が、笛の上手にて候、常に少人も、これにて  
る御習ひ候へ、代官に是を参らせ候は、やと申ければ、長吏是を聞

○代官、前にて云  
る如く代理の法

○管絃の具足とある  
具足はすべて物  
置頓したるを云ふ  
受なるは道具を取  
揃へたるなり

○ひとされ、今の  
詞にひと切りと云  
に均しく一曲の事

て、感じ申しける。あはれ人の親の子をおもふみちあり。師匠の弟  
子をお心ざしこれなり。いかでか御痛はしく、うれほどの御慈悲  
をば、是にて破り参らせ候べき。とくく御代官にても候へと申し  
ければ、武藏坊あまりうれしさに、こしをおさへ、そらへひかひて、  
溜思ついで予おたりける。さうく参りて、大和坊御代官に笛を仕  
れといはれて、判官佛壇のかげの。ほのくらし所より出給ひて、少  
人の末座にそゐ給ひける。大衆さらば管絃の具足参らせよと申けれ  
ば、長吏のもとより、くさきのこのの琴一ちやう、錦の袋に入たる  
琵琶一面取よせ、琴をば御客人にとて、北の方に参らせける。琵琶  
をばねんいちどの、前にをき、笙の笛はみたわたの、前にをき、笛は  
判官の御前にをき、かくて管絃ひとざれありければ、おもしるしと  
予云もをろかなり。唯今まではかせんのみちにて有るべかりつるに、  
いかなる佛神の御納受にてや、ふしぎにそ覺えし。衆徒も是を見て、  
あはれ笛のねや、ねんいちみたり殿をこそ、よきちと有かたく思



ひつるに、今此兒稚と見くらぶれば、同じ口にも云ふべくもなしな  
 せ、若大衆共口々にぞさゝやきける。長吏寺中にかへり小夜ふけ  
 て、長吏のものとより、機々に菓子つみなとして、瓶子そへて観音堂に  
 おくりけり。皆人々つかれのすみければ、いさや酒のまんどてとり  
 く申しけるを、武藏坊あはれせんなき殿原かな、ほしさのまゝ  
 に、たれも呑んずるほどに、程なく酒氣には、本性をたゞすものな  
 れば、しばらく少人に参らせよ。先達の御坊、京の君など云ふと  
 も、後はあぢきなき娑婆世界のならひ。北の方に今一つ申せ。龜井  
 片岡思ひさしせん、伊勢の三郎もちてこよ、いで飲まん、辨慶など  
 いはんほどに、やけのゝきゝす、頭をかくして、尾をいたしたる  
 様成るべし。酒は上下向の間、斷酒にて候とて、長吏のものとへ返  
 しける。希有なる山伏たちにて有りけるよとて、いそぎうせんし  
 て、御堂へ送りけり。各そうせんしたゝめて。夜をあけぼのにおけ  
 れば、今宵のせんほうをぞ讀みける。伊勢の三郎を使ひにて、長吏

○やけのゝきゝす、焼たる野に居る雉子なり

○ううせん、附勝にて舞食をいふせん、獨りてよむべし

○唐櫃、唐櫃の略語にして古くは旅行に持せしなり

○笠のは、端なり山のほど云ふに同じ

に暇を予てはれける。心ある大衆たち、徒歩にて、むら／＼きえ残る  
 雪を踏分けて、二三町を送りける。恐ろしく思はれし、平泉寺を  
 も鶴の口のがれたる心地して、足早に通られける。かくてすこらの  
 宮を拜みて、かな津のうはなにつき給ふ。唐櫃あまたかゝせて、ひ  
 き馬其數あり。ゆゝしげなる大名五十騎ばかりにああたり。これは  
 いかなる人ぞといひければ、加賀の國井上左衛門と申す人なり。荒  
 乳山の關へ行すと申しける。判官これをきゝ給ひ、あはれ遁れんと  
 すれども、のかれぬものかな。いまはかくすとの給ひて、刀の柄に手  
 を打かけ給ひて、北の方の背に背をさしあはせて、笠のはにて顔を  
 かくして、とどさんとし給ふ所に、をりふし風はげしくふきたりけ  
 り。笠のはをふきあけたりければ、井上一目見参らせて、判官と御  
 目を見合せ奉り、馬より飛であり、大道に畏まつて申けるは、かゝ  
 る事こそ候はね。途中にて参りあひ参らせ候こそ、無念に存じ候へ。  
 候ふ所は井上と申して、程遠き所にて候間、あなたいとも申さず候



○國の騒動云々、  
後經兄の不興を受  
ずして鎌倉殿の連  
枝の資格を以て通  
行せんに、御願入  
馬等の如き一國の  
大關係あるへしと  
なり

ふ。山伏の式だいはおそれにて候ふ。とくく申して、我身馬ひ  
きよせて、左右なくものらす、はるかに送り奉り。御後とを、さか  
るほどもなりぬれば、各馬にぞのりたりける。判官はあまりの事  
に、行きやらでしきりに見返し給ひつゝ、七代まで、弓箭冥加あれど  
ぞ、面々に申しけるぞあはれなる。その日はほそつきといふ所に井  
上つきて、家の郎黨どもをよびて申しけるは、けふ行あひ参らする  
山伏をば、誰をか見奉る。是は鎌倉殿の御弟、判官殿よ、あはれ日  
比のやうにおはさんには、國の騒動、道路の大事とこそ成るべきに、  
此御有さまになり給へる御事の、いとをしさよ。討奉りたらば、千  
年万年すくべきか、あまりのいたはしさに、なんなく通し奉りてころ、  
と云ひければ、家の子郎黨共これを見て、井上の心中、あはれ情も慈  
悲も深かりける人やと、頼もしく予覺えける。判官その日篠原にと  
まり給ひけり。あければ齋藤別當實盛が、手塚の太郎光盛にうた  
れける。あいのいけを見て、安宅のわたりをこえて、ねあがりの松

○白山、加賀にあ  
り

○富樫の介、加賀  
介にて富樫に居住  
する故に富樫介と  
云ふ武家八介の一  
なり

につき給ふ。是れは白山の權現に法施をたひくる所るや。いさや白  
山をかまんとて、岩本の十一面觀音に御通夜あり。あくれば白山に  
参りて、によたいこの宮を拜み奉らせて、其日は劍の權現に参り  
給て、御通夜ありて、夜もすがら御神樂参らせて、あくればみやし  
の六郎光あきらが、せとをとり給て、加賀國富樫といふ所も近く  
なり。富樫の介と申すは、當國の大名なり。鎌倉殿より仰はかうふ  
らねども、内々用心して、判官殿を待ち奉るとぞ聞えける。武藏坊  
申しけるは、富樫が館のやうを、見て参り候はんとまうしければ、  
たま／＼あるともしられて、通るみちの有るによりて、何のせんぞ  
と仰られければ、辨慶申しけるは、中々行てころよく候へ。山伏大  
勢にて通ると聞えば、大勢にておひかけられては、あしく候はんす  
れば、辨慶ばかりまかり候はんとして、笈とつてひつかけて、たゞひ  
どり行きける。とがしが城を見れば、三月三日のことなれば、か  
たはらに鞠小弓のあそび。かたはらには鳥合、又管絃酒盛と打みえ

○鳥合せ、開納な  
り三月三日に行ひ  
し事古くはみはす  
世談等間に見わた  
るや初なるべき



○侍の格、人の踏  
め居る所の様なり

○御内、主人をさ  
し云い

○こふしをにきて  
云々以下の極平家  
物語なり文覚か水  
無瀬にて御遊の際  
に勤進朝よみて風  
暴なせし様に全く  
同一自から事實の  
同じきか或は其の  
段の事を作者の撰  
せしにはあらいか  
○押入烏帽子、掛  
け緒を掛すして頭  
へ入たる盛なる  
事云ふ背の烏帽子  
はやはらかなる故  
頭巾の如く頭へし  
か引入れおまし  
なり

酒にゑひたる所もあり。武藏坊相違なくのうちに入て、侍の様の  
きはを通りて、うちさしの予き見ければ、管絃たゞ今さかりなり。  
武藏坊大の聲をあけて、修行者の候と申しける。管絃の調子もはれ  
にけり。御内たゞ今、機嫌あしく候と申しければ、上つ方こそ候と  
も、御後見の御方にそれ申してたゞ候へやとて、しむてちかく予よ  
りたりける。中間雑色二三人出て、まかり出られ候へと云ひければ、  
聞もいれす。狼藉なり。さらばつかんで出せとて、左右のかいな  
取付てをせどもへせども少もはたらかず。さらば所になをきぞ、放  
逸にあたりて出せとて、大勢ちか付けければ、こふしをにきて、さん  
くにはりければ、或は烏帽子打をさされ、警かへへ、間所に入る  
あり。こゝなる法師のらうせきする予とて、騒動す。富樫の介も、  
大口に押入烏帽子きて、手ばこをつえにつきて、さふらひに予出に  
ける。辨慶是をみて。是御覽せられ候へ、御内の者ども、狼藉し候  
とて、やがて縁にぞのぼりける。富樫これを見て、是は東大寺勤進

○東大寺勤進、重  
衛大佛以下を焼し  
事此頃再興の事あり  
其の勤進の名を  
假りたるなり

○八花形、鏡の周  
りに花の如き形八  
つあるをいふ古鏡  
に多し

○上つおろしつ、  
辨慶の才智を感じ  
て首より足まで返  
すく見る体なり

の山伏にて候。いかに御身一人はおはするぞ。同行の山伏おほく候  
へども、さきさま宮越へとをし候ぬ。是れは御内の勤進のため参り  
て候。おちにて候美作の阿闍梨と申すは、東山道をへて、信濃の  
國へ下り候。此僧は霞岐の阿闍梨と申候が、北陸道にかゝり、越  
後に下り候。御内の勤進はいかやうに候べきを申しければ、富樫よ  
くころ御出候へとて、加賀の上品五十五匹女房の方より、白袴一腰、  
八花形に鑄たる鏡、さては家の子郎黨女房たち、下女に至るまで、  
思ひくゝに勤進に入り。總して冥帳につく百五十人、勤進の物は、  
たゞ今給はるべく候へども、來月中旬に上り候はんずれば、其の時  
給り候はんぞとて、預けをきてぞ出でにける。馬にのせられて宮越ま  
で送られけり。行て判官を尋ね奉れども、見給はず。それより大  
野の邊にて参りあひけり。いかに今まで久しく、いかに仰られけ  
り。たま／＼にもてなされて、夜もすから經をよみなとて、馬に  
てこれまで送られて候と申しければ、武藏を人々、上つ下しつまば



○まつなかの八幡、地理を思ふに、若狭が大夫坊神明に願文か、せて祈りたる社にもあらんか

りける。その日はたけのはしにとまり給ひて、あくれば俱利伽羅山をこえて、はせこえが谷を見給ひて、これは平家のおほく亡びし所にて、あるなるにぞて、各阿彌陀經を讀み、念佛申し、かの亡魂を吊ひて予通られける。ぞかくし給ふ程に、夕日西にかゝりて、たそがれ時にも成りければ、まつなかの八幡の前にして、夜をあかし給ひけり。

如意のわたりにて義經を辨慶うち奉る事

夜もあけければ、如意の城を舟にめして、渡りをせんとし給ふに、渡守をば、平權の頭と申ける。彼れが申しけるは、暫く申すべき事候。これは越中の守護、ちかき所にて候へば、兼て仰せかうふりて候し間、山伏五人三人は、いかに及ばず。十人にならば所へ子細を申さで渡したらんは、ひか事ぞと仰付られて候。すでに十七八人御渡り候へば、怪しくおもひ参らせ候。守護へ其様を申し候て、渡し参らせんと申ければ、武藏坊これを聞て、ねたけに思ひてや、殿さ

○中乗、船の中の照きいよなるへし

りとも、北陸道に、羽黒の設岐坊を、見知らぬ者や有るべき。と申ければ、中乗りに乗りたるおとこ。辨慶をつぐとみて、げにく見参らせたるやう候。おとこしも、上下向ことに、御幣とて申しくだし給りし、御坊やと申ければ、辨慶うれしさに、目よく見られたりくとぞ申ける。權の頭申けるは、こさかしき男の云やうかな。見知り奉りたらば、わ男が計ひに渡し奉れと申ければ、辨慶これをきいて、そもく此なかにころ、九郎判官よ、と名をさしての給へ。と申ければ、あのへさきに、村千鳥の摺の衣めしたるこそ、あやしき思ひ奉れと申ければ、辨慶、あれは加賀の白山よりつれたりし、御坊なり。あの御坊ゆゑに、所々にて人々に怪めらるゝころ、せんなければと云けれども、返辭もせで、空うつふきてお給ひたり。辨慶腹立ちたる姿になりて、はしりよりて、舟ばたを踏へて、御かいなをつかんで、肩にひつかけて、濱に走りあがり、砂の上にかはと投げ捨て、腰なる扇ぬき出し、いたはしげにもなく、つゞけうち、さんぐにぞ打た



○舟賃なし、左有り  
舟賃なしの遊

○舟賃なし、舟  
賃なしの遊

○放逸、あうく  
し遊の遊

りける。見る人、目もあてられざりけり。北の方はあまりの御心う  
さに、聲をたてもかなしむばかりに、思召けれども、さすが人目  
のしげれば、さらぬやうにておはしけり。平権の頭是を見て、す  
べて、羽黒の山伏程、情なきものはなかりけり。判官にてはなしと  
仰らるれば、さてこそ候はんずるに、あれ程にいたはしく、情なく  
うち給へるこそ心うけれ。せんずるところ、是は某か打参らせたる  
杖にてこそ候へ。かゝる御いたはしき事こそ候はね。是に召し候へ  
とせ、舟をさしよする。梶取のせ奉りて申けるは、はや舟賃なしで、  
とし給へといへば、いつのならひに、羽黒山伏の舟賃なしけるやと  
いひければ、日比取たることはなけれども、御坊のあまりに放逸に  
おはすればとて、舟を渡さず。辨慶和殿のやうに、吾等にあたらば、  
出羽の國へ、一年二年の内に、来らぬ事はよもあらじ。坂田の湊は此  
少人の父、坂田次郎殿の領也。たと今あたり返さんずる者どぞ、とお  
としけれども、權の頭なにともの給へ。舟賃とらでは、えこそ渡す

○権子のしんし  
やある、中品なる  
わたひらの遊

まじけれとて、わたさず。辨慶古とられたる例はなけれども、こ  
のひが事したるによつて、取らるゝなりとて、さらはそれたひ候へ  
とて、北の方のき給へる、権子のしんしやうなるを、ぬがせ奉りて、  
渡守にとらせけり。權の頭是を取て申けるは、法にまかせて、取て  
は候へども、あの御坊のいとしければ、参らせんとて、判官殿に  
こそ奉りけれ。武藏坊これを見て、片岡の袖をひかへて、嗚呼かま  
しや、只あれもそれも、同じ事やとさゝやきける。かくて六だうじ  
をこえて、なこの林をさしてあゆみ給ひける。武藏わすれんとすれ  
ども給られずはしりよりて、判官の御たもとに取付て聲をたて、泣  
くく申けるは、いふまで君をかばい参らせんとて、現在の主を打  
奉るぞ。冥見の恐もおそろしや。八幡大菩薩も免し給へ。浅ましき  
世の中かなとて、さしも猛き辨慶も、あしころひ泣きければ、侍と  
も一どころに放居て、消入るやうに、泣きおたり。判官是も人の爲  
ならず。かほとまで果報つたなき義經に、かやうに心ざしおかき面



○三途の川、三途は地獄の鬼を生むに別る、この情状あるなり

○黒部以下越後の地名不詳なるは原本のまゝにす

○めちめさいよ物をかつきけるるはかち海布と云ふ海菜にて海布に似たる物なり我常陸の海にあり今もかちめと呼ぶ

○いまくしく、古くはゆ、しくと云へり不詳不詳との類なり

やの、行末までもいかゞとあもへば、涙のこぼるゝやとて、御袖を濡し給ふ。各此御詞を聞て、なをも袂をしぼりけり。かくする程に日もくれければ、なくくたどり給ひけり。やゝありて北の方、三途の河を渡るこそ、着たるものをはがるゝなれ。すこしも遠はぬ風情とて、響瀬のもりにつき給ふ。其日はこゝにとまり給ひけり。あくれば黒部のやせに、すこし休せ給ひて、くるへ、四十八かせの、わたりをこえ、いちふりしやうと、うたのわき、蒲原なかはしといふところを通りて、いはどのさきといふ所につきて、海士のとまやに宿りをかりて、夜ともにも御物語有りけるに、浦のゝものども、かちめといふものを、かつきけるをみ給て、北の方、かくろおもひつゝけ給ひける。

よものうみなみのよるくきつれともいまだはじめてうきめをば見る。辨慶これを見て、いまくしくみおもひければ、かくぞつゝけ申しける。

うらのみちなみのよるくきつれともいまだはじめてうきめをばみる。かくていはどのさきをも、いで給て、越後の國の、國府なる、直江の津、花園の観音堂と云所に、つき給ふ。此本尊と申すは、八まん殿、阿部の貞任を攻め給ひし時、本國の御祈禱のために、直江の次郎と申しける、有徳のものに仰付て、二十頃の鐘を給ひて、建立し給ひし、源氏重代の本尊なりければ、その夜はそれにてよもすから、御祈念ありける。

直江の津にて笈さがされし事

こゝに越後の國府の守護。鎌倉に上りてなし。浦の代官はらうごんのかみといふものあり。山伏つき給ふとき、浦の者共を催ほして、ろかいなさを、ちぎりき、さいばうにして、網人ともを先とし、理非をも辨まへぬ奴原が二百餘人、観音堂を、れしまきたる。おりふし侍とも、はうく、齋料尋ねに行きければ、判官たゞひとりおはしける所へ押寄す。直江の御堂に騒動する事聞ゆければ、辨慶走

○上りてなし、不在の類なり

○とまき料、食料なり前に註す



○各身不肖なる、  
願しき体にて云  
ふ事なり古事にも  
有る事云ふ事  
また見え成は感  
る事云ひ又如少  
なりぬ者云ふ事  
不肖と云たれと  
も辨弁ひる同若は  
隠遁の詞なり身不  
肖なれ共なとある  
も同し此に所請る  
不肖及不祥とも通  
ずべし  
○す、かきうん云  
々、候の事なり

り合はんといそぐ。判官問答し給ひけるは、きのふまでは羽黒山伏  
との給しが、今は羽黒ちかければ、ひきかへて熊野より、羽黒へ参  
り候が、舟を尋ねてこれに候。先達の御坊は、檀那たづねにおはし  
まして候。これは御留守に候、なに事ぞなと問答し給所に、武藏  
坊、物のかけりたるやうにてぞ、出来り申しけるは、あの笈の中に  
は、三十三鉢の正観音を、京より下り参らせ候が、來月四月の比に  
は、御寶殿に入参らせ候はんすぞ。各身不肖なる体にて、左右な  
くちか付て、權現の御本地汚し給ふな。仰らるべき事あらは、よそ  
にて仰られ候へ。權現を汚し参らせ給ふな。汚がし給ふはとならば、  
笈をすゝがざらんより外は有るまじと、おとしけれども、少しも用  
ゐずして、口々にのゝしりけり。權の頭申しけるは、判官殿みちく  
も陳してとをり給ふこと、其かくれなし。是には今ほぞ守護こる留  
守にて候へども、方のごとくも、こむせうか承て候間、上つ方まで  
聞しめし候はんする事にて候間、かやうに申候。さ候は、御心休めに、

○五尺のかつら、  
長きかもしなり古  
くより女の詞に耻  
かしきまはも心な  
と云ふ如くかつら  
をかもじは云事に  
なりたり

笈一ちやう給て、見参らせ候はんぞ申しければ、是は本尊の渡らせ  
ればしまし候笈を、不肖なるものに、左右なく探させん事、恐れに  
てはあれども。和殿原か疑ひをなし、好む禰なれば、罪をかうあら  
んは己等次第よ。すは見よとて、手にあたる笈一ちやう取て、提出  
す。なにとなく取て出したるが、判官の笈にてぞ有りける。武藏坊  
これを見てあはやと思ひける所に、卅三枚の櫛を取出し。これはい  
かゞと申しければ、兒の髪をばけづらぬかといひければ、權の頭こ  
とはりと思ひければ、傍にさしをきて、唐の鐘を取出しこれは山伏  
の御道具かといへば、兒を具したる旅なればはいの具足を持まじ  
き、いはれかあらばこそといひければ、理とて傍にをき。八尺のか  
けおひ、五尺のかつら、紅の袴、重ねの衣を取出して、これはいか  
に兒の具足にも、かやうのものゝ入候かと申ければ、御不審尤にて  
候、此法師が伯母にて候もの、羽黒山權現の僧のいちにて候がかつら持  
色よきかければ買て下せと申候し程に今度の下りに、持て下り、況は



○す、かざらん  
に、脱せざるん  
はとの強なるも前  
に云るが如し  
○理を曲けて、道  
理なれ共其道理を  
欠きてとの事

せん爲にて候ぞと云ければ、それはさも候はんと申し、左候は、今一ちや  
うの笈を御出し候へ、見候は、やと申す、何挺にてもあれ、心にまか  
せて御覽せよとて、又一挺投げ出す。片岡か笈にてぞありける。此  
笈の中には胃と小手すね當柄もなき銀をぞ入たりける。とかくすれ  
ども、強くからげたり。暗さはくらし解かねとぞ有りける。辨慶は  
手を合せて南無八幡と祈念して、その笈には權現の渡らせ給ひ、返  
すくも不淨にして、罰あたり給ふなと申ければ、御正躰にて渡ら  
せ給は、必ずあけずとも、しるべきとて、笈のかけを、取てしき  
あけて振りたりければ、すねあて銀、がらりひらりとなりければ、權  
の頭胸うちさはき、かゝる事こそ候はね。げにく御正躰にて、渡  
らせ給ひけるをとてそれ受取給へと申しければ、辨慶さればころ、さ  
しもいひつることを、笈すゝがざらんには、左右なく受取り給ふな。  
御坊達といひければ、左右なく受取らずかねて云ぬ事か、すゝがす  
は祈れ、清めには物が多くいらんするぞと云ひければ、權の頭理を

○毛揃へたる、毛  
色の同じきなり

曲げて受取り給へといへば、笈すゝがすは、權の頭が許に御正躰を  
かりすて奉りて、我らは羽黒に参りて、大衆を催ほして、御迎に参  
らんするなりとれとされて、よせたりけるものも一人く散りく  
にぞなりにける。權の頭一人は大事になりて、笈をすゝぎ候はんに  
は、いかやうの事を仕り候ぞといひければ、權現も衆生利益の御慈  
悲なれば、かたのごとくこそあらんすれ、まづ御幣紙の料に、檀紙  
百帖、白米三石三斗、黒米三石三斗、白布百端、紺の布百端、鶯の  
尾百しり、黄金十兩、毛揃へたる馬七疋、荒蕪百枚、これ敷て積て  
進らするならば、かたのごとくなりとも、すゝぎて奉らんとぞ申し  
ける。權の頭、いかに思ひ候とも、極めて貧なるものにて候程に、叶  
ひがたく候ふ、悉くにて候はずとも、方の如く申上げて給候へとて、  
米三石白布卅端、鶯の羽七しり、黄金十兩、毛ろろへたる神馬三疋、  
これよりほかは持たるものも候はず、然るべく申上て給候へと詫ひけ  
れば、いてさらば、權現の神慮を慰め参らせんとて、胃小手すねあ



○般若心經、般若心經を二つに別けて云る也心經とは大般若經の中より擷取する意を抄録したる小般若經の中心と云へる意なり

○國の習は、片岡は常陸の人にて北國の家内は知らぬ故なり

て、鐵など入たる筈に向ひて、禮拜し、なに事を申しむつゝかんくらんぞ、わるくぞ申して、をんころく般若心經などぞ、祈りける。笈を衝劬かして權現に其むね申上候ひぬるの例しなれば、かくはとりをこなひ候ぬ。されは御邊のはからひにて羽黒へとゞけ參らせてたゞ候へとて。權の頭かもとにぞあづけり、さて夜もあければ、かたをる直江の港に下りてみれば、さより渡したりける舟に、とまをもあかす、主もなく、ろかい梶なども有りながら、浪にひかれゆるれぬたり。片岡これを見て天晴ものや、此舟を取て、乗らはやと思ひて、觀音堂に參りて、辨慶にかくと云ければ、いざ、らば此舟に取て乗り、けさのあらしに出さんぞて、港に下り、十余人とりのりて、押出す、めうくわんをんのたけより、おろしたる嵐に、そひかけて、よな山をへて、かくた山をみつめて、あれ見給へや、風はいまだあらし、風弱くならば、ろを添へてをせやとぞ申ける。あをしまの北をみ給へば、白雲のこしを

○白鶴巻、白糸にて巻したるを云なるべし

○八大龍王、海中の王と佛家にいへり法花經提婆品に出たり

はなれて、宙に吹れて出くるを、片岡申けるは、國の習はしらす、此雲ころ風雲と覺ゆれ。いかゞすべきといひもはてねば、北風吹き來て、陸に砂をあげ、沖にはしほをまひてすかきたりける。海士の釣舟浮きぬ、沈みぬをみ給ふにも、我舟もかくそあらめと、思ひ給ふに、心細くして、はるかのおきを漂ひ給ひけり。とてもかなふまじくは、たゞ風に任せよとて、御舟をば佐渡の島へはせ付て、まほろしりもかたへ、舟をよせんとしけれども、浪高くして寄せかねて松陰が浦へはせもて行き、それも白山のたけより下したる、風はげしくして、佐渡の島を放れて、能登の國すゝかみさきへぞ向けたりける。さる程に日もくれがたに成ければ、いと心ずちかひける。御幣をはいて、笈の足に挟みて祈られけるは、天を祭る事は、さる事にて候へ共、此風を和らげて今一度陸に付てともかくもなさせ給へとて、笈の中より白さや巻を取出して、八大龍王に參らせ候とて、海へ入れ給ふ。北の方も紅の袴に唐の鏡に取そへて、龍王に奉るとて、海へ



入させ給ひけり。されども風はやむ事なし。さる程に日もすでにくれぬれば、たそがれ時にもなりにけり。いと心細く覺えける。能登の國ゆするきのたけより、又西風吹て舟を東へむけにける。あはれ、順風やとて、風にまかせて吹れゆく程に、夜も夜半ばかりになれば、風もしづまり、なみも弱ければ、すこし人々心安くて、風をはかりに行くほそに、曉方に、ろこどもしらぬ所に、御船をばせあけて、陸に上りて、とまやに立よりて、こゝをばいづくといふぞと問ければ、越後の國寺泊と申しける。思ふ所に着たるやと悦びて、その夜の内に、くりみといふ所に上りて、みくらまちに宿をかき。あくれば、彌彦の大明神を拜み奉りて、九十九里の濱にかゝりて、かんばらのたちをこねて、八十八里濱などいふ所を、行過て、あらかいの松ばら、いそふねを通りて、せなみといふ所に、ひだりやなく井、みきうつほ、せんかけはしなどいふ、名所くを通り給ひて、念種の關守さびしくて、とをるべきやうもなければ、い

○彌彦の大明神を拜みは不審なり寺泊と彌彦とは大に道をへたてたり此段地名甚不審多かれと煩を厭ひて一々注せず

○子々相傳、代々山伏なりと云る詞

かゝせんと仰られければ、武藏坊申しけるは、多くの難所を通れ、是まておはしましたれば、今は何事か候へき。さりながら用心はせめと、判官をば下す山伏に作りなし。二挺の笈を笠高に持たせ奉り。辨慶大のしもと杖につき、あゆめや法師とて、しどうちて行ければ、關守共これを見て、何事の咎にて、うれほとにさいなみ給ふと申ければ、辨慶答へけるは、これは熊野の山伏にて候が、これに候ふ山伏は、子々相傳のものにて候が、彼奴をうしなふて候つるに、此程見付て候間、いかなる咎ものあて、くれうす候。たれか咎め給ふべきとて、いよくひまなく打てぞ返りける。關守どもこれを見てなんなく木戸をあけて予通しける。程なく羽出の國へ入給ふ。其日はらかいといふ所に、つき給ひて、あくればかさどり山などいふ所を、過ぎ給ひて、たかはのこほり、三世の藥師堂に付給ふ。これにて雨あり水まさりければ、二三日御どうりうありけり。こゝよたかはのこほりの領主、たかはの太郎實房といふものなり、若かりし時より



○君こそ不淨に、  
我程は今も妻帯な  
る故なり

あまた子を持たりけるが、みなさきたて、十三になる子一人もち  
たりけるが、ぎやへいをして、萬事限りになりけり。羽黒ちかき所  
なれば、然るべき山伏など請じて祈られければ、その願もなし。  
山伏たちおはするよしを傳へきて、郎黨共に申しけるは、熊野羽  
黒とて、いづれも威光はをどらせ給はぬことなれども、熊野の權現  
と申は、今一しほ尊とて御事なれば、行者達もさこそおはすらん。請  
じ奉りて、願者一座させ奉りて見ばやとぞ申しける。妻女子のい  
たはしさに、いそぎ御使を參らせ給へとて、實房が代官大内三郎と  
いふものを、三世の薬師堂へ參らする、客僧達へかく申しければ、  
判官仰せられけるは、請用は得たけれども、我が不淨の身にては、  
何を祈りても、その願やあるべき。せんもなからぬものゆへに、行  
きても何かせんと仰せられければ、武藏坊申けるは、君こそ不淨に  
わたらせ給へ。我らは都を出しより、精進潔齋もよく候へば、たと  
ひ願徳の程はなくとも、我が祈り候はん景氣のおそろしさに、な

○親の心云々、親  
子の間と雖も心  
中は重り難き物  
との感ありしを云  
るなり

とと惡靈も死靈も、願れざるべき。たまくの請用にて候に、たゞ  
御出候へかしと申して、各よりあひ笑ひ戯ふれば、これは秀衡  
が知行の所にて候へば、定めてこれも祇候のものにて候はぬ。何か  
苦しく候はん。知せさせ給へと申ければ、辨慶きよて、あはれやと  
の、親の心を子しらすとて、人の心はしりがたし。自然の事あらば、  
後悔なきにたつへからず。君の御下着の後、實房參らぬ事はあらじ。  
其時のもいぬにも、しらすべからずとぞ申しける。さて祈りては、  
たれをかすべき。こしんはきみ、珠數をしもみて候はんためには、辨  
慶にすぎ候まじとて、出立給ひけり。御供には武藏坊、常陸坊、片  
岡十郎、權の頭、四人たがはがもとへ入せ給ふ。持佛堂にいれ奉る。  
たがはげんさんに入り。子をばめのとに介しやくせさせて具して  
ぞ出來りたる。願者はしめ給ふによりまはしに、十二三はかり成る、  
童をぞめされける。判官こしんし給へば、辨慶珠數をしもみける。此  
人を祈り給けるけしき、心中のおそろしさにや、口はしる。へいは

○こしん、隨身な  
り



○砂金、未だ金貨に鑄して金塊の土砂と和してあるを此類雜物とせし事ありし也

くも静まりければ、悪靈も死靈も立ち上り、病人即ち平愈す。驗者いよくたつとくぞ見ぬ給ふ。其日はとゞめ奉りけり。日々をこりけるぎやへいは、今は左右なし、いとゞ信心まさり、きゑつなのみならず。かりそめなれとも、権現の御威光の程も思ひしられて、尊く思召けり。御祈の布施とて、鹿毛なる馬に黒鞍おきて参らせける。砂金百兩、國の習ひ候とて、鷲の羽百しり、殘る四人の山伏に、小袖一重つゝ参らせて、三世の藥師堂へ送り奉る、使かへりけるに、御布施給はり候事は、さることに候へ共、これもたうの習にて候へば、羽黒山に暫く参籠候はんすれば、下向の時給はるべく、其間預け申候べしとて、返されけり。かくてたがはをも立給ひ大泉の莊大ほんじをとをらせ給ひ。羽黒の御山、よそにて拜み給ふにも、御参籠の御心ざしはおはしましけれとも、御産の月すでに此月に當らせ給ふに、萬おそれをなして、辨慶計り御代官に参らせらる。殘りの人々にはつけの、たかうらへかゝりて、きよ河につき給ふ。辨慶はあ

○代官、代参なり

○みたりし、御前  
に参る海河等や  
よ

○なれこまひ、前  
の芳野山の橋に注  
す

○月影のみちする  
は云々、今様歌の  
曲とまこゆ

○せんじやう、山  
上なり

けなみ山にかゝりて、よかはへ参りてあふ。うの夜は五所の王子の御前に、一夜御通夜あり。此きよ河と申は、羽黒権現のみたらしなり。つき山のせんぢやうより、北のこしにながれたちけり。熊野には、いはだ河、羽黒にきよ河とて、ながれきよき名河なり。是にてこりをかき、権現をおしおがみ奉る。虫の罪障も消滅するなれば、こゝにては王子の御前にて、御神樂など参らせて、思ひくのなれこまひし給へは、夜はほのくどあけにけり。やがて御船にのり給ひて、きよ川の船頭をいや權の頭とぞ申。御船支度して参らせける。みなかみは雪するみかさまりて、御舟を上せかねてありける。これや此はる、ちうさのせうくしやうのさらしまといふ所に流されて、月影のみよするは、たなかい河の、みなかみいな舟のいつらしかはもかみ河のはやきせす、こどもしらぬひばの聲、かすみのひまに紛れるとらたひしも、今こそ思ひしられけれ。かくて御舟をのほする程に、せんぢやうよりおちたきる瀧あり。北の方、これをばな



この瀬といふと、とひ給へば、白糸の瀬と申しければ、北の方か  
くぞつ、け給ふ。

もがみ河せ、のいはなみせきとめよらでぞとるしらいどの  
たき

もがみかはいはこすなみに月さえてよるおもしろきしらいどのた  
き、と口ずさみつ、鏡の明神、胃の明神おかみ参らせて、たかや  
りのせと申なん所を、上せ頼ひておはする所に、上の山のはに、後  
のこゑのしけ、れば、北の方かくろつ、け給ひける、

ひきまはすうちには、ゆみにあらねどもたかやてさるをいてみつ  
るかな。かくてさし上せ給ふ程に、見るたから、竹くらへの杉、な  
とといふ所を見給ひて、やむけの大明神をおし拜み奉り、あい河の  
津に付給ふ。判官よりみちは、二日なるが、濠にかゝりては、三日  
にまはる道にて候に、龜割山をこへて、へむらのさど、あねはの松  
へ出ては、すくに候。いづれをか御覽して、とをらせ給ふべきと、

仰られければ、名所くをみたければ、一日もちかく候なれば、  
かめわり山とやらんに、かゝりてこそゆかめとて、かめわり山へぞ、  
かゝり給ひける。

龜割山にて御さんの事

おのく龜割山をこえ給ふに、北の方御身をいたはり給ふ事あり。  
御産ちかくなりければ、兼房心くるしくぞ思ひける。山深くなるま  
ゝに、いと、絶入給へば、時々はもり奉りて行く。麓の里遠ければ、  
一夜の宿を取へき所もなし。山のたうげにて、道のほとり二町ばか  
りわけ入て、大木のもとに敷皮をしき、木のもとを御産所と定めて、  
やどし参らせけり。いよく御苦痛を責めければ、つゝまじさるは  
や除れさせ給ひて、息ふき出して、人を近くてかなふまじ、とほく  
のけよと仰られければ、さふらひ共、みなこ、かしてへ立のきけり。  
御身ちかくは、十郎權の頭、判官殿ばかり予おはしける。北の方こ  
れとて心やすかるべきにはあらねども、せめてはちからをよばす

○御苦痛を責め、  
苦痛切迫するをい  
ふ

○是とて心やす